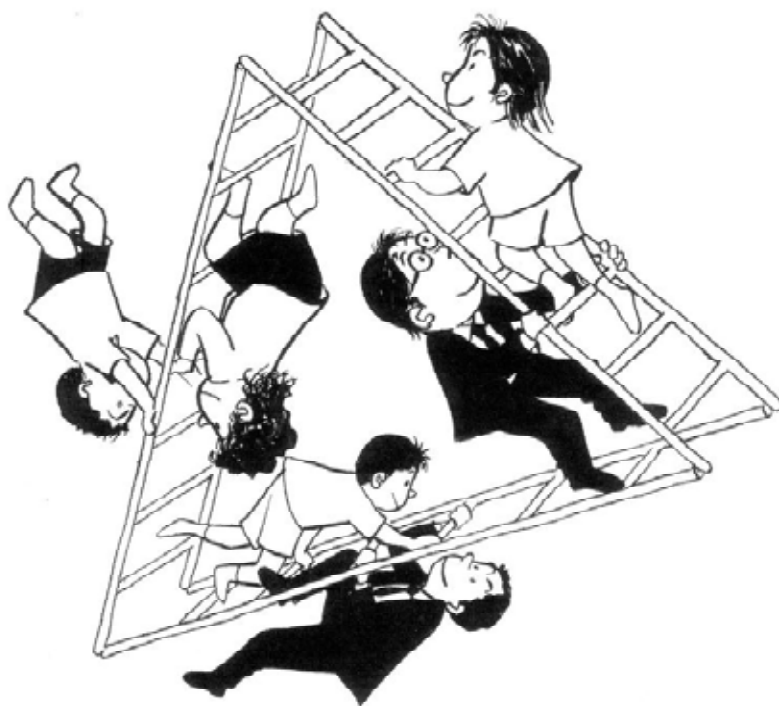


# 子どもと大人の参画関係

～ 子ども・若者が主体的に参画するための活動事例集 ～



平成 17 年 3 月

神奈川県青少年指導者養成協議会

## 「かながわ青少年支援・指導者育成指針」による定義

### 『青少年支援・指導者』について

ここで言う『青少年支援・指導者』とは、例えば親や地域の大人などを含めた青少年に関わるすべての大人を指しているのではなく、青少年活動や地域活動で実際に青少年を支援するあるいは指導する大人・若者を指しています。

### 『青少年』『子ども』『若者』について

ここで言う『青少年』とは概ね 30 歳未満の子ども・若者のことを言います。また『子ども』は学童期までとし、『若者』は中高生以降を指しています。

この事例集では、『子ども』『若者』について、上記のような定義としておりますが、取材先の代表者による原稿などでは異なる表現のものもあります。

## はじめに

青少年センターでは平成 16 年 4 月に青少年支援部を設置し、今まで青少年総合研修センターが事務局として取り組んできた神奈川県青少年指導者養成協議会の実績を踏まえて、県・市町村・青少年関係団体の連携のもと、青少年の健全育成に努めているところです。

家庭・学校・地域など社会環境が大きく変わる中、青少年がごく自然に社会体験を通して、人と人のつながりを構築できる力を養うことは、青少年が自立していく上で大切なことです。

平成 16 年 3 月に策定された「かながわ青少年支援・指導者育成指針」(以下、指針)は青少年を育成するにあたり、「多様な体験学習の促進」「主体的な参画の促進」「社会的自立の支援」という 3 本柱のもと、指導から支援・指導へと指導者の育成にあたって新たな視点を模索しております。

「青少年に寄り添い、一緒になって考える」という役割はこれからは家庭でも地域でも、ますます必要になってくるものと思われます。

そこで、本協議会では、指針を具体的に実践していく上での事例を集めるため専門部会を設置して、県内県外各地で実際に行われている事例の収集に取り組んで参りました。

キャンプ、交流会、成人式、まつり、イベント等、内容は様々で、関わった子ども・若者の成長の度合いや大人との関係によって、参画の段階は異なりますが、子ども・若者が主体的に参画する活動事例が各方面から集まりました。お忙しい中、調査・取材に御協力いただいた関係機関、団体、個人の皆様に心から御礼申し上げます。

この事例集が青少年と関わる多くの方々に利用され、子どもとの関係を考える上での一助となることを願っています。

最後になりましたが、この事例集の作成にあたり、専門部会委員の皆様に変な御苦労をおかけいたしました。謹んで感謝申し上げます。

平成 17 年 3 月

神奈川県青少年指導者養成協議会  
会 長 小宮 久雄

# 目次

## はじめに

子ども・若者が主体的に参画する活動と大人の関わりについて・・・1
神奈川大学講師 久田 邦明

## 活動事例紹介

『フリースペースえん』・・・5
特定非営利活動法人 フリースペースたまりば 理事長 西野 博之
『片倉うさぎ山プレイパーク』・・・10
片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会 瀬嵐 理恵
『かながわユースボランティアりんぐファクトリー in 神奈川』・・・14
かながわユースボランティアりんぐファクトリー 代表 刀祢 いずみ
『藤沢ダンス MIX Ver.6 実行委員会』・・・17
藤沢ダンスMIX Ver.6 実行委員長 畠山 昭子
『アウトドア活動教室』・・・21
港北区ジュニアリーダーズクラブ 会長 関口 秀雄
『WAVE 桜』・・・25
『WAVE 桜』 編集長 山本 智之
『チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン』・・・28
特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター理事 若者ライン担当
『町田市子どもセンター ばあん 子ども委員会』・・・33
町田市子どもセンター ばあん 子ども委員会委員長 草野 大輔
『横浜市青少年交流センター 青少年委員会』・・・39
横浜市青少年交流センター 青少年委員会委員長 森 正憲
『チャレンジショップ Gestore おだわら』(取材のみ)・・・46

## 調査による活動事例一覧

1 「子ども・若者が主体的に参画した事業・活動について」 の調査結果について・・・51
2 調査結果のまとめ・・・53
3 活動事例 83・・・55

## 資料

かながわ青少年支援・指導者育成指針・・・99
児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)について・・・105

活動事例分類一覧表(参考にしたい事例をお探しの方はここを御覧ください)・・・110
---

参考文献・・・114
------------

編集後記・・・115
------------

# 子ども・若者が主体的に参画する活動と 大人の関わりについて

この章では、以下の点について述べています。

子ども・若者が主体的に参画する活動の中で、  
大人は子ども・若者とどのように関わればよい  
のか

子ども・若者が主体的に参画することで、子ども  
も・若者は体験的にどんなことを学ぶことができ  
るのか

子ども・若者が主体的に参画することで、子ども  
の成長にどのように影響するのか

子ども・若者が社会的に自立するために、大人  
はどのような支援ができるのか



# 子ども・若者が主体的に参画する活動と大人の関わりについて

神奈川大学講師 久田 邦明

## 子ども・若者の参画への視点

子ども・若者が中心的な役割を担う地域活動は、30年ほど前まで広く普通に行われていました。このことをまず確認しておきたいと思います。

その一例として、県西部で行われているどんど焼き(道祖神の行事)などの伝統行事があげられます。松田町のある地区では、毎年1月14日、「がき大将」と呼ばれる中学2年生のリーダーが中心となって、どんど焼きが行われています。子ども会の育成者や自治会の世話役の大人が取り仕切っているところが多いのですが、ほんの少し時代をさかのぼると、この事例にみられるように、子ども・若者が中心となる伝統行事や伝統芸能が、どの地域でも行われていました。そして、その体験を通して、子ども・若者は大人へと成長していったのです。その意味で、地域の暮らしに埋め込まれた、子ども・若者を育てるための知恵といえるものでしょう。

それが急速に失われたのは、この2,30年のことです。その後、子ども・若者を育てる役割は、もっぱら学校教育に任されるようになりました。それでうまくいくと、多くの人が思ったのですが、最近では、学校を支える地域の教育力が衰弱すると共に学校教育にも限界のあることが明らかとなり、あらためて学校と地域の協力の必要がいわれるようになっていきます。

このような経緯を承知しておく必要があります。ただ、そうはいっても、昔のことを懐かしがって伝統文化の復活を唱えても仕方ありません。家業と地域の生産活動が失われたなかでは、お題目に終わるだけでしょう。また、前近代社会では生活共同体の決まりごとが、子ども・若者の行動を厳しく規制していた事実を忘れるわけにはいきません。いずれにしても身勝手な復古主義は、過去の歴史を恣意的に切り取ることになるでしょう。

そうであるとすれば、地域の暮らしの知恵に学びつつも、そこに止まることなく、子ども・若者が育つための支援の方法を工夫していかなければなりません。地域の暮らしに埋め込まれた知恵に学びつつ、新しい方法を工夫するという課題は、子ども・若者の分野だけのものではないでしょう。地域の暮らしの仕組みが失われたにもかかわらず、いまだに新しい仕組みが整っていない、時代のはざまに生きる者にとって、暮らしの全体に関わる切実な課題です。このように考えると、この活動事例集に取り上げられた事例は、子ども・若者を支援する活動であると共に、それだけでなく、地域の暮らしを創造しようとする活動でもあるといえるでしょう。

## 子ども・若者と大人の関係を見直す

それにしても、子ども・若者のなかでは大人が頭を抱え込むような問題が広がっています。社会的な関心を持たないまま身近な世界に閉じこもり、まるで自家中毒のような症状に陥っている子ども・若者も少なくありません。彼らのあいだでは、ごく身近な人間関係さえ忌避する姿が目立ちます。そればかりか、いざ社会へ出る年頃になっても、「やりたいことが分からない」といって戸惑う若者たちも珍しくなくなっています。

これには多くの原因があるのですが、まずもって見ておかなければならないのは、子ども・若者への大人の対応をめぐる問題でしょう。というのも、高度経済成長期以降、大人は、子ども・若者の日常生活から様々な体験の機会を奪ってきました。あらためて考えてみると、これは実に驚くべき変化です。もし大人が、このことの重大さに気づいていないとすれば、それこそが深刻な問題です。

例えば、こういうことがあります。いつの頃からか、大人は、子どもは聞き分けが良いのが当たり前、若者は行儀が良いのが当たり前と考えるようになりました。子ども・若者は、その完成した姿を基準として評価されるよ

うになり、そのせいで、ほんの少しの逸脱的なふるまいも、いちいちチェックされ、厳しくマイナスの評価が下されるようになっていきます。失敗を重ねながら学んでいくという、子ども・若者に必要な機会さえ与えられていないのです。いつもいつも引き算の評価をされているのは、評価される側としては、たまったものではないでしょう。

今必要とされるのは、地域の暮らしに子ども・若者が中心となって活動する機会を用意することです。そういうところで彼らが失敗することもあるでしょう。しかし、その体験を通して、彼らは多くのことを学んでいくにちがひありません。大人に求められるているのは、そのための条件をつくり、子ども・若者の活動を支援する役割です。

ところで、これまでも、子ども会をはじめとする様々な青少年団体が、子ども・若者に活動の場を提供してきました。また、青少年育成関係委員などの地域の人々も、子ども・若者の活動を支援してきました。これらの活動は、地域に無関心な住民が増えるなかで、なくてはならない活動です。しかしその一方で、多くのところで団体活動や育成活動の難しさが言われています。このことに注目しないわけにはいきません。

おそらく問題はこういうことなのでしょう。団体育成が中心の従来の活動プログラムは、生活共同体の暮らしの記憶が、子ども・若者のあいだに残っていた時期に考案されたものです。その時期には隣近所の付き合いも今日ほどよそよそしいものではなかったし、子どもの数も多く、兄弟姉妹もいました。異年齢集団は失われていたかもしれませんが、同年齢の遊び仲間がありました。そういうところで様々な体験を積むことができました。生活共同体は失われていても、その記憶が残っていたということです。

そんなわけで、青少年育成の活動も、彼らが自分たちの世界で身につけてきた体験に依拠することができました。ところが、もはやそのような条件を想定することはできなくなっています。友だちとざっくばらんに話しをするとか、夢中になって一緒に遊ぶとかいうことを体験したことがないのが、今日の子どもの姿なのです。そのせいで、青少年育成の活動プログラムも空転してしまうことが多いのではないのでしょうか。このような状況の変化を確認して、青少年育成の活動プログラムを大胆に変えていく必要があります。

#### わたしたちの未来を失わないために

居場所づくりの必要が盛んに言われるようになったのも、このような問題意識のせいでしょう。居場所づくりをなぜわざわざ大人がやらなければならないのかと疑問を持つ人もいるかもしれませんが、地域の暮らしに子ども・若者の世界が失われたせいで、大人がそれを意識的につくらなければならなくなっているのです。

子ども・若者の現状に対応する新しいタイプの活動プログラムには、およそ居場所づくりの方法が組み込まれていると見ることができます。それを一言でいえば、大人が余計なお節介を焼かないというものです。子ども・若者の支援をすすめるには、居場所づくりにおける大人のこのような関わり方が参考になります。熱心な善意の大人にかぎって、あれやこれやお節介を焼くことが多いようです。そういう関わり方は空転するおそれが大きいでしょう。子ども・若者が様々な課題に立ち向かうことを期待するとすれば、大人はお節介を焼くのではなく、居場所づくりの場合と同じように、何よりもまず、ゆったりと構えて待つことを自分の役割と承知しておくべきです。

また、体験学習の必要が言われるのも、同じような問題意識にもとづくものでしょう。学校教育が陥りがちな抽象的な知識の学習の限界をみて、人々が暮らす地域へ出て、頭だけでなく、こころやからだも使って学ぶという、この学習方法に期待がかけられるようになっているのです。

ただしその場合にも注意が必要です。大人がお膳立てをした活動プログラムを、子ども・若者がまるで演技者のようにやってみせるといった受け身のやり方では意味がありません。事前の計画の段階から活動を終えたあとの評価の段階に至るまでの全体を、子ども・若者が主体的に担うという、それこそ参画と呼ぶにふさわしい活動でなければなりません。そういう意味を持った活動であれば、仮にそれが大人の常識を超えるような

型破りのものであったとしても、学習としての意味を持ちます。

子ども・若者が参画する活動は、彼らのなかの年長者にとって、とりわけ大きな意味を持ちます。このことを特に強調しておきたいと思います。彼らがリーダーシップを発揮することによって、大人になる準備をすることになるからです。小・中・高校と学校別に分けられる学校教育の場合、この仕組みをとるには特別な手続きが必要となりますが、地域のなかでは容易にやっつけることができます。

それにしても、このような活動は、大人にとって手間のかかることです。昔のように、子ども・若者の面倒をみる仕組みが地域の暮らしのなかに組み込まれていた時代には、大人は当たり前のようにそれを引き受けてきました。ところが、その仕組みが失われてしまった現在では、大人は意識的に関わる必要があります。そこでは当然にも、いろいろと苦労が多くなります。しかし、これをやらないと、子ども・若者は大人になることができません。わたしたちは未来を失うことになるでしょう。

大人にできることは

それでは、大人は、具体的にどうしたらよいのでしょうか。

子ども・若者が主体的に関わることによって自分の力を試すことのできる機会をつくるためには、大人の考え方や関わり方を、その基本のところから問い直す必要があります。

まず第一に、参画をお守りことばのように使うことには、特に慎重にならなければなりません。「操り参画」とか「お飾り参画」とかという言葉もあるように、参画がお題目に終わるおそれが大きいからです。

子ども・若者の自主性を尊重すると言いながら、陰に陽に口を挟んで彼らを操るようなことをやっていないでしょうか。また、意見を聞きたいといって彼らを集めておきながら、彼らの意見に答えることもなく、聞きっぱなしにしていないでしょうか。大人の自己満足に終わるだけのこのような活動を続けていれば、そのうち彼らに愛想を尽かされるようになるでしょう。

第二に、子ども・若者が力を発揮することのできる分野について、あらかじめ率直に提示しておく必要があります。大人は自分の主観的な願望と現実的な条件を混同してはいけません。たとえ善意からであっても「何でもできる」などと言って、彼らに空しい期待を抱かせるべきではありません。「ここからここまでは大人が引き受ける」という枠組みを明示した上で、子ども・若者の活動の可能性について伝えるのです。このような率直さは、特別のことではなく、人間関係一般に共通する最低の礼儀ではないでしょうか。

「何でも思ったようにやりなさい」と言いながら、いざとなると「これはだめ、あれはだめ」と文句を言うようなやり方を続けていては、大人への不信感を増幅させるだけです。これを避けるには、大人は自分の力を承知しておかなければなりません。自分の人間の幅がどれくらいかをよく知っておくのです。力不足を恥じる必要はないと思います。恥じるべきは、大人が自分の力の限界を知らないことです。力の限界を知っていれば、徐々にそれを広げることができます。また、活動が壁に突き当たったときには、子ども・若者と一緒に知恵を出し合い、その壁を乗り越える工夫を続ければよいのです。

第三に、これからどのような暮らしを望むのか、この「まち」をどうするのかについて考える必要があります。住み良い地域社会をつくることこそが、地域の大人の課題なのです。

まちづくりという大人の課題を忘れて、一方的に子ども・若者に働きかけるだけでは、どれほど立派なことを言ってみても、ただのお説教に終わるでしょう。お説教にかまける大人の姿を見る子ども・若者は、未来に希望を持つことができません。

まちづくりについて、大人は、子ども・若者との関係のなかで多くのことを教えてもらうことになるにちがいありません。今、時代は大きな転換期を迎えています。能率主義や生産第一主義を前提とする固定観念に囚わ



れる大人が、子ども・若者との付き合いの過程で気づかされることは多いでしょう。その結果として、大人と子どもの関係が変わって、ことあらためて子ども・若者の参画ということばを使う必要のない地域の暮らしが実現することが期待されます。特別の活動プログラムを実施するまでもなく、日常生活のなかで子ども・若者が身近な大人と力を合わせて協働の関係を生み出すことこそが求められているのです。

最後にもう一つ、言わずもがなのことを付け加えておきたいと思います。本気で子ども・若者の活動に関わってきた人には先刻ご承知のことでしょうが、彼らと関わる大人には、大なり小なり“腹をくくると”いう覚悟が求められるということです。子ども・若者との関係は、機械操作や接客方法のマニュアル(手引き書)に収まるようなものではありません。マニュアルが不要だという意味ではありません。ここで言いたいのは、そういうことではなく、子ども・若者との関係には、それらしい一般論で説明することの難しいレベルの問題があるということです。そのために、ギリギリのところでは、腹をくくと形容するしかない覚悟が、大人に求められます。

これは誰にでもできることではないでしょうが、世の中はうまくしたもので、このような課題をすすんで引き受ける大人が、どの地域にも必ずいます。そういう人物の存在を貴重な財産として、間違っても敬遠したりすることなく、“できる人が、できることをやる”という方法を工夫して、多様な立場や関心の人々が互いに協力しながら、子ども・若者の参画を追求していく必要があります。

#### 参考資料

- ・沼田芳宏「道祖神の祭りから子どもを取り巻く地域を考える」『青少年』2004年10月号。
- ・ロジャー・ハート、木下勇／田中治彦／南博文監修、IPA日本支部訳『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年。
- ・『子ども・若者が主体的に関わる活動事例 32』社団法人青少年育成国民会議、2001年。
- ・『社会つながりガイド for K-teens』神奈川県青少年総合研修センター、2003年。

#### 久田 邦明 氏 プロフィール

神奈川大学、東京学芸大学などで社会教育関連科目を担当。雑誌『青少年』（社団法人青少年育成国民会議）編集委員。専門は、青少年教育、地域文化論。神奈川県青少年問題協議会では「『働く』という視点から考える青少年の自立について」というテーマで検討を続けている。



## 活動事例紹介

子ども・若者が主体的に参画する活動事例の中で、「若者が自らテーマを選び取り、活動を開始した事例」「大人が仕掛け、子ども・若者が大人の支援を受けながらも徐々に参画の度合いを高めていっている事例」について取材をしました。

この章ではそれらの10事例について、代表者や活動の中心となっている若者にその団体及び活動の概要等を執筆していただいたり、取材させていただいた内容をQ&A形式でまとめたりしました。



# フリースペースえん



フリースペースえんは、川崎市の委託を受けて『NPO法人フリースペースたまりば』が運営している公設民営の子どもたちの居場所です。主として学校の中に自分の居場所を見出せない不登校の子どもたちや発達障害・精神障害・非行傾向の若者たちが通ってきます。その年齢層は6歳から30代後半までと幅広くなっています。

特定非営利活動法人 フリースペースたまりば  
理事長 西野博之

## フリースペースえんの活動とミーティング

フリースペースえん(以下「えん」)の居場所づくりで大事にしていることは、「自分は何がしたいか」に気づくことにあります。あらかじめ用意されたプログラムやカリキュラムを持たないようにしています。その日「えん」に来る来ないも自分で決めます。来てからその日一日を、何をして誰とどう過ごすのか、それも自分で決めます。原則としてスタッフは子どもから相談や依頼を受けない限り、口出しや手出しをしないことにしています。

一日の平均利用者数は 30 人～ 40 人です。様々な背景をもつ異年齢の青少年が過ごしあう場では、ミーティングが重要な位置付けを持っています。週一回月曜日の昼食後に開かれるショートミーティングと、月一回 90 分くらいの時間をかけて開かれるお茶会ミーティングが定期開催のものです。この場で子どもたちはいま自分がやりたいと思っている企画を提案し、「この指とまれ」で仲間を集めます。「グラウンド借りて野球をしよう」「たき火をしながらバーンクーヘンを焼こう」「水晶を探しにでかけよう」「化石を発掘したい」など、毎月いろいろなプランが持ちよられます。今では恒例の年間行事になっている夏合宿やスキー合宿、フェスティバルなども、毎年このミーティングにかけられ、場所の選定から日程や内容に至るまですべて子どもたちとスタッフが一緒の話し合いで決められます。子どもも大人(スタッフ)も一人一票を持っています。形式にはこだわらず、

司会は子どもの時もあれば大人のときもあります。ここで最も気をつけているのは「言いたいことが言える」ということです。裏を返せば発言の内容で馬鹿にされたり、否定されたりしないということです。その子の成長段階や障害に応じてスタッフがそばについたり、コミュニケーションの仲介をすることもあります。小学生から 30 代のひきこもり傾向の若者までが一緒に参加します。子どもの参画を進めるにあたって、子どもの話を聴く、思いを受け止めるということは、何よりも重要です。スタッフは長い時間をかけて子どもたちが発言しやすい環境づくりに努力してきました。「〇歳になってこんなことも知らない」「歳になってこんな話し方をする」「歳になってこれくらいのこともできない」など、「世間の常識」や「ふつう・あたりまえ」など評価の眼差しを持ちこむと、とたんに子どもは口を閉ざし、動かなくなってしまう。「上手に話ができだね」といった誉め方もしません。うまい・下手などの評価は抜きにして、自分の思いを安心して他者に伝えられる関係づくりがまず基本です。

また子どもの参加は「失敗」を抜きにしては考えられません。失敗を積み重ねる中で、いろいろな気づきに出会います。失敗しても大丈夫という安心感が広がってくると、何事にも子どもたちは生き生きと積極的に取り組むようになるということを、長年、子どもたちから教えられてきました。私たちスタッフが作った「スタッフ心得 15 か条」の一つに、「正しいことは遠慮がちに言おう」というのがあります。人は正論を語ろうとするとつい力が入ってしまいます。まして大人と子どもの関係においては、強い調子で発せられる大人の言葉は、時として威圧的になってしまいます。子ども自身が何をどう間違えたのかを考えるチャンスすら奪ってしまい、新しいことに挑戦することに臆病な子どもたちを作りかねないのです。

あと一つあります。参画を促す際に忘れてならないのは、どんな小さな提案であれ、ミーティングに出されたことをきちんと受けとめ、ミーティング後もその実現や問題解決に向けて具体的に協力してできることから始めてみることです。また、明らかに実現不可能な提案は、ミーティングの段階で聞き流さず、話を最後まで聞いたうえで、その実現のためにクリアしなければならない課題を共有していくように努める必要があります。できる・できないを本人が自分で判断できるように、情報を提供することを忘れてはなりません。自分の意見が聞き流されたり、何も着手されずに放置されたままにされたり、途中から一方的に無理だと言われたりといった経験が積み重なると、当然のことながら、あらゆる場面で参画から遠のいていくこととなります。

## 「壁に絵を描こう」プロジェクト

次に最近の身近な実践の中で、具体的な参画の活動例をとりあげてみたいと思います。

それはある日、少女のつぶやきから始まりました。「ねえ、えんの壁に絵を描かない」川崎市が 10 年 20 年かけて作り続けると宣言して建設された川崎市子ども夢パークです。その建物部分は殺風景なコンクリート打ちっばなしの柱と壁でできています。「えん」に通う子どもたちはここで活動を開始したときから、口々に色を塗りたいと言っていました。「えん」の開設からまもなく一年が経とうとしていた 2004 年 6 月のある日のミーティングで、子どもから「どうせなら絵を描いちゃおうよ」という提案が出されました。これを受けてアートの講座を組んでいる仲間が集まって、図案の検討が始まりました。「夏だからハデなのがいいよ」「カッコイイのがいい」「あんまり細かいと難しいかもよ」などと言いながら、次々に下絵が描かれていきます。相談の末、ポップな色合いと素朴な



表情が人気を集めた 10 代の少年の鳥の絵と、抽象度の高い不思議な模様を描いた 20 代の女性の絵が組み合わされて、ひとつの図案がまとまることになりました。

さて下絵はできたものの、「えん」の入口横の壁は大きいのです。紐を使って採寸してみると、高さ 4.2 m、横 7.3 m もありました。「壁の高いところには、どうやって色を塗ったらいいのだろう」、これがまず大きな課題でした。子どもたちから出された案は、同じ高さの脚立をふたつ並べて、そのうえに板を渡し、足場を皆で押さえながら色を塗ろうという案でした。でもこれだと高いところには届かないし、微妙な高さの調節ができず、かなり作業がしにくくなります。あーでもない、こーでもないと頭を悩ませていたところに、たまたま遊びに来たのが、たまりば O B の 17 才のサトルでした。小学校の時から不登校でしたが、家にこもっていた時期に自宅の外壁の塗装に来ていた業者の仕事っぷりに出会い、15 歳で弟子入りさせてもらい、今はペンキ塗りの若い職人として働いています。天気の関係で仕事がキャンセルになり作業ズボンの姿でやってきたサトルを子どもたちが見逃すわけがありません。さっそくサトルに相談しました。「足場はなんとかできるかも」、そしてサトルはその場で親方に電話で交渉しました。雨の日(仕事の無い日)にトラックを運転できる人を連れてくれば、パイプ・ジョイント・足場の板・保護用のネットなどすべてタダでなんとかしてくれるというありがたい話に展開しました。運転手だけはようやくスタッフの出番でした。結局、足場の材料を運び込んできた日に、その勢いそのまま 17 歳のサトルが一人で足場を組んでしまいました。小・中学生でも塗れるようにと、3 段組にして、保護ネットをしっかりと張りめぐらせてくれました。あっという間の 2 時間でした。その働く姿に 10 代の若者たちからは羨望の眼差しが注がれていました。「カッコイイという言葉はこういう時に使うんだね。」仲間のサトルが組んだ足場に触発された 18 歳のノリと 15 歳のアラシは俄然やる気を出して、まずは壁の水洗いを始めました。これに 14 歳のミギワやスタッフも加わって、全身びしょ濡れになってたわしでゴシゴシとやりました。

次の問題は下絵を壁にどう写すかでした。話し合いの末、まずは壁にビニール紐で縦横 50cm のマス目をつけました。次に縮尺を考えながら原画に同じ数のマス目を書き、その中に番号をつけました。年上の子が段取りを説明して、何番のマスにどのような線を描くか、一人ひとりが確認しました。当初の案ではビニールテープで下絵のラインをつける予定でしたが、すぐにはがれてしまうので、大胆にも原画を見ながら一気にペンキで輪郭を描くことになりました。

この段階ではまだ原画に色はついていませんでした。「どんな色をつけるか」、原画をスキャナーで取り込んだ 15 歳のトウコがパソコンを使って、色づけし、みんなに提案しました。明るい配色の画像が好評で、ここから作業は一気に加速しました。小さい子でも塗れるように壁にキロ・アカと鉛筆で印を付けました。10 代の人を中心にあっという間に 20 人以上の子ども・若者が参加しました。作業は自分のやりたいところを分担して受け持つことに決まりました。ムラのあるところを重ね塗りする人、細かい模様を描く人、鉛筆の線を消す人などなどでした。毎日作業が終わると、「この壁塗りに参加していない他の子たちが遊びで足場に登ってケガをしないように」、きっちりとネットを張って安全確認をしていたノリ。その姿はまさに現場監督のようでした。誰に言われたわけでもないのに、みんな翌日の作業のために毎日筆洗いやペンキの管理、後片付けを率先して行いました。朝は必ず 10 時半に数人の人が集まって、自主的にその日の作業の打ち合わせをしました。10 代の年長者が小学生に作業を教えました。さながら工事現場のような本格的な作業でした。ちょっと危険、でもチャレンジしたくなるような作業を、10 代の若者たちに任せたとのこと、一番わかっていそうな子どもに主導権を渡すことがよかったようです。またある意味「プロ」のサトルが毎日いないのもよかったと思います。小学生の時からたまりばで育ったサトルは見事に裏方に徹しました。足場組みと足場外し以外のことには、でしゃばりませんでした。子どもたちは毎日相談し、イメージを共有しながら進めていきました。このプロジェクトに参加していなかったギャラリーの子どもたちが、通りすがりに「スゴイ」「カッコイイ」と声をかけていたのも、励みになりました。

足場組みから 40 日、全国でも珍しい公設民営のフリースペース「えん」が開設して一周年という記念すべき

2004 年の 7 月、ついに「壁画」は完成しました。「明日から何しよう」、完全燃焼したノリやアラシの口から言葉がもれました。「ムダなことにエネルギー使ってないから、こういう時にエネルギー出せるんだよ」、若者からこんな言葉も聞かれました。抱きあって泣く姿もありました。力を出し切った子どもたちの顔は自信に満ち、満足そうな表情にあふれていました。

この企画で弾みがついた子どもたちは定員 500 人の広い会場を使って、16 もあるプログラムをそろえた年末の「たまりばフェスティバル」を成功させました。ノリは「エスケープ」というグループをつくり、自ら演出・監督・出演した自主映画を、13 歳から 18 歳の若者だけで作りあげ、発表しました。この冬はスキー場に住み込みで 2 ~ 3 ヶ月働くと言い出しました。アラシは出版社でバイトを始めました。今ではバイトチーフとして社員とバイトとの間をつないでいます。年末には新潟地震の被災地へもボランティアに出かけるほど積極的な若者へと脱皮しました。どの子も参画の体験を通じて手に入れた自信の力はとても大きいと思います。

最後にひと言、子どもたちの参画を阻むものとして、大人の見栄とか見てくれを気にする心があります。子どもたちがどうやりたいかより、先生や親がどう見せたいかということに力を入れてしまった場合には、子どものやる気はしぼんでいきます。体裁も評価の眼差しもはずし、子どもの力に応じて「混沌」を楽しむ大人側の余裕の中から、参画の芽が育ってくるのだと思う今日この頃です。



分類	内容		フリースペース		フリースペースえん（居場所における参画・「壁に絵を描こう」プロジェクト）			
	活動主体		NPO法人					
参画の段階	居場所づくり 5 (壁に絵を描く 7)		その理由	居場所づくりは、子どもの意見を聞きながら大人が決定している。壁画では10代の若者が主体的に相談し、準備・実施・片付けも行った				
団体名	特定非営利活動法人 フリースペース たまりば	E-Mail	freespace-en @d01.itscom .net	URL <a href="http://home.b05.itscom.net/tama/np0/index.html">http:// home.b05.itscom.net/tama/np0/index.html</a>				
代表者名	西野 博之		044-850-2055	スタッフ	常勤6名、非常勤3名、ボランティア10名			
実施時期	開設時間 月～金10:30～18:00 (火 14:00まで)	参加人数	登録人数は93名	対 象	不登校児童・生徒、 ひきこもり傾向の若者	年 齢	6歳から30代 の若者まで	
他団体・組織との連携	川崎市子ども夢パーク、神奈川子ども未来ファンド、県内外のフリースクール・フリースペース、チャイルドライン、神奈川思春期サポート懇談会等		活動資金	法人の応援会費委託費・助成金・補助金等				
趣 旨	学校や家庭、地域の中に居場所を見出せない子どもや若者及びその保護者とともに、一人ひとりが安心して過ごせる居場所をつくり、学校外の多様な学びや育ち、生き方を支援し、自己肯定感を取り戻す人間関係を育む環境と文化を創造する。							
実施することになったきっかけ	学校・家庭・地域の中に居場所を見出せない子ども・若者との出会い							
事業(活動)内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 居場所の開設と運営(川崎市から不登校児童生徒の居場所運営事業の受託)</li> <li>* 本人・家族等の相談・援助活動(電話・来所)</li> <li>* 学校外の多様な学び・生き方の支援(夏・冬合宿、「この指とまれ」方式の自主企画支援)</li> <li>* 保護者会・20歳以上の若者とスタッフの茶話会、通信の発行</li> </ul>							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 自分がやりたいことを定期開催のミーティングや通信で呼びかけ、仲間を募る。</li> <li>* ミーティングでは言いたいことが言えるということをお互いに保障(他者の存在を否定しないことが条件)。</li> <li>* 子どももおとなも対等の権利をもつ。一人一票。</li> <li>* 自主的に相談。思い切ったチャレンジ。安心して失敗できる環境の整備。</li> <li>* 世間的評価や見てくれにとらわれずに、やりたいことを追求。</li> </ul>							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり	その他				
	特定非営利活動法人 フリースペースたまりば	青少年と大人	～					
<ul style="list-style-type: none"> <li>* スタッフは子どもから相談や依頼を受けない限り、口出ししない。</li> <li>* ミーティングで場所の選定、日程、内容まですべて子どもたちとスタッフが一緒に話し合いで決める。</li> <li>* ミーティングの司会は、形式にこだわらず子どもの場合と大人の場合とがある。</li> <li>* 大人は発言しやすい環境作りをしている。</li> </ul>								

表の見方は P.55 参照



## 片倉うさぎ山プレイパーク



冒険遊び場(プレイパーク)とは「自分の責任で自由に遊ぶ」がモットーの禁止事項のない自由な遊び場です。

「片倉うさぎ山プレイパーク」には、固定の遊具がありません。廃材やダンボールといった一見ガラクタと思えるものや、草・実・枝・葉・石・水といった自然の素材を利用して、自分たちで遊びを自由につくって欲しい、という思いが冒険遊び場の元となっています。

子ども達の「やりたい」ことが、自分達の手で実現できることが大切だと考えています。そして、実現していく過程の中で何度とない失敗により、子どもたちは大きく成長し多くの知恵を身につけていきます。そのためにできるだけ大人は、禁止事項を減らし、子どもの遊びの発想をできるだけ温かく見守り、子どもだった頃をふりかえりながら、もっともっと子どもと一緒にとことん遊んで欲しいと願っています。

### 片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会 瀬 嵐 理 恵

大学で「意欲とおもいやりを育てる児童学」を学び、その指導方針に沿った東京都区内の私立幼稚園に5年間勤務しました。その園での体験が私の現在の活動の根幹をなしていると思います。

その幼稚園は杉並区でありながら、自然環境に恵まれ、動物や植物を育てるという生きた体験を、園の活動の核としていました。畑での野菜づくりを通して土にふれ、その匂いや感触、虫たちとの出会いを楽しむ年間の活動のなかで、なによりも園児たちが感激するのは、自らの手をかけた野菜を収穫するときでした。たった1本の苗が土の上に根を張り、ツルを伸ばし葉を茂らせ、実りを迎



えます。土の下から赤い色をしたさつまいもが、次から次へと顔を出す瞬間、子どもたちは宝物を見つけたかのように歓声をあげます。自分たちの手足を使い、苦勞してなし遂げた体験・感動を通して、子どもたちは何ものにも代え難い貴重な経験をすることができます。

子どもたちの生き生きとした姿をみてきた私は、わが子にも同様な体験をさせたい、という強い思いをもって子育てを始めました。しかし横浜でのマンション暮らしでは、自由に遊べる場は近くの公園しかありません。整備・管理された公園は、子どもたちの好奇心をかきたてられるような場にはなりえないと感じたのです。このことがプレイパーク活動を始めるきっかけとなりました。

子どもが成長するにつれ、子ども会や地域のイベントに参加しました。子どもと楽しく活動しながらも、私自身満たされないものを感じたのです。その理由は、大人が自分たちの頭で考えて作りあげたイベントの企画だからだ、と気づいたのです。地域の子ども会の会長になったことをきっかけに、子どもたちがどんな活動をしてみたいかアンケートを取りました。様々な案が出てきました。子どもたちのアイデアをできるだけ尊重したいと考えましたが、子ども会には予算・活動回数に限りがあります。担当役員が皆で悩みつつ検討した結果、子どもたちの希望をかなえるために、初めての一泊キャンプを計画しました。小学校高学年が中心になって、プログラムの検討、しおりの作成を行い、プール遊び、野外活動や流しそうめん、水を使った運動会、キャンプファイヤー等、楽しい一泊二日を送ることができました。この経験をもとに、子どもたち自らの発案で、クリスマス会や、次年度の女生徒たちがきもだめしの企画を行いました。しかし残念ながら、改選後の子ども会担当役員には受け入れてもらえませんでした。子ども達による意欲ある企画を無にすることを惜しみ、私たちが当時自主活動していた「遊びをひろげようピピの会」でそれらの企画を実現させることにしました。

子どもたちは、おもしろい事が大好きです。「自分たちでできるのだ」という経験と自信を持ち、それを受け止めてくれる大人が地域にいれば、大きな底力を発揮できるのだと実感しました。

うさぎ山プレイパークでは、子どもたちが自主的に考えた企画がいつでも実現できるように、常にアンテナを張っています。開園当初は、こどもたちに「自分の発想でなんでもやっただよ」と気づいてもらうため、毎月いろいろなイベントを企画しました。経験がなければ発想がわからないと思ったからです。

イベントは、子どもたちが公園に初めて足を運ぶきっかけとなります。しかしその場限りで終わることのないよう、うさぎ山プレイパークでは、その場で経験したことが日常的に行える環境を作ることができるように考えています。

子どもたちが参画して行なう一番大きなイベントとして「子ども商店街」があります。世田谷の羽根木プレイパークで行なわれていた「子ども商店街」に参加したメンバーの1人が、子どもの発想のおもしろさに感激し、私たちもやってみたくと考え、企画したのが1996年4月。近隣の施設『ログハウス』の5周年のイベントの時でした。初めての試みでもあり、現金を扱うこともあり、私たちも細かな準備・対応に追われました。

その後、毎年この企画を実施していますが、「子ども商店街」では、現金と換金できる金券を扱うため、子どもたちにとっては大変魅力的で社会経験にもなる反面、トラブルも想定されます。そのためその都度大人も含めて皆で話し合い、この企画の趣旨をしっかりと保護者にも理解いただいています。価値観が多様化している現在、「自由な遊び場だからなんでも自由に」ではなく、主催者側が子どもに伝えたいメッセージはしっかりと伝えていきたいと考えていますし、「子ども商店街」はそのための格好のイベントです。メッセージを受け止めた子どもたちは、仲間同士でコミュ

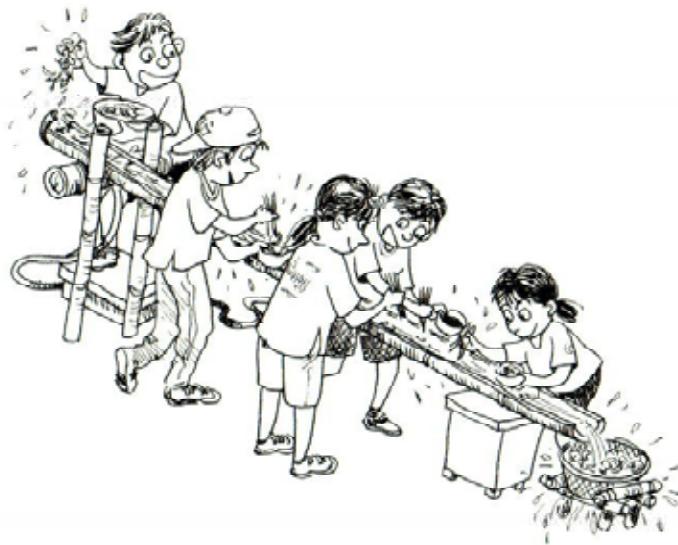
ニケーションを取りつつプロモーションを考え、各々のアイデアを凝らしたそれぞれの「商店」を作り上げていきます。試行錯誤を通じて幾度も壁にぶつかりながら、自らの「商店」を作り上げていく楽しさ、そのプロセスをこれからも大切に見守っていきたいと思います。

今年、うさぎ山プレイパークも4年目を迎え、少しずつですが子どもたちの「やりたい」という声があがってくるようになりました。近いうちに行なう「あそびの林まつり」を実行委員制度にして企画を練ろうと、子どもたちに声をかけをしました。常連の子どもたちを中核として、『子ども商店街』と『ステージでなにか』をしたいという計画が実行されつつあります。日頃の遊びでの活動で培われたアイデアや行動力、仲間やプレイリーダーとの信頼関係が形となって現れる絶好の機会です。大人はあくまでも相談相手であり、子どもたちの思いを引き出し、それをまとめていくだけなのです。プレイリーダーが「あそびの林まつり」に向かって趣向を凝らして作業をしていくなかで、子どもたち一人ひとりが自らの思いを形にまとめあげていくことでしょう。子どもたちがこのような体験を通して社会と関わりつつ、自分たちのかけがえのなさに気づき、自信をもって活動していくことを望んでいます。



分類	内容	冒険遊び場		片倉うさぎ山プレイパーク(子ども商店街)		
	活動主体	NPO				
参画の段階	6	その理由	子どもを主体としたあそび場であり、子どもの発案を大切にしている。スタッフと相談しながら日程や広報の仕方などを決定している。			
団体名	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会	E-Mail	qb3r-sars@asahi-net.or.jp	URL <a href="http://www.asahi-net.or.jp/~qb3r-sars/">http://www.asahi-net.or.jp/~qb3r-sars/</a>		
代表者名	瀬嵐 理恵		-	スタッフ	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員	
実施時期	1997年から毎年	参加人数	60人前後	対象	幼児～高校生年齢程度(子ども商店街の際)	年齢 4～18歳程度(子ども商店街の際)
他団体・組織との連携		特になし		活動資金	一人参加費100円(広告代)	
趣 旨	アイデア・企画・販売すべてを子どもたちが担当。仲間と協力して目標を達成するプロセスを大切にしている。同時にお金の流通の仕組みを理解させ、お金の価値を実感させる。					
実施することになったきっかけ	東京都世田谷区のプレイパークで行なわれた「子ども商店街」に参加し、子どもたちの企画力・実行力に感動したため。					
事業(活動)内容	子ども商店街・・・子どもたちが店作りをして、商品を販売する。					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	子どもたちで発案・企画・仕入れ・店づくり・販売を手がける。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり	その他		
	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員	青少年と大人				
現金と換金できる金券を扱うため、子どもたちにとっては大変魅力的で社会経験にもなる反面、トラブルも想定されるため、その都度大人も含めて皆で話し合い、この企画の趣旨をしっかりと保護者にも理解していただいている。						

表の見方は P.55 参照



# かながわユースボランティアミーティング in 神奈川



『かながわユースボランティアリングファクトリー(KYVF)』は ユース(若者)がボランティア活動を始め  
るきっかけとなる場をつくるために、情報提供、情報交換、そして一緒にボランティアを経験、活動してい  
く場を提供している組織です。その活動をしていく中で『かながわユースボランティアミーティング』という  
イベントも3回目となりました。

## かながわユースボランティアリングファクトリー

代表 刀 衿 い ず み

“かながわユースボランティアリングファクトリー”(以下KYVF)発足のきっかけは、3年前のユースボラン  
ティアミーティング実行委員会でした。これは、神奈川県青少年総合研修センターが募った高校生から大学生  
の5名の青少年を中心に組織され、活動内容は、ミーティングのテーマや分科会内容、進行を自分たちで行う  
というものでした。後に振り返ると、大人である県職員の方が、実行委員会に好きなようにやってほしいという姿  
勢でありながら、事務的、渉外的なフォロー、全責任をすべて背負っていたことが、実行委員である私たちにと  
っては、大変ではあるけれど安心して、多くの人々と関わりながら企画を進めていく貴重な体験が出来ました。  
実施後は、今までに経験したことのないような達成感と感動を得られたのですが、1回限りの事業であることを  
知り、中心となった実行委員で今後も何かつながっていきたいということで、“ボランティア”をキーワードに自  
分たちユース(若者)にできることをするKYVFのもととなる組織をつくることを決意しました。

しかし組織をつくったものの、ゼロからのスタートで、スタッフ間の温度差、日程調整の難しさ、  
スタッフの入れ替わりなど困難は山積みでした。しかし、昨年自主事業として、“ユースボラン  
ティアミーティング in 神奈川 2003”を実行委員会形式で行うということに挑戦し、神奈川県青少年  
総合研修センター、神奈川県青少年協会、かながわボランティアセンターなどの多くの方にお世話に

なりながら、小規模ながらも観音崎青少年の家で高校生の実行委員の活躍で実施することができました。初めての事業ということで、多くの反省点が残し、もう一度スタッフで組織として共通の目的である「ユースがボランティア活動をきっかけに、市民活動の出発点となる社会の様々な課題や矛盾、人々の苦しみや願いなどに気づいてほしい。ボランティア活動が特別なものではなく、誰にとっても身近なものになってほしい。ユースがボランティア活動を始めるきっかけの場をつくるために、ボランティア活動をするユースへの情報提供、情報交換、そして一緒にボランティアを経験、活動していく場を提供していきたい。活動が実り、ボランティア活動がどんな時でも誰にとっても身近なものになり、ボランティアの輪（りんぐ）が広がって行ってほしい。」ということを確認し方向性を明確にし、この夏のユースボランティアミーティングを実施しました。

今回のミーティングも、実行委員会形式でしたが、多くの課題が残りました。はじめに、実行委員や当日参加者を募る段階での広報力です。多くの団体と連携しているにも関わらず結局ほとんどが個人的なツテでなんとか集めたという状態でした。もっとポイントを絞って募集したり、高校や大学など学校へもPRしたりする必要性がありました。協力団体との連絡調整にも重点をおいて進めていくことでより有効的な事業実施がはかれるのですが、その調整を行うだけの人手や時間の余裕がないというも現実でした。次に、実行委員会の進め方、スタッフの段取り力です。私たちスタッフは、自分たちが経験したように、縁の下の力持ち的存在で進めることで、実行委員に自分たちと同じような企画の大変さの後にある達成感、新たな人との出会いの楽しさを味わってもらいたいと考えていました。しかし、スタッフの経験不足や連携不足で実行委員の意識を盛り上げることがうまくできず、結局スタッフが内容まで細かいところまで仕切ってしまう場面もあり、実行委員に物足りなさや不安感をいだかせてしまいました。また、実行委員長がそのプレッシャーのためか、途中で辞退してしまうというハプニングがあり、結局実行委員長は立てずに進めることになりました。このことから、組織として何のために実行委員会形式で行ったかということスタッフで明確にしておくこと、実行委員会をすすめる上でのスタッフのスキルアップの必要性を感じました。今後は、自分たちだけでイベント企画をするということにも挑戦して、実行委員の立場をもっと考えられる機会ももったらどうかという話も出ています。

しかし、実行委員一人ひとりの変化(成長)というものに、スタッフとして喜びを感じたことも多くあります。なんとか集めてもらったという事情で、始めの頃は見るからにやる気がなく、「自分は何をしていいのかわからない、何でここにいるの?」という様子でしたが、一人一分科会を担当することで、意欲的に自分のアイデアを打ち出し、会議進行においてもリーダー的存在となっていきました。また、それぞれの分科会内容も個性豊かで、全体会についてはとても中身の濃いものでした。最後には「とっても楽しかった!またメールで相談にのってください。」などという言葉をもらい喜びを感じました。その後、学校でも他の企画にチャレンジしているようです。些細なことですが、若い時にひとつの企画をするということを通じて多くのことを学び、自信をつけることになったのではないかと考えています。

当日の分科会のひとつに「ボランティアのしょうたい」という、ボランティアとは何かということについてとことん話すものがありました。特に講師を依頼せず実行委員だけですすめるのですが、朝まで熱いディスカッションが繰り広げられました。それほど“ボランティア”は非常に広く考えられ、様々な可能性を持っています。今後も、ユースである私たちがユースに対してできることをできる範囲で働きかけることで、少しずつでもボランティアの輪が広がっていくことにつながっていく活動をしていきたいと思っています。そのためには、組織力のアップ、スタッフのスキルアップと充実、よ

り多くの人に活動を知ってもらい、協力団体の先輩方にも助言をうけながら事業をすすめていくことが必須と考えています。

分類	内容	交流		かながわユースボランティアミーティング in 神奈川			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	8	その理由	大人と青少年が主催者であるが、企画の段階から青少年の考えを中心に行い、大人からは助言や協力をえながら最終的に決定したのは青少年だったから。				
団体名	かながわユースボランティアりんぐファクトリー	E-Mail	koajizumikeda@ybb.ne.jp	URL <a href="http://youvola.serio.jp">http://youvola.serio.jp</a>			
代表者名	刀祢 いずみ		-	スタッフ	大人2、高校生4(実行委員) 大人5、大学生4、高校生1(かながわユースボランティアりんぐファクトリースタッフ)		
実施時期	夏休み 一泊二日	参加人数	48人	対象	ボランティアに興味のあるユース	年齢	16歳～30代
他団体・組織との連携	神奈川県青少年協会、神奈川県立逗子高校ボランティアセンター等	活動資金	子ども未来ファンド事業助成金15万円、神奈川の教育を推進する県民会議より10万円の支援金				
趣 旨	ボランティア活動をする若者世代への情報提供、情報交換の機会をつくります。そして、新たに生まれた繋がりをネットワークしてだけでなく、活動のあり方を見つめ直し、活発な活動を促進していくサポートをします。						
実施することになったきっかけ	2002年神奈川県青少年総合研修センターの事業で知り合った実行委員のその後のネットワークで結成された団体、かながわユースボランティアりんぐファクトリーの自主事業として毎年行っている。						
事業(活動)内容	4月より、ユースボランティアミーティング実行委員について、一般に募集をかけ、高校生以上の実行委員が集まった。KYVFスタッフが実行委員会会議を開催し、サポートアドバイスしながら実行委員会でミーティング内容を考え、講師との交渉なども行った。ミーティング企画内容は、テーマは「ボラ・知識・仲間GET!!」で、6つの分科会に参加者がわかれてディスカッションをおこなった。分科会テーマ：[環境・ひきこもり・手話・障害者理解・ボランティアのしょうたい・ハンセン病] ほかに、野外炊事のカレー作り。全体会での分科会の発表などを行い1泊2日のミーティングを終えた。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	企画経験のある青少年スタッフが、経験の少ない青少年実行委員を募り、実行委員会会議をサポートし、お互いに話し合い調整しながら企画をすすめていった。実行委員会の提案をなるべく実現していく形に進めた。講師との交渉や、役割分担などは、スタッフが実行委員と一緒にいった。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり		その他		
	かながわユースボランティアりんぐファクトリー	青少年					
多くの協力団体から支援をえられたが、広報の協力の連携が難しく、当日参加者を集めるのに苦労した。想定していた参加者より大幅に少なかった。実行委員会会議は、基本的に青少年のみで行っていたが、要所所で大人の方々(協力団体の方)にもっとアドバイスをいただきながら進めていったほうがよかった。その反省の背景には、団体スタッフ個人の企画経験や、会議の進め方のスキルが高められていないという現状がある。もっと青少年スタッフのスキルアップが必要であることがわかった。							

表の見方は P.55 参照

# 藤沢ダンスMIX Ver.6



“藤沢ダンスMIX Ver.6”は、市内在住・在勤・在学を含み小学生以上 30 歳以下の者も含むグループを対象として実施されているダンスのイベントです。フリー部門とコンテスト部門があり、フリー部門はダンスパフォーマンスを見せ、コンテスト部門はダンスコンテストを実施するものです。このイベントの企画・運営・実施をしているのが、高校生、大学生、社会人で構成されている実行委員会です。

【お話を伺った方】

藤沢市青少年協会職員 森松 聡 さん、新沼 範之 さん

**Q このイベントのきっかけとなったのは何でしょうか？**

A (財)藤沢市青少年協会 5 周年記念行事の中の1プログラムとして組み込みました。最初にバンドのコンテストにするか、ダンスコンテストにするかで迷いました。継続してやってほしいという声もあり、第 2 回目以降は藤沢ダンス MIX というイベントとして独立させて実施しています。

**Q 実行委員はどのように募集したのでしょうか？**

A 市の広報などで公募していますが、なかなか集まりません。第1回目から継続してやっているメンバー、継続のメンバー、新メンバー 4 名の全部で 16 名。その内訳は、高校生リーダー研修の修了者などに声をかけて、やってくれるようになって継続でやっている者、慶応大学の大学祭の実行委員 2 名、ダンススクールに声をかけて入ってくれた高校生・大学生、昨年の優勝チームの仲間からの 2 名などです。社会人というのはフリーターです。

**Q 職員は何人に対応していて、どんな役割でしょうか？**

A 常勤職員、非常勤職員各1名です。1 回目の委員会では、司会を務め、継続の実行委員に前回までのイベントの内容について、説明してもらいました。2 回目以降は実行委員長と事前に打ち合わせをして、何を話し合うかを決めて委員会に臨み、職員は手を出さないようにしました。しかし会場の職員やダンスのプロである

コーディネーターとの折衝などは担当しました。

イベント当日は、他の職員 6 名が実行委員の手薄なところを協力しました。

**Q 実行委員会は何回実施し、その中で職員として苦労した点は？**

A 全部で 11 回です。実行委員長は 1 回目に継続して参加している者が立候補して決まりました。継続のメンバーが多かったため、新メンバーはわけがわからず、意見を出しにくい雰囲気になってしまいました。そこで委員長と話し合い、新メンバーに新しい意見を出してもらうように工夫してほしいと持ちかけました。しかし公開予選会前の 6 回の委員会までは、新メンバーの意見はなかなか出ずに苦労しました。またそのことが原因だと思いますが、実行委員と職員とのダンスコンテストに対するイメージの違いがあり、上司を含めて共通理解を図るのが大変でした。公開予選会をこなした後は、一つのことを実行委員会で成し遂げて、まとまりができお互いに話ができるようになり、共通理解が図れるようになりました。

**Q 1 回目を立ち上げるときにも実行委員会形式だったのでしょうか？**

A 実行委員会形式です。ただしメンバーは協会の理事などの大人の方が多く、青少年は協会の関係者であり、手探りの状態でしたが、大人が主導で進めました。2 回目以降は独立させたわけですが、高校生、大学生の参加できる数少ないイベント、若者が本当にやりたいと思っているイベントとして、職員は継続性を求めました。若者のやりたいという声もありましたが、理事からも継続してやるべきであるという意見がありました。また、参加者の声として普段ダンスをしている子どもへの親の評価は低かったのですが、コンテストに出たときの一生懸命な姿を見て、自分の子どもとダンスそのものを見直したという声もありました。2 回目以降は実行委員を公募するようになりました。

**Q 実行委員の役割は？**

A イベントの枠組みは職員で決めています。例えば、フリー部門、コンテスト部門の 2 つで実施し、時期・会場は決めてあります。この枠組みの中で実行委員会が企画・内容を決めます。そして当日の運営をしています。企画の中でなかなか決まらなかったものは、賞品類です。若者たちが本当にほしいものとして、CD ラジカセに決まりました。これは実際にダンスをしている実行委員の意見が強くそうになりました。また以前はトロフィーでしたが、部屋の中で邪魔にならない盾にしました。そして賞状はチームの全員に手渡すようにしました。また広報についても、実行委員が考え実施しました。例えばポスター、リーフレットのデザインを考え、作成しました。その中でアイデアとして参加チームの名前をポスターに載せるというのがあり、それが好評でポスターがほしいという参加者の声が上がりました。

今までは実行委員会の次第は委員長が作っていましたが、来年度は各委員が分担して作成することも考えています。

**Q 実行委員の若者の変化はありましたか？**

A 素直に意見が言えるようになり、明るくなって、自分の素<sup>す</sup>を出せるようになった子もいます。この子は実行委員会は初めてで、最初はどう意見を言っているかわかりませんでした。職員が何でも言っているんだと言って、少しずつ変わっていきました。また実行委員会を通じて、新しい友達や絆ができた気がするというものや来年もやってみたいという声もありました。最初はぎくしゃくしていたものが公開予選会以降は、よくまとまって一丸となって本選を実施することができました。自分たちで考えを出し企画を組み立て、運営実施ができてうれしいというものもありました。



## 実行委員会活動に参加して

藤沢ダンスMIX Ver.6実行委員長 島山 昭子

私は藤沢ダンス MIX の実行委員会活動を通して、一つの事を皆で協力し合い、成し遂げる事の楽しさを知ることができました。年齢も学校も違うメンバーたちと、5ヶ月の時間をかけて作り上げる藤沢ダンス MIX は、ただダンスを作るというだけのものではなく、私にとってはとても大切なものです。

私は高校 2 年生から実行委員会をやり始めて今年で 3 回目なのですが、それぞれの年によって、実行委員会のメンバーや雰囲気が違うので、毎年わくわくしながら実行委員会に来ています。私が今回実行委員長をやって、一番大切だった事は、今までのメンバーと今年から参加しているメンバーとの壁をなくす事でした。メンバーの半分が昨年から引き続き実行委員をやっているメンバーだったので、昨年の話などが盛り上がってしまうと、今年からのメンバーはどうしても話に加わる事が難しくなってしまう、メンバーの間に壁ができてしまう形になってしまいました。どうすればスムーズに全員が話し合いに参加できるのかがわからずに、最初のうちはとても悩みました。青少年協会の担当の職員さんたちや、副実行委員長、昨年からのメンバーたちと話し合い、少しずつ改善していきました。6 月に行われたダンスの予選会の後からは、一つの事を皆で成し遂げた事でメンバーの結束力も強まっていきました。メンバーは社会人と学生なので、普段の会議に全員そろう事はほとんどないのですが、休んでいるメンバーへの配慮など、お互いが気遣えるようになり、助け合えるようになってきたときには、とても嬉しかったです。実行委員会が終わった今でも交流しています。

もし私がこの実行委員会に入っていなかったら出会う事ができなかったであろうメンバーと出会い、仲良くなっていくのは、とても嬉しいです。普段の生活では触れあう事のない人たちと出会う事で、視野が広がり、自分自身も成長できる気がします。また、ダンス大会という事もあって、出演者も私たちと年齢が近く、本番前のステージなどで励まし合ったりして仲良くなったりします。そのメンバーたちが公園などでダンスの練習をしているときに声をかけると、「来年こそは優勝します！見ててください！」と言ってもらえるのが、とても励みになりました。

次に会議の中で一番難しかったのが、賞品選びでした。何グループまで賞品をあげるか、何をあげたら喜んでもらえるのか、これに一番時間をかけました。後に残る物でダンス大会らしい物。皆が喜んでくれて、実用的な物。条件はいくらでも出るので、条件に合う物はなかなか見つからなくて苦労しました。しかし、本選の表彰式の後、賞品を貰ったグループの人たちが、賞品を見て嬉しそうな顔をしているのを見たときは、たくさん悩んだ苦労も忘れてしまうくらい嬉しかったです。出場者たちのダンスはどのダンスもすばらしく、皆のやり遂げたすがすがしい顔を見ていると、一緒にダンスを踊った気分になりました。真剣にダンスをしている皆の姿を見ていると私まで手に汗を握ってしまうほどでした。

最後に、私が藤沢ダンス MIX の実行委員会の活動を通して最も感じた事は、裏方の大事さです。私たちが行ったのはダンスの大会ですが、お祭りでも花火大会でも、裏方なしでは行う事ができないと思います。実行委員会に入る前までは、裏方の仕事は頑張っても皆に気づいてもらえないし、肝心な本番は見る事ができないし、あまりやりたくはないなぁ... と思っていたのですが、実行委員会をやったからは、たとえ裏方でも人から感謝される事は重要だと思い、頑張れるようになりました。このように考えられるようになったのも、藤沢ダンス MIX の実行委員会に入ってからです。今考えると、とてもよい体験になったと思います。ダンスで出場するグループにも、実行委員会のメンバーも共に成長していける藤沢ダンス MIX をこれからもずっと続けていってほしいです。そして、藤沢ダンス MIX の実行委員会で体験した事を生かして、頑張っていきたいと思います。

分類	内 容		ダンス		藤沢ダンスMIX Ver.6		
	活動主体		実行委員会				
参画の段階	6		その理由	青少年協会が主催して、実行委員を募集した。最初は協会職員主導だったが、最終的には実行委員が主導で、職員とともに決定し、事業を実施した。			
団体名	藤沢ダンスMIX Ver.6 実行委員会	E-Mail	youth@cityfujisawa.ne.jp	URL <a href="http://www.cityfujisawa.ne.jp/~youth">http://www.cityfujisawa.ne.jp/~youth</a>			
代表者名			0466-25-5215	スタッフ	社会人4人、大学生10人、高校生2人		
実施時期	夏休み(8月29日)	参加人数	230人	対 象	藤沢市内の小学生以上30歳以下の者を含む2人以上のグループ	年 齢	6~30歳
他団体・組織との連携		藤沢市・藤沢市教育委員会、 レディオ湘南		活動資金	委託費 1,165,000円		
趣 旨	ダンスを通し青少年が目標に向かって努力することにより、達成感を得るとともに青少年達の活力・創造性を高めることを目的としている。						
実施することになったきっかけ	青少年の間でブームとなっている						
事業(活動)内容	藤沢市内のダンスに興味がある青少年を集め、フリー部門、コンテスト部門の2部門に分け、予選会を行い、審査員により本選への選考を行う。本選に選ばれたチームはプロダンサーの審査員により選考を行い、選ばれたチームには賞を与える。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	企画運営、安全性などの面を職員と一緒に決定した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり			その他	
	(財)藤沢市青少年協会	青少年と大人					
出場者のことを第1に考え、出場者の誘導方法、賞のあり方(賞品の内容)まで実行委員が主体的に検討した。また、実行委員が一つにまとまり、なおかつ自分の意見を言えるようになるまでに時間がかかり最初の方はなかなか会議が進まないこともあった。そこで、実行委員長や副実行委員長と会議の進め方を工夫検討し、全実行委員が意見をはっきり言えるようにしむけた。外部(会場の舞台課やコーディネーター)との打ち合わせは基本的に職員が行った。							

表の見方は P.55 参照



## アウトドア活動教室



“港北区ジュニアリーダーズクラブ”は、中学生から 26 歳までの会員で構成され、自主活動及び港北区子ども会連絡協議会の依頼で行事のお手伝いをしています。アウトドア活動教室は、夏に 3 泊 4 日のキャンプを実施する自主活動です。

【お話を伺った方】

港北区ジュニアリーダーズクラブ会長 関口 秀雄 さん 他 6 名

**Q 港北区ジュニアリーダーズクラブはどんな活動をしているのでしょうか？**

A 菊名地区センターで週 1 , 2 回の会合を持ち、行事の計画や予算、スケジュール等を決めています。会員は中学生から 26 歳までいます。特に上限は設けていません。会長は高校を卒業しているものやっていますが、活動の中心は高校生です。会の自主活動としては、定例会(「こどもの国」などを利用した日帰りのイベント)、冬・春に小学生を対象にした宿泊研修会、夏に 3 泊 4 日のアウトドア活動教室を実施しています。また港北区子ども会連絡協議会の依頼で子ども会行事のお手伝いをしています。それが年間 50 回程度で、行事によって異なるが 3 ~ 10 人を派遣しています。

**Q 忙しくて大変だと思えますが、活動を継続している魅力はなんですか？**

A 子どもたちと触れあうことができ、また自分たちで話し合っって企画したものを実現できることが魅力です。

**Q 区の職員の関わりは？**

A クラブの手助けをしてくれています。施設利用の際、会場借用の際に許可をとってくれます。区役所の印

刷機を貸してもらえます。行事への参加をして、協力してくれます。

**Q 高校生が中心ということですが、それより上の世代はどのような役割があるのでしょうか？**

A 高校を卒業しますと、意識が変わります。高校生が中心になって動いていますが、彼女たち(現在は女子のみ)の考えを生かせるように手助けしています。またうまくいっていないときなどは指導をすることもあります。

**Q 高校生は自分たちが主体だと思って活動しているということですが、その存在をどう思っているのでしょうか？**

A 行事を成功させたい、参加者に楽しんでもらいたいという気持ちが強く、高校生の人数が少ないので、助け合ってやっています。そんな中で先輩たちは心強い存在です。しかし余計な口出しをしてほしくないと思ってしまうこともあります。

**Q アウトドア活動教室について教えてください。**

A 地域の掲示板に手作りのポスターを貼ったり、回覧板などを通して、中学生を公募します。高校生が企画を立て、一般の中学生、中学生会員と他の会員、区の職員の参加で実施しています。キャンプ中は班の中に「班つき」という形で、高校生が中学生の班に入ります。リーダー役を演じますが、中学生の自主性を大切にしています。

3ヶ月前から準備を始め、メインプログラムのウォークラリーのために下見をしたり、7月に1泊2日のプレキャンプをして、テント生活、パッキング、野外炊事等の研修をします。3泊4日は長いようですが、終わってみるとあっというまです。むしろもっと長いものにしたいという意見もあります。

**Q ジュニアリーダースクラブの活動を通して、自分が変わったという点がありますか？**

A

・考え方が変わりました。自分が中心でいつも考えていましたが、周りの人間を見て行動できるようになりました。  
・性格が変わりました。性格が暗かったのですが、明るくなったと思います。会議などで意見を言えるようになりました。これは仲間がきちんと聞いてくれることが大きいと思います。また大人と普通に会話できるようになりました。

・自分中心だったのが、相手の意見を聞けるようになりました。

・人見知りでおとなしかったのですが、連絡係という仕事を任されたのをきっかけに、慣れることで人と普通に話せるようになりました。大人とは緊張してうまく話せませんでした。敬語も覚え、緊張感も薄れ、話せるようになりました。親は責任感が出てきたといっています。

・考え方が変わりました。物事を順序立てて考えられるようになりました。落ち着いて考えることができるようになってきました。突発時にも以前よりも、冷静に対処できるようになってきました。考える力がついたと思います。

・性格が変わりました。以前はすごい気を遣っていましたが、今は大人と普通に話せるようになりました。

・性格が変わりました。後ろ向きでしたが、プラス思考に変わってきました。子ども会活動に参加するようになって、親の人たちと接するようになって、大人との話し方を覚えました。中学2年生から参加して、今は高校を卒業していますが、高校生スタッフの時に、中学生を楽しませたいという気持ちが強く、それが今でも継続している理由だと思います。

## ジュニアリーダーの活動をやってきて

### 港北区ジュニアリーダーズクラブ

会長 関口 秀雄

僕は港北区ジュニアリーダーズクラブ(以降、港北区 JLC )の活動をやってきていると経験することができました。

子ども会のクリスマス会のお手伝いや区役所の区民祭りのお手伝いなど、普通の生活をしていたら経験できないことをたくさん経験することができました。特にジュニアの活動の中で一番印象に残っているのが「アウトドア活動教室」です。

毎年 8 月上旬に 3 泊 4 日で山梨県にある横浜市道志青少年野外活動センターキャンプ場(横浜市少年自然の家赤城林間学園で実施する場合があります)でキャンプを実施します。中学生以上 30 ~ 40 人を毎年連れて行きますが、山登りや野外炊事などはすべて自分たちで行わないといけません。また自然を使ったウォークラリーや川などでゲームをやったりします。そしてやはり最後の夜に実施するキャンプファイヤーはとても素晴らしいものです。

山奥に行き皆で火を囲み歌ったり、踊ったりして、だんだん仲間たちがひとつになっていくことがとても楽しいし有意義だと思います。

港北区 JLC の活動は、大人の手を借りないで高校生が中心になって企画・運営していますが、このアウトドア活動教室もそうです。準備段階の話し合いに約3ヶ月かけています。週 2 回の打ち合わせ会議を中心にいろいろな話し合いを行い、何度も企画を練り直します。やっとの思いでプログラムが決まったときはもううれしくてたまりません。

このように普段経験できないことを経験できるのは、港北区 JLC の活動をやってきたからだと思います。

僕は現在会長という立場にあるので、今まで港北区 JLC の先輩たちから教えてもらったことをこれからスタッフになる高校生にどんどん教えていこうと思います。そしてジュニアリーダーが子どもたちのためになるようにこれからも活動を続けていきたいと思っています。



分類	内容		キャンプ		アウトドア活動教室			
	活動主体		ジュニアリーダー					
参画の段階	8		その理由	子どもが主体的に関わっているから				
団体名	港北区ジュニアリーダーズクラブ		E-Mail	なし	URL http:// なし			
代表者名	関口 秀雄		045-540-2239 港北区 地域振興課	スタッフ	大人、大学生、専門学校生、高校生、中学生			
実施時期	夏休み3泊4日		参加人数	32人(大人3, 高校7, 中学校13, 専門学校・大学8)	対象	中高生	年齢	12~18歳
他団体・組織との連携		港北区地域振興課		活動資金	参加費1人9,000円、区補助金170,000円			
趣 旨	自立心、協調性の育成。高校生にとっては、リーダーシップの育成になり、中学生にとっては団体活動を学ぶ場となっている。中・高校生、専門学校、大学生の交流にもなっている。							
実施することになったきっかけ		特になし						
事業(活動)内容	横浜市道志青少年野外活動センターキャンプ場にて野外炊事、ウォークラリー、野外ゲーム、WATER GAMEを実施。反省会(毎日1時間以上、運営について反省会を実施、高校生のリーダーシップの取り方についてみんなで話し合う。)							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	基本的に20歳未満の子どもが企画運営している。野外炊事のメニューの決定、中学生への指導、ウォークラリーにおける企画立案(ウォークラリーのチェックポイントで行う人生ゲームの内容を決定)、野外ゲームの内容決定、反省会等。大人はバスの手配等、事務的な支援のみ。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり				その他	
	港北区ジュニアリーダーズクラブ	青少年						
子どもたちが企画運営のノウハウを持っているので、大人は補助的に関わるのみ。一部企画・立案に関わっている。								

表の見方は P.55 参照



## 子どもによる市民のための情報誌『WAVE桜』



『WAVE桜』は、十代の若者が自分たちの思いや考えを社会に発信しようと考え、発行した情報誌です。その活動について、以下に体験記として編集長の山本さんが書いてくれました。

### 『WAVE桜』編集長 山本 智之

私たちは、「子どもによる市民のための情報誌」をキャッチフレーズとして掲げ、『WAVE桜』という情報誌を作っています。『WAVE桜』は、今を生きる十代の切実な思い、考えを世に発信していくことを主たる目的として、千葉県佐倉市において2001年の8月から(制作活動は2001年6月から)発行されてきました。今までに7つの波が発信されており、朝日新聞の取材を受け、社説に掲載されたり、NHK千葉放送局のFM放送「まるごと千葉60分」に出演したりするなど、マスコミの注目を集めてきました。

始めるきっかけは、2001年の6月のことです。『WAVE桜』の呼びかけ人・初代編集長の三森くん(当時14歳)が、あるきっかけで『ウェーブいしおか』という、子どもが編集に携わるタウン誌の存在を知り、「これだ!」とばかりに周囲の友人に声をかけはじめました。そして集まった12～16歳の約10名の中高生。ここから『WAVE桜』は始まるのです。

はじめは、ただなんとなく「会議」と称して集まって、トランプなどのゲームをしているだけでした。なにしろ、「自分の考えを紙面に載せ、発行する。」という漠然とした目標はあれども、「資金はどうでしょうか。」「印刷はどうでしょうか。」「どこにどうやって配ろうか。」などの発行をする上での具体的な問題は山積みで、どこから手をつけていいかまったくわからない状態なのです。しかしそれでも、何回か回を重ね、ゆるゆると話をしていくと、それぞれが自分のアイデアを出しあうようになり、だんだんと『WAVE桜』の構想ができあがっていくのでした。

そんな中で、とりあえず決めたことは、『WAVE桜』という誌名。『WAVE』はモデルとなった『ウェーブいしおか』のウェーブ(情報の波という意味)をそのままとって英語で表記し、『桜』は私たちが住む街・佐倉をかけ、なおかつ佐倉という地域限定にしたいところから文字を変えてつけました。そして、その『桜』には、

「桜の木を一生にたとえると、自分たちはちょうど今が春だから。」という意味も含まれています。

資金については、カンパを募ったり、地元の祭りで許可を得て店を出店したりして、なんとか 1 号分ほどは捻出することができました。印刷は、子どもの活動を支援する市民団体、NPO 佐倉こどもステーションの支援によって行うことができました。配布は、市内の公共施設や塾・書店等に置かせてもらったり、大勢の市民が集まるような会に積極的に参加し、直接手渡ししたりしました。

第 1 号の発行作業が大方終了し、外部から、「まとまりが無くて読みづらい。」という評価を受けました。そこで第 2 号以降は、その号ごとに特集を設け、誌面全体の統一感を高めることにしました。これは、もともと号全体のテーマを設けようという案でした。しかし一冊丸ごと、テーマを指定してしまうと、「書きたいものを書きたいだけ書く」という『WAVE 桜』本来のスタイルが失われてしまうのではないかと新たな問題が浮上してきます。そこでその号ごとに 1 つのテーマに基づいた「特集」を設け、特集以外の部分ではやはり好きなことを書く、という形になったのです。第 1 号と、それ以降の号の大きな違いとなるポイントです。ちなみに、今までに取り扱われた特集のテーマは「戦争と平和」、「福祉」、「教育」、「政治」などです。

また、『WAVE 桜』では、発行作業以外にも様々なイベントに対し、参加・参画をしてきました。2002 年 9 月には、「子どもによる 子どもとともに 21 世紀の都市デザイン『今昔子ども会議』」というイベントを自ら企画し、現代の子ども・昔の子ども(現代の大人)を交えたパネルディスカッションを通じて 21 世紀の子ども像を考えたりもしました。

『WAVE 桜』の活動が社会全体にもたらした影響とは、どれほどのものでしょうか。それは言ってしまうと、露ほどもないようなものでしょう。しかし、私たち『WAVE 桜』編集員と、その周囲の人間にもたらした影響は計り知れません(いい意味で)。社会参画とは、何も社会全体に影響をもたらすようなことばかりではないでしょう。私たちや、その周囲といった小さなコミュニティであっても、それは一つの社会であり、『WAVE 桜』の活動は立派な社会参画なのです。私たちはそのことを胸を張って言えます。



今昔子ども会議 (2002 年 9 月)



分類	内容	情報誌発行		子どもによる市民のための情報誌『WAVE桜』			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	7.5	その理由	「子どもたちが何のためにやるかを自分たちで決めて、自分たちで分担をして活動をする。大人がほとんど役割がなくて腕を組んでみていればいい。」基本はまさにその通りである。ただし、時として大人を巻き込んだ企画を立てることもあり、この場合は8と評価できるので、+0.5して中間の7.5とした。				
団体名	WAVE桜編集局	E-Mail	wave@inba-county.net	URL なし			
代表者名	三森 篤志			スタッフ	編集員自身がスタッフであり、参加者である。強いて言うなら、相談役の大人が一人。		
実施時期	2001年6月より開始 継続中	参加人数	10名前後	対象	市民(?)	年齢	10代
他団体・組織との連携		NPO佐倉こどもステーション		活動資金	地元の祭りでの出店、カンパ、広告料、WAVE桜の販売、賛助会員、助成金など。		
趣 旨	社会における様々な問題に対して、子どもの立場から見た率直な意見や考えを世の中に発信していく。						
実施することになったきっかけ	社会に対する不満がたまる中、三森が『ウェーブいしおか』という子どもが編集に携わるタウン誌の存在を知る。自分も世の中に意見を発信したい、と周囲に声をかけ、同調したメンバーで活動が始まった。						
事業(活動)内容	・子どもによる市民のための情報誌『WAVE桜』の発行(取材・研修を含む)。 ・子どもの社会参画の実践・推進。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	自分達で動き始め、資金を稼ぎ、取材をし、記事を書き、印刷してきた(もちろん、大人の支援がなければできなかったが)。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	WAVE桜編集局	青少年			情報の提供、編集スペースの提供		
何かあったときに、大人がサポートする。また大人は、青少年に対して、これらの活動を広げる機会を紹介したり、提供をしている。大人の目で勝手な判断をしないようにして、子どもたちを見守ることにしている。							

表の見方は P.55 参照



# チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン

「チャイルドライン」は、18歳以下の子どもなら誰でも、いつでも、どこからでも、かけられる電話のことで、もともとイギリスの特集番組でのホットライン開設がきっかけで始まりました。そして、そのホットラインへの大きな反響では、子どものための電話の必要性が叫ばれました。

「チャイルドラインって何？」・・・ <http://childline.at.infoseek.co.jp/pc/cline2.htm>

「チャイルドライン」の受け手(子どもからの電話で子どもの気持ちを受ける人)は基本的に大人ですが、『若者ライン』は、その受け手に若者になっているところに特徴があります。若者が、自分たちと同世代の若者や子どもからかかってくる電話をとり、悩みなどを聞いています。

## 特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター理事 若者ライン担当

私は2000年5月の設立当初からのメンバーではなく、2002年の11月から参加しました。ちょうど若者ラインへのアクセスが多くなり、活動が軌道に乗りはじめた頃でした。福祉職に就くことを希望していたのでその参考になればという程度の軽い気持ちで始めました。

始めてみて、自分と同世代の若者が電話の向こう側の子どもの話を真剣に受け止め、考えぬいている姿を知るととても驚きました。子どもと話すことは楽しい事ばかりではありません。傾聴することがしんどくなる、とても苦しい話もあります。彼らはそのひとつひとつを大切に受け止め、子どもの秘密を洩らさないことを固く守っていました。電話を受ける上での悩み事は仲間うちで共有し、何度も何度も話し合いを重ねながら電話を取っていました。

一緒に活動をさせてもらううちに、私が漠然と持っていた福祉観は大きく変わりました。今までどこか「話を聞いてあげる」「私が助けてあげる」というエゴイスティックな気持ちを持っていたことに気づかされました。子どもの話に寄り添い、少しでも子どもの支えになることを目指して失敗をくりかえす過程のなかで、「～してあげる」という気持ちからは何も生まれえない、私のほうが子どもから大切な気持ちを受け取り、勉強させてもらっていると思った瞬間がありました。このような気持ちの転換ができたことは、私の財産になっています。また、子どもの話から彼らをとりまく社会状況の深刻な問題を知ることになり、それをもっときちんと知りたい、子どもが生きやすくなるような社会をつくるためにはどうすればいいか知りたいという思いが募り、進学を選びました。この活動は、私の意識を変えてくれました。

また、この事業に関わる大人との出会いが私にとって貴重でした。若者は自主的にミーティングや研修を積み重ねていますが、その活動を大人は全面的に信じて見守っています。「指導する」「説教する」ということはせず、一緒に活動する対等な仲間として常に若者を尊重してくれています。若者と大人の共同参画という言葉はよく聞かれますが、若者を信じて見守るということをお口だけではなく態度で実践している大人に私は初めて出会いました。そんな大人の態度から、私は多くのことを学びました。

この活動に集う若者は、日常生活ではなかなか出会わないような人が多くいます。高校生、大学生、専門学校生、不登校経験者、フリーター等々。年齢もさまざまです。お互いのバックグラウンドが違っても、活動を続けていくために本音で話しあい、ぶつかりあっています。この活動は私たちの居場所にもなっています。

2004年度から、私は若者の中から母体である子ども劇場の理事に選任され、若者と大人の間の情報伝達や意思疎通をさらに円滑にするための橋渡し役として活動しています。今までとは少し仕事の内容が変わり、失敗ばかりする日々ですが、信頼できる大人や仲間を支えられて頑張っています。

分類	内容	電話相談		チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	5	その理由	事業の主催者は大人であるが、若者ライン独自のミーティングでの決定を尊重し、十分な話し合いをしたうえで事業に取り入れてくれるから				
団体名	特定非営利活動法人 子ども劇場 千葉県センター	E-Mail	kidchiba@lily.ocn.ne.jp		URL なし		
代表者名	岡田泰子		043-301-7262 (団体連絡先)	スタッフ	大人8人 若者10人(うち受け手と兼任して子ども劇場理事1名、実行委員長1名、シフト係3名)		
実施時期	毎週土曜日19～21時	参加人数	大人8人 若者10人	対象	女:男 = 7:3	年齢	18～23歳 (若者のみ)
他団体・組織との連携		チャイルドライン全国支援センター、千葉県内の子育て関連機関		活動資金	自己資金、子ども電話後援会費、助成金等		
趣 旨	電話を通して子どもたちの悩みや相談事、ちょっとした日常の出来事などさまざまな話を傾聴する						
実施することになったきっかけ	千葉県内にある子ども劇場の高校生交流会で出会った有志が、すでに「子ども電話」を実施していた大人たちの活動に関心を持ち自分たちもやってみようと思った。						
事業(活動)内容	電話の受け手活動、研修、ミーティング、チャイルドライン全国集会への参加、若者の取り組みについての報告会の企画など						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	若者自身で電話を受けるシフトを組み、電話を受ける。その際必ず大人1名に支え手として来てもらい、助言を受けたり、相談に乗ってもらったりする。研修やミーティングも若者自身で企画し、大人に提案する。2004年度から母体である子ども劇場千葉県センターの理事に若者が1人選任されたことをきっかけに、大人と若者の間の意思疎通をなお一層円滑にとれるように工夫している。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター	青少年と大人					
何かあったときに、大人がサポートする。また大人は、これらの活動を周囲に広げていく役割がある。活動を理解してもらいようにしなければならない。大人の目で勝手な判断をしないようにして、子どもたちを見守ることにしている。							

表の見方は P.55 参照



【「WAVE 桜」と「チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン」についてお話を伺った方】

**NPO 佐倉こどもステーション 黒木 裕子 さん、大場 博子 さん**

**Q 「子ども参画」の活動を進めるようになったきっかけは？**

**A(黒木)** 40年ほど前に、テレビが大衆化され家庭で普通に見られるようになって、子どもたちがその虜になってしまったときに、生の舞台を子どもたちに提供しようというところから、「子ども劇場」運動が始まりました。一時は全国で約700劇場もありました。会員は大人と子どもですが、劇の鑑賞などの大きなイベント時に募集して増やしていきました。その活動の中で子どもキャンプが始まりました。最初は大人が主導で、子どもの実行委員会があり、それを学生が引っ張る形で実施していました。

転機となったのは、10年ほど前です。子どもキャンプを巣立っていった子どもたちに、自分の言葉で語れない子が多いことに気がつきました。その原因として考えられるのは、大人の言われるままに活動してきましたので、自分の考えや意志で行動できなくなっているのではないかということです。

そこで大人が主導であったのを、大人が前面から退いて、失敗してもいいから子どもと青年(高校生から大学生)が、やりたいキャンプをするようになりました。しかし「子ども劇場」の会員の大人の中には、「子どもは失敗してもいいのか」という疑問を提示する人もいました。その人たちに理解してもらうことが大変でした。

現在は大人が見守ることが重要であることを、会員に理解してもらいながら活動しています。事務局スタッフとしては、大人に理解してもらうことに重点を置いています。

「子ども劇場」で育ってきた若者たちが、いろいろな活動を立ち上げて、実施しています。例えば「ミニ佐倉」を立ち上げた中村桃子氏は「子ども劇場」に子どもの頃から出入りしていました。

「ミニ佐倉」は商店街を舞台に子どもたちが自分たちでまちをつくり、その中で仕事をしたり、商売をしたり、遊んだりするというを実際にやってみるイベントです。「居場所づくりと社会つながり」(子どもの参画情報センター編)に詳しく掲載されています。

**Q 他にはどんな若者の活動がありますか？**

**A(大場)** 「WAVE 桜」という情報誌を若者たちが自分たちで取材し、編集・発行しています。これはある中学生が「おもしろいからやりましょうよ」と仲間の中学生に声をかけて始まりました。自分たちでやりたいことを見つけ、自分たちの力で活動しています。「おもしろいからやる」という発想です。当然失敗するというリスクもあります。大人はこの活動に対して、場の提供として、自宅の一室を提供しています。また人的・資金的情報を提供しています。助成金を申請するときなどは、大人は説明責任があるので、必要があれば手続きをしています。大人としては子どもの活動を保障することを第一義に考えています。しかし自宅の一室を提供する際に、子どもたちで自然にルール作りをしています。また自分の子どもが同世代ですが、無理にこの活動に参加させるようなことはしていません。

**A(黒木)** 若者たちが「若者ライン」という活動をしています。「チャイルドライン」の若者版ということになります。つまり電話の受け手を若者がやっているということです。この活動のきっかけは、カナダで若者が電話の受け手をしている「ヘイライン」というものがあり、3年前にそのメンバーが来日したときに、そこへ子ども劇場に出入りしている若者が会いに行きました。そのときにおもしろいと思い、やってみようということになりました。現在高校生から大学生の13人のメンバーで、毎週土曜日に2～3人のローテーションを組み活動しています。

「子どもキャンプ」のやり方を変えて見て、子どもの変化が表情や身体に現れてきました。生き生きしていません。元々子ども劇場の子どもたちは社会への関心が薄かったです。それが「ヘイライン」に興味を示し、活動を

始めたということは、子どもが主体的に取り組んで活動をするようになった結果が現れているのではないのでしょうか。

この活動をするために、メンバーたちは「傾聴ワーク」というロールプレイを取り入れたワークをやっています。3人一組で、話す役、聞き役、2人の様子を見る役に分かれて実施するものです。これをやっていく中で、お互いの考えていることが自然に出てきて、それを素直に聞けるようになり、メンバー間のコミュニケーションが深まっていきました。仲間意識が出てきました。その上に使命感を持つようになり、社会的な役割を認識できるようになってきました。

クリスマスに「クリスマスライン」というイベント的なものもやってみました。子どもたちに夢を与えるような電話にしたいということで、幼稚園にピラを配ったりしました。子どもたちの電話の中には、「サンタさんですか?」というようなものもありました。大成功でした。

しかし皆が来なくなるようなこともありました。お互いに本音を言わないで避けるような行動に出ているとわかると、皆にメールで「今やめたら中途半端ではないの?」と呼びかけ、何とか戻ってきたときもあります。

活動自体をやめることについて、皆がこの活動に一段落を付け、納得して別の活動に方向転換していくのであれば、それはある意味卒業を意味していて、かまわないと思います。

#### **Q 若者が主体的に進めている活動で大人はどんな役割をしているのでしょうか?**

**A(黒木)** 何かあったときに、大人がサポートします。また大人は、これらの活動を周囲に広げていく役割があります。活動を理解してもらうようにしなければなりません。

#### **Q 大人は子ども・若者たちとどう接しているのでしょうか?**

**A(黒木)** 彼らの適性などを決めつけないようにしています。これは学校でありがちではないでしょうか。彼らのやりたいことを最優先します。間違いを犯したときは、素直に認めることが大切です。「若者ライン」の活動をマスコミが取材に来たときに、社会に活動を理解してもらうために電話の内容を出したときがあり、若者に非難されました。こんなときに、間違いを認めることで、若者との関係修復をしていきました。

また子どもが精神的にバランスを崩しているときもあります。こんなときは大人が目で勝手な判断をしないようにして、見守ることにしています。3,4ヶ月かかることもあります。このようなことは日常的な人間関係ができていますので可能なのです。

#### **Q 子ども・若者と関わることで、大人が変わっていくことはありませんか?**

**A(大場)** 大人は子どもと接していて、いろいろなものをもらっていると思います。例えば「発想の柔軟性」「子育て中であれば、子どもとのスタンス(間合い)の取り方」などです。思春期にある自分の子どもとうまくいってない母親がいて、彼女が自分の子どもと同世代の子どもたちと関わるようになってから、子どもの見方、考え方が変わりました。いろいろな子どもと接することで、「自分の子どもだけが特別でなく、普通なんだ」と思えるようになり、肩の力が抜けて、子育てが楽になったということです。

また小学生の市民ミュージカルの活動(数ヶ月から1年の活動)で、母親が子どもパートナーという役割を与えられ、子どもと一緒にオリジナルのものを作って上演するものでした。そこに親子で参加している人がいて、子どもは5年生でしたが、日常的に関係がぎくしゃくしていました。その母親は活動をしていくうちに、いろいろな子どもと接し、よその子ども可愛くなり、おもしろくなってきて一生懸命になってしまいました。そんな母親を見ていて、子どもも共感できることがあり、いい関係に戻っていったということがありました。

大人と子どもは一緒に活動せず、子どもだけで自由にさせた方がいいという考え方もあります。しかし、親が

夢中になって楽しむことが大切だと思います。大人はそんな中で体験的に子ども理解をしていき、子どもに対する価値観が変化していくと思います。

活動は1回だけのものではなく、継続してできるものが子ども・若者にとっても大人にとってもいいです。

#### Q 子ども・若者が主体的に活動していく中で、子ども・若者にどんな変化がありましたか？

A(黒木) 「若者ライン」のメンバーの中には家庭に問題を抱えている若者がいました。仲間を求めているがうまくいってませんでした。それが「傾聴ワーク」をしていくうちに、自分の感情を出せるようになって、関係性が深まり仲間ができました。活動をしていくうちに自分が役に立っているという実感を持てるようになり、素直にうれしいと感じました。電話の相手を救うだけでなく、自分も救われました。そして社会に役立つ活動をしていきたいと考えるようになり、目標を持つようになりました。

A(大場) 情報誌「WAVE桜」を発行する活動では、若者たちは社会に目が向くようになってきています。自分の中に問題を抱えている若者で、今まで目に入ってこなかった自然や風景を見て、素直に美しいと感じられるようにもなりました。責任感も芽生え、社会に深い関心を持ち、社会とのつながりを意識するようになりました。また本音でしゃべれる仲間もでき、編集会議ではとっくみあいになりそうな雰囲気になることがありますが、それを話し合いで解決しています。あまり深入りしたくないと思っていた若者も、知らず知らずに、活動にも仲間にも深く関われるようになってきたと自分の口で言うようになりました。

子ども・若者は、積極的に外へ出す方がいいと思います。社会に出ていろいろな大人と出会ったり、知り合う中で、魅力的な人に出会うことがあります。そうすると彼らの価値観や考え方が変わり、すぐにそれを行動に表すことが、子ども・若者にはできます。人前で話すことがあまり得意でなかった若者が、話すことを怖くなくなり、NPO 法人を作り、社会のために働きたいと言っています。活動を通じて社会の中の一市民に成長していくきっかけとなっています。

#### Q 大人に望むことは？

A(黒木) 子どもたちと関わる活動の中で、裏切られたりして落ち込むことがあります。そんなときに少し時間をおき、冷静に考えます。そしてまわりには仲間の大人がいます。相談しあいながらまた活動を再開します。

子ども・若者の見方や考え方について、大人たちが1人ずつでも変わっていけば、子ども・若者たちとの関係もうまくいくようになります。大人たちがそんな仲間を増やし、子ども・若者が主体的に参画する活動を保障していくことで、子ども・若者が成長し社会的に自立していくきっかけにしていければと思います。



## 町田市子どもセンターばあん 子ども委員会



“町田市子どもセンターばあん”は、乳幼児から 18 歳までを対象とした地域の子どものための自由な遊びの拠点、子育ての拠点として 1999 年に開設されました。“ばあん”とは、Barn (納屋) = 「いろいろなものがいっぱい詰まっているところ」、Burn (燃える) = 「火がついて炎があがる、感情が高まる」、Barn (スウェーデン語で子ども)、「キミのハートにバーン」の4つに由来しています。

小学生から高校生までの青少年による子ども委員会が、施設の建設段階から話し合いを持ち、その意見を反映して、開設されました。現在は日常的な活動からイベント的な活動まで、子ども委員会で話し合わせ、実施されています。

【お話を伺った方】

町田市子どもセンターばあん館長 奥津林 蔵さん

町田市子どもセンターばあん職員 粕川 秀人さん

草野 大輔さん(子ども委員会委員長、運営委員会委員長、子どもマスタープラン子ども委員会委員長)

佐藤 一貴さん(子ども委員会前委員長、のびっこ長、ガンプラ部長)

鈴木 葵さん(子ども委員会副委員長、欲張り部部長、遠足課長)

Q 「ばあん」開設のきっかけは？

A(館長) 「まちづくりは人づくり」という当時の町田市長の考え方に基づいて、青少年施設を開設してきました。しかし急激な人口増に伴い、学校建設等に追われ児童館建設にまで予算がまわりませんでした。新住民

などによる「児童館がほしい」「学童保育施設を作ってほしい」という要望が強くなってきました。その時期に「子どもの権利条約」を日本が批准するということが重なりました。そこで「中高生の居場所」「子育て支援の場」として児童館の位置づけの施設として計画が持ち上がりました。

専門家として東京工業大学の仙田満氏を迎え、市民らを巻き込んで子どもセンター建設検討委員会を立ち上げて、市内 5 箇所に作ろうということになりました。その 1 号館が、「ばあん」という名称で 6 年前(1999 年)に開設されました。

**Q 「ばあん」を開設するにあたって、子どもの声をどのように反映したのですか？**

A(館長) 「ばあん」を建設するにあたって、青少年課が柔軟な対応を示し、地域住民らによる運営準備委員会を作って検討しました。その中で子どもの権利条約にある子どもの意見表明権に基づき、すでに着工していたがオープンの 1 年前に子ども委員会を作り、子どもたちの意見を吸い上げることに努力しました。

**Q 子ども委員はどのように集めたのですか？**

A(館長) 住民らが中心になって、小学校、中学校、高等学校にチラシをまき、小学校 4 年生から高校生の子どもたちを集めました。実際にはなかなか集まらず、教員推薦や住民の子どもが多かったですが、中には自分からチラシを見て来た子どももいて、全部で 45 ~ 46 名になり、毎月第 1,3 土曜日に委員会が開催されました。今でも継続しています。

**Q 子どもの意見は反映されましたか？**

A(佐藤・・・ばあんの名付け親) 中学 1 年生のときに自分でチラシを見て、おもしろそうだと思って参加しました。自分としては、自分たちの決めたことが 100 % 以上反映されたと思います。

**Q どんなところに反映されましたか？**

A(館長) 運営方法などのソフト面だけでなく、ハード的な部分も変えていくこともありました。建設中の建物を子どもたちがヘルメットをかぶって見せてもらったり、照明関係を変えてもらったり、調理できる部屋を作ってもらったりしました。

このようなことが実現できたのは、職員を通じて届いた子どもや地域住民の声に対して、青少年課が柔軟に対応したことにあると思います。

**Q 委員会の中で大人が口出しすることはなかったのですか？**

A(館長) 大人たちはオブザーバー的に参加していましたので、意見は言いませんでした。したがって子どもたちは自由に意見を言うことができました。子どもたちがわからないことがあれば、大人たちは答える役割に徹していました。

子どもたちがやりたいと言い出したオープニングセレモニーの模擬店では、青少年課に予算がありませんでした。地域の大人たちの有志が 1 人 1 万円出して、60 万円を集めました。この時に出した模擬店の収益と、その後に行われるようになった春・夏・秋のお祭り子ども委員会から、出店依頼を受けて行った模擬店の収益を地域の子どもたちに還元したいという趣旨から、隔月で「ばあんご飯の会」を開き、館内にいる子どもたちや大人の方たちにも食べていただいて、大人と子どものコミュニケーションの場としています。タオルのおじさんという名物となっている人がいて、イベントでは必ず焼鳥屋を出しています。このような人たちが自然と集まって、「ばあんの会」ができていったのです。そして新住民と昔から住んでいる住民が理解し合い現在に至っていま



す。

**Q 職員として関わってきて、苦勞した点や以前の職場と変わった点などはありますか？**

A(粕川) オープン時から職員ですので 6 年目になります。以前の職場は学童保育の指導員でしたが、生活の時間帯が変わりました。ある意味、楽になった部分もあります。それは子どもたちと関わる際にあまり準備をしなくなりました。任せられるようになりました。自分たちから相談してくれますので、こちらから口出しすることはあまりありません。ただし自分で言ったことや決めたことをやらずに何も言っていない子にやらせているような場面では強く叱ります。

公務員の感覚は薄いです。子どもたちの力を重視してやってきました。それによってとんでもないことになったと思うこともあり、苦勞もしますが、何とかなるだろうと思っています。子どもたちも皆でフォローしあっています。

A(館長) 委員会の中で「欲張り部」というものが結成されて、自転車で日本海に行こうという企画が持ち上がりました。この際には、彼(粕川さん)は休みを取って友人を誘い下見に何度も行っています。また市役所へカンパを集めに行き、職員から 6 万円以上を集めました。また職員組合にも掛け合って、帰りの車を提供してもらいました。

**Q 春・夏・秋にお祭りをやっていると聞きましたが、どんなお祭りですか？**

A(粕川) いつもストーリーを決めて、オープニングで劇をしてから始めます。春は誕生祭と言って、町内会代表の人たちの協力を得て、地域の祭りになっています。夏は夏祭りと言って、その都度サブタイトルを決めます。これは地域の商店街の人がバックアップしてくれています。冬は冬祭りと言って、その都度サブタイトルを決めます。これは近所の南郵便局が協力してくれています。普段でも郵便局にはばあんコーナーが設けられていて、消印にもばあんが使われています。これらは地域住民の理解と支援があって、初めて実現するものだと思います。

**Q 子ども委員会のモチベーションはどうですか？**

A(粕川) 最近はマンネリ化しています。オープンから 1 年間はいろいろ議題がありましたが、それが終わって、子ども委員会ではやるのがなくなっています。無理する必要はないと思っています。子どもがやりたいことを保証できる体制が大切だと思います。

この年 3 回のお祭りがあるので、1 年中文化祭をやっているようなものです。会議の時などでは、最初中学生は話を聞いていないように見えますが、そのうちに皆意見を言うようになります。自分の出番に気づいているのだと思います。小学生は祭りが好きです。ですから委員会にも集まってきます。約 60 人の委員の中で、毎回約 20 人が出席して会議を開いています。

**Q 施設で何か問題は起きていますか？**

A(粕川) 物が壊れたり、ゴミが出ます。これについてどうしたらいいのかの対策も委員会で考えます。

A(館長) 施設の利用についてですが、最初は 18 時で閉館の予定でした。しかし高校生などが利用しにくいということで、子ども委員会で検討したところ、21 時まで延長してほしいということになった。しかし職員の手当ができないので、子どもたちの自治でやってみたらどうかと投げかけました。委員会は OK したのですが、議会でもめました。やはり子どもたちが管理することは問題であるということになりました。普通はここから進まない

のですが、議会で職員をつけて、21 時までを利用時間にするようにということになりました。人件費を出してまで子どもたちの言い分を通したわけです。

**Q 子ども委員会に参加してきて、自分が変わったということがありますか？**

**A(佐藤)** 人脈が広がって楽しくなりました。就職できたのもばあんのおかげだと思っています。就職試験の時にばあんでの活動について説明しました。それで採用されたと思っています。まだ採用 1 年目にもかかわらず親睦会の幹事をやっています。こういうこともばあんでやってきた活動が生きています。

**A(草野)** 人づきあいは好きでしたがそれがさらに高じてきました。ばあんに出入りし始めていろいろな活動して子どもたちと関わるようになって、進路について目標ができました。保育士になりたいと思うようになりました。

**A(鈴木)** 最初は楽器講座に参加して、ばあんに出入りするようになりました。そして 1 周年記念で草野君とフォークデュオをやりました。そして子ども委員会に参加して、自分が少しずつ変わってきたような気がします。自分がポジティブな人間になってきたと思います。

**A(粕川)** 彼らはお互いに、いろいろな可能性を引き出しあっていると思います。そうしてだんだん変わっていているのではないのでしょうか。



## 「ばあん」との出会い

子ども委員会委員長 草野 大輔

僕が「ばあん」の子ども委員会と出会ったのは6年前のことでした。あの当時は友達と怖いものなしに無邪気に笑いあっていました。そして今では、少し大人になった 18 歳。僕の友達のマモル君の髪もブロッコリーから坊主に変わるくらい長い時間を、こんなに続けることができたのは同じ子ども委員会の仲間やスタッフの人、そして、「ばあん」を支えている地域の方々のおかげだと思います。これから僕と子ども委員会の6年間の激動の物語を語ろうと思います。

まず初めに、子ども委員会の説明をしたいと思います。子ども委員会は「ばあん」の建設当時に発足し、小学4年生から 18 歳までの子どもたちが館(ばあん)の運営に主体的に関わっています。内容としては、館内の問題を解決したり、年3回のお祭りの準備をしたりしています。

僕は、マモル君と「ばあん」の楽器講座に参加し、子ども委員会の担当職員の粕川さんに出会いました。それは5月5日の誕生祭での演奏会。そう、そこで出会ったのでした。館内では子ども委員会や地域の方が工夫を凝らしたゲームや模擬店などで大盛況でした。僕は、今までに感じたことないくらいの衝撃を受けたと同時に、運命のようなものを感じました。演奏会は無事終わり、僕らが帰ろうとしたそのとき、「一緒に打ち上げに行こうよ」と誘われ、ついていくまま気がついたら、子ども委員会に入っていました。こうして、なんとなく入ったのでした。

毎月第1・3土曜日にある委員会の話し合いに出席していくうちに子ども委員会のおもしろさ、一人ひとり個性が輝いていることに感動し、気がつくとはまってしまいました。お祭りの準備をしたり、みんなで遊んだり、時には真面目に話し合ってみたり…あつという間の6年間でした。中には楽しいことだけではなく、辛いこともありました。それをみんなで乗り越えることができたから、今の子ども委員会があると思います。去年から、僕は子ども委員会の委員長として委員会をまとめてきました。今までは委員として委員会に携わってきたから、右も左もわからず、口をパクパクさせていました。そんな僕を副委員長をはじめ委員会のみんなや粕川さんは優しく支えてくれました。その姿に涙があふれ、一人で泣いた夜もありました。そんな支えもあり、無事に委員長を終えることができました。これからは一委員として子ども委員会を陰ながら支えていき、残りの子ども委員会生活を全うしていきたいと思っています。

「ばあん」には、他にも様々な活動があります。僕とマモル君と粕川さんで立ち上げた「欲張部」では月1回、出来たときの達成感を大事にしようと活動しています。特に印象に残ってるのは、夏休みに行った「315km チャリの旅」です。町田市の「ばあん」から新潟の柏崎まで自転車で走るという企画です。あの時、流した汗と涙と日本海で見た夕日を忘れることができません。

次に、子ども委員会の高校生の中で他の地域の子供たちに「ばあん」の存在を広めたいという声が高まり「のびっこ遊び隊」が結成されました。月1回市内の公園に行き、遊びを提供しています。やはり、僕たちが始めに楽しんで遊ばないと、子供たちも楽しく遊ぶことができません。そこで工夫を凝らし試行錯誤しながら一緒に遊びました。本当によかったと思います。

最近では、僕と「ばあん」の職員で結成した SCEB ( super comic entertainment band )『くま大』が毎回イベントで大暴れしています。興味のある方は、是非見に来てください！！

僕の中で子ども委員会の存在はかけがえのないものになりました。そして、僕がこれから進んでいく道で役立てていきたいと思っています。これを書くにあたって協力してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

分類	内容	子ども会議		町田市子どもセンターばあん 子ども委員会			
	活動主体	運営委員会(青少年)					
参画の段階	8	その理由	イベントでは企画も実施も子どもたちで行っているが、どうしても大人の力が必要な内容については依頼している。				
団体名	町田市 子どもセンターばあん	E-Mail	baan@io.ocn.ne.jp		URL http://www6.ocn.ne.jp/~baan/		
代表者名	館長 奥津林蔵		042-788-4181	スタッフ	担当者1名、館長		
実施時期	通年	参加人数	約90人(小60、 中高30)	対象	小学校4年生～18歳	年齢	
他団体・組織との連携				活動資金			
趣 旨	利用者である子どもたちが主体的に運営に参画するため						
実施することになったきっかけ	建設時の運営準備委員会で直接子どもの意見を聞いたことから						
事業(活動)内容	毎月第1,3,5土曜日15:00～17:00に、館内のルールづくりや苦情処理、年3回のイベントの企画・実施など、その他不定期で新聞の発行(近隣、小中高校に配付)						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	上記2について、すべて参画している。担当者は必要に応じて助言等するが、基本的にすべて子どもたちが中心になって進めている。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり			その他	
	町田市子どもセンターばあん	青少年と大人					
イベントの準備等はすべて子どもたちの方で行っているが、手が足りないところや、進めていく上での問題については必要に応じて助言はしている。進めていく上では基本的には口出ししていない。サポートに徹している。							

表の見方は P.55 参照



## 横浜市青少年交流センター青少年委員会



横浜市青少年交流センターは中高生をはじめとした青少年の文化・交流活動を支援し、青少年の自立促進や育成を図る拠点施設として、“ふりーふらっと野毛山”という愛称で、平成 14 年 12 月 1 日に開館しました。“ふりー ( Free ) ふらっと ( Flat ) ”には、「自由に過ごすことができ、同じ立場(平ら)で交流でき、ふらっと気軽に遊びに来ることができる」という意味が込められています。中高生を中心とした「居場所と仲間作りの拠点」として中高生の声を生かした施設運営を進めています。その一環で「青少年委員会」を設置し、活動しています。

【お話を伺った方】

横浜市青少年交流センター職員 七澤 淳子 さん

青少年委員会委員長 森 正 憲 さん

**Q 「青少年委員会」開設のきっかけはなんですか？**

**A(七澤)** 横浜市青少年交流センター(以下交流センター)開設時に「青少年の声を施設運営に活かすとともに青少年が主体的に活動することを支援していく」という視点がありました。ただし、その中核を担ってもらう青少年たちには、実際に交流センターを使ってもらい、自分の意志で参画してもらいたかったので、平成 14 年 12 月のオープン時には募集せず、事業に参加した青少年が増え始めてきた平成 15 年 9 月に中学生以上の青少年(24 歳まで)を対象に委員を公募して、10 月に発足しました。

**Q 委員はどのようなメンバーが集まったのでしょうか？**

**A(七澤)** 市内の中学校、高等学校にチラシを配付したほか、館内でも利用者に対し周知しました。また、交流センターの主催事業「夏期青年ボランティア活動」(81 人参加)や他のイベントの参加者にも声をかけまし

た。その結果、市内中学校へのチラシから 3 人、交流センター内のチラシで 5 人、夏期青年ボランティア参加者 11 人の計 19 人になりました。年齢は中学校 1 年生から 24 歳でした。

**Q 他施設の子ども委員会などは小学生も対象になっていますか？**

A(七澤) 実際は小学生の利用も大変多いです。しかし交流センターは中高生を主な対象とした事業をおこなっているため、委員も中学生以上を対象にしました。任期は 3 月までとしました。

**Q 平成 16 年度の委員で継続しているものはありますか？**

A(七澤) 平成 16 年 2 月に第 1 期の委員に継続の意思を確認しましたが、「自分の考えていた活動と違った」「部活や受験勉強が忙しい」という理由のほか、進学や就職など環境が変わるためやむを得ず継続しなかった委員もいます。3～4 月に前年度と同様に公募して、9 人の応募があり、そのうち 8 人が継続でした。

**Q 委員会は月何回実施していて、どんなことをしているのでしょうか？**

A(森) 月 1 回の定例会を実施しています。平成 15 年度は主催イベントとして、「若殿様からの挑戦状」を平成 16 年 2 月 29 日(日)に実施しました。この時はイベント部会を立ち上げてそこで、5 回打合せをして企画を練って、当日に臨みました。内容は「館内ウォークラリー宝探しゲーム」というもので、参加者は 29 人でした。スタッフは当日お手伝いしてくれたボランティア 3 人、委員が 10 人でした。その他に宿泊研修会の実施や、開館 1 周年を記念した事業を実施のため青少年のみで組織した「1 周年記念事業実行委員会」に 2 人、「愛称選定委員会」に 1 人を青少年委員会の中から選出しました。またセンター主催のイベントの運営スタッフとしても協力しています。

**Q 主催事業のあとのふりかえりではどんな話が出ましたか？**

A(森) 担当者から定例会でイベントについて説明をしたときに、内容が詰まっていなかったため他の委員が何を手伝っていいのかが分からず混乱させてしまいました。その後打合せを 5 回開き準備をすすめたのですが、当日手伝ってくれたボランティアへの説明がうまくいかなかったのが反省点として出ました。また、準備が遅れて広報できたのが 1ヶ月前だったので、交流センター内にポスターを貼ったに留まり、参加者が少なくなっていました。全体的に準備不足であったので、今後はもっと準備を早く始めたいと思います。

**Q 平成 16 年度も主催イベントはやりましたか？それには平成 15 年度のふりかえりが生きていますか？**

A(森) 平成 16 年度は主催イベントとして「子どもだー！浴衣だー！夏休みも終わりだー！」を実施しました。委員が 9 名と少ないこともあって、部会は設けず中心となって企画する担当者を決め、イベント前の宿泊研修でも企画を練りました。夏期ボランティア活動の参加者と子どもたちが夏休み最後の交流を図るため、ゲームやスポーツ大会を実施しました。参加者は小中学生 30 人、夏期ボランティア 40 人、委員 5 人でした。夏期ボランティアの人数に対して、子どもがまあまあ集まってバランスはよかったです。

ところが夏期ボランティアには当日スタッフとして、ローテーションを組んで活躍してほしかったのですが、その意図がうまく伝わっていなかったため、当日の運営がスムーズにいきませんでした。

**Q 職員はこのような活動にはどのように関わっているのですか？**

A(七澤) 助言をしています。また、学校などへの広報やボランティアの募集周知などをお手伝いしています。しかし準備や当日の運営にはほとんどノータッチです。聞かれたら答える、という程度ですね。失敗するのも勉

強と思っています。

委員とは何でも言い合える関係にあり個人的には色々な意見や話が出るのですが、定例会になるとなかなか意見が出てきませんね。

#### Q それはなぜでしょうか？

A(七澤) 自己主張をするタイプよりもやや依存心の強いタイプの委員が多いかな、という印象があります。あとは、定例会の雰囲気作りができていないんだと思います。どうも会議になると固くなってしまいます。実現可能な範囲の意見しか出てきません。実際に交流センターを利用して事業にも関わり、職員と話す機会も多いので、こちらの気持ちや様子が分かりすぎて、職員や交流センターに気を遣っているのではないかと思います。

例えばオープン時には子どもたちの利用に関して、ほとんどルールらしいものはありませんでした。あるきっかけで、大きくルールが変わったことがあったのですが、その件で委員にアンケートをとってみると、ルールを決めてそのルールを守らなければならないという意見が多かったです。

委員長は協調型のリーダーで委員からは信頼されています。

#### Q 最近の委員会の動きで目につくものはありますか？

A(森) いつでも使える打合せ場所がほしいという意見が出て、事務室の一角を確保し、専用のロッカーも使えるようになり、みんながそこに集まったりなど活動がだいぶ活発になりました。またインターネット上の掲示板を立ち上げて意見を言い合えるようにしています。少しずつ書き込みが増えています。

#### Q 委員をやっていて、変わったという子がいますか？

A(七澤) 最年少の委員がいるのですが、年長者に囲まれて緊張していたのか、意見を言うこともほとんどありませんでした。それがやっているうちにどんどん明るくなって意見も出るようになってきました。委員長たち年長の者が意見を言いやすくするため色々な工夫をしているようです。今年度も継続して活動し、自分から広報担当を買って出ました。

#### Q 今後委員会でやってみたいことはありますか？

A(森) 3月にイベントをやるのですが、それを成功させたい。交流センターを使いやすくして、利用者を増やしたいし、いろいろな人に知ってもらいたいと思います。

#### Q 今後委員会に望むことはありますか？

A(七澤) 手がかからないので、もっと困らせてほしいです(笑)。私とその雰囲気を作っているのかもしれませんが。こちらがしかけないと、まだまだ自分たちだけで動くのはできてないかな…。定例会の前に委員長、副委員長と打ち合わせをしているのですが、どんなことを話し合っただけで何がやりたいのかはなかなか出てきません。

昨年おもしろいエピソードがありました。開館時にあったテレビゲームが壊れたりして出していなかったのですが利用者から要望があるので、青少年委員会でどうしたいか考えてもらおうと伝えてみたところ、結局出さない方がいいという意見が多かったです(笑)。個人的には「出してもいいかな…」と思っていたんですけど。どうも大人が考えている方向、望んでいるだろうという方向に合わせてしまうのかもしれない。

委員会は社会参加の一つであると考えていますので、基本的な社会ルールなど学んでもらえたらと思っているので、遅刻や欠席の際の連絡などはうるさい程言っています。

委員との距離の取り方も難しいですね。仲が良すぎることで、かえって彼らの自由な発想力を狭めている気

もします。職員も試行錯誤しながら委員と一緒に成長していきたいと思います。

## 青少年委員会での体験

横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)

青少年委員会 委員長 森 正憲

桜木町駅からみなとみらい方面とは反対側へ向かい横浜市立中央図書館と野毛山動物園のちょうど中間に「ふりーふらっと野毛山」があります。この施設で青少年委員会の委員長を務めさせていただいている森です。まだできたばかりの青少年委員会でのこれまでの体験とこれからのことについて書いていこうと思います。

### 1、委員になったきっかけ

「ふりーふらっと野毛山」がオープンした翌年、全館を使ってセンター初のイベント「こどもの日まつり」が開催されました。僕も職員から声をかけられこのイベントにスタッフとして関わりました。準備や当日の進行など大変でしたが、終了後は何ともいえない充実感と達成感を味わったのを覚えています。

夏休みのセンターには多くの小中学生が遊びに来ます。彼らの遊びや勉強のサポートをする「お兄さん・お姉さん」としてセンターでは「夏期青年ボランティア(以下夏ボラ)」を募集しました。ただ「遊ぶ・勉強する」だけでなく、それを通して子どもたちもボランティアも多くの出会いを経験し、色々な価値観があることを知り社会を広げてほしい、という活動の趣旨を知り「こどもの日まつり」以来、もっと色々なことを経験してみたかったので応募しました。

夏ボラは高校生から社会人までの 81 名が 5 日間の日程で参加しました。短い期間でたくさんの出会いがあり、刺激を受けました。活動日以外にセンターへ行っても、子どもたちが声をかけてくれたり、一緒に遊ぼうと言われたり... そのような嬉しい出来事を経て、夏ボラをやってよかったと思うほか、何らかのかたちでセンターとの関わりを持っていきたいと思いました。

その思いはまもなく実現することになりました。この年の 10 月、青少年がセンターに主体的に関わる組織として中学生から 24 歳以下で構成する青少年委員会が発足しました。僕は、日々の思いやイベントの企画などを実現させてみたいと思い、応募しました。

そして、委員長という大役を担うことになりました(この後、2 期も委員長をやるとは思いませんでした)。大きな不安がありましたが、他の委員と協力してうまくできればいいなと思いました。

### 2、青少年委員会スタート！そして委員長になってから

委員会をまとめていくことになりましたが、全く初めての経験なのでどうしていいか分からずに戸惑いました。まさにゼロからのスタートです。

まず、考えたのはこの委員会をどんな方向に持っていくかということです。委員全員がどこに向かうべきか分からず漂流状態になってはいけなし、それぞれ思いややる気があってなってくれた委員の気持ちに添えていきたいと思いつつ、言葉でうまく伝えることができず、いつも揺れ動いている状態でした。

次に 19 人もいる委員がどうすれば活動しやすくなるかを考えました。そこで、5 ~ 6 人で構成する部会(小委員会)を作れば活動しやすくなるのではと考え、3 つの部会を作りました。イベント企画部会、広報部会、センター部会の 3 つです。



イベント企画部会、広報部会は比較的活動が分かりやすかったのですが、最後のセンター部会は、センター内での貸し出し物品の管理やどうすれば利用者にキレイに使ってもらえるかななどを考えてもらいたかったのですが、そのことがうまく伝わらず部会員がどんなことをすればいいのか迷ってしまい、結果として機能するにいたりませんでした。

定例会を重ねていくにつれて、ただ議題を進行していくのに精一杯であったのが、どうすれば話しやすい雰囲気を作れるか？もっと意見は活発に出ないのか？などのことも考えるようになりました。定例会では委員長が議事進行をしていますが、慣れてくると「議事を淡々と読み、確認を取って終了」になっていることに気が付きました。僕は、強力なリーダーシップで引っ張っていくタイプではなく、全員と協調してやっていくタイプの委員長だと思います。そこで、議題がすんなり決まると「本当にいいのかな？」と疑問に思うことがあるのです。しかし、担当職員と一緒に考えたり、自分で会議の進め方を勉強したりしていくうちに、だんだんと意見が飛び交うようになってきました。そんな時、委員会主催イベントを行うことが決まりました。参加者は少なかったのですが、その分一人ひとりとコミュニケーションが取れ、とても楽しくできました。ただ当日お手伝いに来ていただいたボランティアさんに「どんな目的でこのイベントを行っていて、こんなことを考えながら活動してほしい」という説明が不足したので、戸惑わせてしまう場面が多くあり、人に説明し、動いてもらうことの難しさと大切さを痛感しました。

このイベントや、3月に行った宿泊研修で討議しあったり、レクリエーションやバーベキューをする中で、委員の結束が高まっていったのを感じました。また、経験をすることで委員たちが委員会活動に対し、もっと意欲的に、そして親しみをもてるようになったのではないかと思います。

第1期は半年という短い期間ということもありあっという間に終了してしまいました。反省として、青少年委員会は何をしていきたいのかということを確認に出来なかったこと、それに対し一人ひとりがどんな意見を持っていたのかを確認できなかったこと、そしてみんなの意見をどう聞いていくのかという会議のあり方が挙げられます。ただ、活動の後半に行ったイベントや研修を通じて委員会の盛り上がりを感じたので、第2期に期待を感じることもできました。

### 3、第2期始動。そして今...

第2期も僕は継続して委員を続けることになりました。メンバーは9名に減り1名の新規委員の他は全員が15年度からの継続です。第1期の反省などを活かしてうまく進めばと思っていました。

委員長も継続して僕が行うことになりました。そして初めに、「少人数の中でどうすればより良い活動ができるのか」をみんなで話し合い、部会を廃止し各事業の中心となる担当者を決め、全員で進めていくことになりました。副委員長を2名に増やしてもらい、より意思疎通をしやすくなりました。

1回目の定例会で、委員長としてこの委員会をどのようにしていきたいのかを話し、広報紙の発行、イベントの開催、そして利用者にとってセンターをもっと居心地の良い場所にするために何ができるのか、の3点を軸に活動をしていくことを、委員の理解を得て決定しました。

そして、活動が始まってすぐの夏休みの終わりに、第2期初めての主催イベントとして「子どもだー！浴衣だー！夏休みも終わりだー！」を開催しました。これは、夏ボラと子どもたちとの交流の場をつくり、夏休み最後の思い出づくりをお手伝いしよう、という目的で企画したものです。

「どうしたらみんなが楽しめるだろう？」と時間配分や役割などを考え準備をしました。当日は、子ども30人、夏ボラ40人の参加者があり、ほぼ全員が「楽しかった」と言ってくれたので、僕たち委員も「がんばってきて良かった」と心から思いました。終了後は、ボランティア同士の交流会も企画し、同じ目的を持つさまざまな年齢や経験をした人たちの出会いの場をつくることができました。しかし、昨年度のイベントの課題でもあった当日

参加のボランティアへの説明不足があり、あらためて『他の人に説明する』ことの難しさを実感しました。このことは、委員会全体の課題として捉えていきたいです。

また、この交流会で委員会のPRをし、10月からは1人、新たな仲間が増えました。

夏休みが終わった後は広報紙発行に向けて全力を注ぎました。少人数なため、一人ひとりの負担が大きかったのですが、みんなで協力し合い、何とか無事に10月に第1号「君にふらっと」を発行することが出来ました。「発行することに意義がある」を合言葉に、編集担当者を中心に全員が記事を書きました。発行後「ここをこうすればよかった」という声が次々と聞こえ、委員長としてこんな向上心あふれる委員会をまとめているのかと実感し、とても嬉しくなりました。第1号約200部はおかげさまであっと言う間に配布予定枚数を終了しました。

第2号は、第1号での反省を活かし、もっと魅力のある広報紙を間もなく発行する予定です。

#### 4、今後の課題

青少年委員会の課題は次から次へとできて、山のようにあります(笑)。

まず、委員会がどのようにセンターと関わりセンターに対してどのように意見を提示していき、利用者に伝えていくか、ということがあります。個人ではいい意見を持っているのに定例会では自分の意見を言えない人もいるようなので、誰もが自由に意見を交換しあうことができる雰囲気づくりが目標です。色々な視野を持つ意見がたくさんでて活発になっていくことは、委員会だけではなく、センター・利用者のためにもなっていくと信じ、委員長として日々努力しています。

次に人数不足があげられます。16年度の10人では一人ひとりの負担が大きくなっているのが事実です。「青少年委員はこんなことをしていて、こんなに大切な経験ができますよ」と周知していき「自分もやってみたい」と思ってもらえるような仕組みづくりが必要だと感じています。

まだ発足して1年。今後しばらくは模索していき、不安定な状況が続くかもしれません。「失敗も勉強だ」と言いつつも暖かく見守ってくれる職員さんたちに感謝し、これからの青少年委員会がどう活躍できるか日々勉強していきたいと思っています。



分類	内容		子ども会議			
	活動主体		運営委員会(青少年)			
<b>横浜市青少年交流センター青少年委員会</b>						
参画の段階	6		その理由	まだまだ委員自身で課題を見つけしていく力が十分とはいえない。しかし一部の事業では主体的に取り組み、大人はそれらについて随時「報告を受ける」形になっているので、6とした。		
団体名	横浜市青少年交流センター青少年委員会		E-Mail	yva-0673@triton.ocn.ne.jp	URL http:// なし	
代表者名	委員長 森 正憲		045-241-0673	スタッフ	担当スタッフ3人(職員1人、コーディネーター2人)	
実施時期	定例会月1回、担当者会議随時		参加人数	対象	年齢	中学生～24歳
			参加人数	対象	年齢	中学生～24歳
他団体・組織との連携			特になし		活動資金	交流センター運営費から支出
趣 旨	横浜市青少年交流センターが青少年にとって利用のしやすい場所になるため、利用者の代表として運営に参加する。					
実施することになったきっかけ	横浜市青少年交流センターの開館に伴い発足。					
事業(活動)内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者のニーズを把握した主催イベントの企画、運営</li> <li>・交流センターの様子や青少年のニーズを探る広報紙「君にふらっと」の発行</li> <li>・センター主催事業の運営補助</li> <li>・センター主催の青年ボランティア研修の運営補助</li> </ul>					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての委員が公募により集まっている。委員長、副委員長(2人)が定例会前に担当スタッフと事前打合せし、議題の選定や当日の司会進行を行っている。また、イベントや広報担当は、随時担当者会議を開催し、企画から実施まで行う。担当スタッフは適宜助言を行っている。</li> </ul>					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他	
	横浜市青少年交流センター		大人			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発足してから1年と期間が浅いため、委員会の運営基盤が確立されてなく、自分たちが何をすべきなのか、何をしたいのかを見出すことが難しいようだったので、担当職員が課題を与え、委員長・副委員長を中心に、委員がそれらについて考え、実行していく、という方法を取っていた。しかし、徐々に自分たちのやっていきたいこと(広報紙の発行や主催イベントの実施など)が明確になり、それらに対して、自分たちで企画し、相談し、実行していき、そのことが自信となっていっている。現在は、必要な時に助言を行う程度になってきている。また学生が多いので、会議等の交通費は負担している。</li> </ul>						

表の見方は P.55 参照



## チャレンジショップ Gestoreおだわら



“チャレンジショップ Gestoreおだわら”は、小田原銀座商店街の空き店舗を有効活用して、県立小田原城東高等学校の生徒たちが授業の一環として店舗経営に取り組んでいるものです。Gestore（ジェSTORE）はイタリア語で経営者という意味があります。地元商店会や自治会青年部などと協力し、イベントに参加することで、商店街の活性化にも貢献しています。

【お話を伺った方】

小田原城東高等学校教諭 廣幡 清広さん

黒石 陽子さん(3年生)、木村 那々子さん(3年生)

**Q 出店の経緯を教えてください。**

A(廣幡) 農業高校、工業高校、水産高校など専門高校は机上で学んだことを実習する施設を持っていますが、商業高校は常に実習する施設というものがなかったというのが出店しようと思ったきっかけです。これは生徒ではなく教員としての発想です。文部科学省が推奨する「みんなの専門高校プロジェクト」の2年目の事業として行いました。また単独で店舗を開店させるより、地元の専門高校生で一つの店舗経営を行ったほうがメリットがあると思ったので、小田原城東高等学校、吉田島農林高等学校、小田原城北高等学校の3校の協働で、平成16年4月29日に開店しました。

**Q 学校での位置づけはどうなっているのでしょうか？**

A(廣幡) 専門高校生徒の実践的活動を通じて授業で学習し習得した専門的知識・技術等の定着を図ろうとしています。また商業人として、起業家精神(アントレプレナー)を育成することを目標としています。

**Q どういう組織で取り組んでいるのでしょうか？**

A(廣幅) 火曜日から金曜日までは「課題研究」の生徒が 15 時から 18 時まで担当しています。生徒側の組織としては、「課題研究」を選択している生徒が、商業科・国際経済科 13 人、情報処理科 8 人です。土曜、月曜、祝日は「店舗経営同好会」の生徒が午前、午後のシフトで担当しています。「店舗経営同好会」は 1 年生 4 人、2 年生 4 人、3 年生 26 人計 34 人です。

大人の側の組織としては、3 校ジョイント事業推進協議会(小田原城東高等学校、吉田島農林高等学校、小田原城北高等学校、自治会、商店会、小田原市、神奈川県)、3 校ジョイント事業実行委員会(3 校の担当者)、城東高校の校内組織としては「みんなの専門高校プロジェクト」のメンバー + 賛同者(10 人)がいます。

**Q 販売品目とその仕入れルートはどうなっていますか？**

A(廣幅) 販売品目は、魚の缶詰、瓶詰めのジャム、缶ジュースなどの食品類が多いのですが、小物類や花などもあります。全国の専門高等学校を中心に、職員と生徒とでインターネット等を利用して選定し仕入れられています。生徒が開拓し教員が連絡して、生徒が相手校と商談するという方法をとっていますが、教員主導から生徒主導へ移行しつつあります。委託商品(施設などから物品の委託を受け販売している商品)は地元らしい産品を中心に選定しています。また商店会の方からの委託先を紹介していただいているケースもあります。

**Q 地域との関わりはありますか？**

A(廣幅) 小田原市主催のイベントや商店会主催のイベントに積極的に参加しています。例えば地元の銀座自治会青年部の方々と一緒に夏祭り(銀座ゆかた祭り)を企画し実行したり、「Gestore おだわら」の単独イベントで防災意識を高める目的で普通救命講習会を実施しました。それから銀座商店会の街頭放送などを作成しています。

**Q 商店会のサポート体制はあるのでしょうか？**

A(廣幅) オープン時に商店会が金券を発行して後押しをして頂きました。普段の時も、お店の前を通るときに生徒に声を掛けて頂いたり、ディスプレイのアドバイスなどをしてもらっています。近くの新聞販売所で新聞折り込み広告を無料で入れていただいています。

**Q 地元やマスコミ等の反響はどうでしょうか？**

A(廣幅) 地元の評判は良いと聞いています。神奈川では初めての試みで、7 月 28 日には知事も視察に来られました。NHK、テレビ神奈川、小田原 CATV、フジテレビ(取材継続中)で放映され、日経新聞、日経流通、読売、朝日、毎日、日本農業新聞、神奈川新聞、地元タウンニュース、地元ポスト広告などに掲載され、NHK、FM 横浜、山陽ラジオ放送で放送され、報道されました。

**Q 活動資金はどうなっているのですか？**

A(廣幅) 資本金(小田原市 100 万円、起業戦略プランコンテスト 10 万円、PTA 30 万円)の 140 万円でスタートしました。今年度上半期の利益は 33 万円で、家賃が 50 万円ありますので、純益は赤字ですが、市からの補助金を家賃に充てていますので、何とかやっていけます。

**Q 生徒との関わりで苦労した点がありますか？**

A(廣幅) 始める前は生徒の間では盛り上がりませんでした。どうせ働くならアルバイトの方がいいという意見

が多かったです。それをやる気にさせるのが大変でした。しかし始めてみますと、アルバイトはやらされるだけですが、このお店では自分たちで考え、商品を仕入れ販売することによって、利益を上げることができますので、楽しいと思うようになっていきました。

**Q 中には馴染まない生徒もいるのではありませんか？**

A(廣幡) 確かに接客が苦手な生徒がいました。しかしそういう生徒でも会計はおもしろいと思ったり、絵を描くことが好きなので、それを商品作りに生かしています。また逆に人と接するのがどうかと思っていた生徒が、お店で接客してみてもおもしろいと感じた場合もあります。体験的に学べますので、自分がどういう分野に向いているかを考えることができるようになり、進路選択にも役に立ちます。

**Q 生徒の変化はありますか？**

A(廣幡) 接客したり、商店街の人に接することで、社会のルールを学んだようです。例えば商店街の人に接客するときの態度やシャツを出した着こなしや髪型などについて注意され、変わっていきました。また暇になると店内で携帯メールを始めたりしていたのが、自分たちでルール作りをして人前ではしないようにするようになりました。また暇な人間がいないようにお店に出る適正な人数を考え、4人から2人にしました。営業日誌をつけ、翌日のシフトの生徒に引き継ぎをして、営業に支障のないように工夫しています。このように最初は文化祭の延長のような感じでしたが、自分たちのお店だという意識が出てきたようです。

**Q お店をやってみようと思ったきっかけは？**

A(黒石陽子、情報処理科3年生、店長) 情報処理科ではプログラミングなどを勉強していますが、「流通経済」という授業を受けて、おもしろいと感じました。そこで課題研究という授業で「店舗経営」を選択しました。

**Q 実際にやってみてどうでしたか？**

A(黒石) 接客がおもしろいと感じました。それから意見を出し合って商品開発や仕入れ企画書を考えたりするのが、皆でひとつのことをするという意味で充実していて楽しいです。

**Q お客さんは何か言ってくれますか？**

A(黒石) お客は、18歳から64歳までの女性をターゲットにしていますが、若い人はなかなか来てくれません。しかし近所の年配の方たちが、いろいろアドバイスをしてくれます。商品のディスプレイの仕方や服装についてなどです。また「この商品はおいしいのよ」と言ってくれる人もいます。

**Q 生徒たちで広報を工夫していますか？**

A(黒石) 広告を自分たちで作って、読売新聞の折り込みに入れてもらっています。また街頭でビラ配りをしています。

**Q 銀座ゆかた祭りでは具体的にはどんなことをしたのですか？**

A(黒石) 地元の銀座自治会青年部の人に何かやってみないかと持ちかけられました。そこで企画会議に参加し、生徒の意見としていろいろ企画を出しました。そして看板作り、ビラ配りもしました。生徒と青年部の人たちとで仕切って、銀行の駐車場を借りてステージを作り、吹奏楽やバンドのコンサートを開き、大変盛況でした。また模擬店を開き、浴衣で来店者を出迎えました。浴衣で来店すると割引したり、粗品がもらえる特典など

も考えました。夜には浴衣で来場した人を対象に、帯の結び方や絵柄などのファッションをチェックする「ゆかた de ナイト」も行って、評判がよかったです。

**Q お店をやっていて、生徒間でぶつかることはありませんか？**

A(黒石) 最初のうちはディスプレイの方法などで意見が対立しましたが、最近はあまりありません。その日のシフトの2人で開店前に相談して、ディスプレイなどを考えています。自分としてはそういうことも含めて、「やらされている」というよりも「やっている」という意識の方が強いです。積極的な攻めの姿勢です。

**Q やってみて、自分に変化はありましたか？**

A(黒石) 以前は人前で仕切ることができませんでしたが、仕切れるようになりました。人見知りでなくなり、大人と普通に話せるようになりました。度胸もつきました。お店でいやなことはあまりありませんが、あってもすぐに忘れられるようになりました。

**Q 始めたきっかけは何ですか？**

A(木村那々子、情報処理科3年生) 何も知らないことなので、好奇心があって始めました。やっていくうちに自分の至らない点が見えてきました。店長が頑張っていますので、刺激されてやる気が出てきました。

**Q お客さんと接してみようですか？**

A(木村) 今まで親か先生しか接していなかったのが、いろいろ接することができるようになりました。その中で今までどおり普通に話をしても自分の言葉が通じないことに気づきました。また仕事をするということは、広い視野で物事を考えなくてはいけないということや、先を読まなければならないということも理解できました。

**Q 落ち込むことはありますか？**

A(木村) 意地悪な人もいますが、こういう人も世間にいるんだなと思うようにしています。お店をやっているので腹を立てても仕方ないと思うようにしています。未来は自分で明るくするものだと思いますので、あまり落ち込むことはありません。



**Q 先生とぶつかることはありますか？**

A(木村) 「やらされている」と感じることはありますが、自分で選んだことなので基本的には「やっている」と思っています。現在は先生が主に仕入れをしていますが、生徒に任せてほしいと思っています。

**Q 先生がいてよかったと思うことはどんなことですか？**

A(木村) 値段を考えるときなどの困ったとき、判断に迷ったときなどに先生のアドバイスが有効ですので、いてくれると助かります。またお店のことだけでなくいろいろ悩みを相談できます。

**Q やってみて、自分に変化はありましたか？**

A(木村) 先生を見る目が変わりました。それまでは先生は先生であって、勉強をしてくれる存在でしかありませんでした。一緒にお店をやりながら先生も普通の人間なんだと思うようになりました。人は1人では生きていけないこともわかりました。例えば商店街の人が協力してくれてはじめてお店が成り立つことが具体的な体験を通してわかりました。自分の中ではやってみてよかったかどうかは、まだわかりませんが、卒業するときには評価が出ると思います。

表の見方は P.55 参照

分類	内容		店舗経営		チャレンジショップ Gestoreおだわら		
	活動主体		高校生				
参画の段階	6		その理由	教員が企画し、授業の一環で始めたが、徐々に生徒たちが店舗経営に参画するようになり、アイデアも自分たちで出すようになり、教員と相談しながら進められるようになってきたから			
団体名	小田原城東高等学校	E-Mail	なし	URL			
代表者名			0465-34-2847 小田原城東 高等学校	スタッフ	教員、生徒		
実施時期	月曜日以外	参加人数	34人	対象	一般	年齢	18～64歳
他団体・組織との連携	県、小田原市等		活動資金	小田原市の補助金100万円、コンテスト賞金10万円、PTA30万円			
趣旨	専門高校生生の実践的活動を通じて授業で学習し習得した専門的知識・技術等の定着を図ろうとしている。また商業人として、起業家精神(アントレプレナー)を育成することを目標としている。						
実施することになったきっかけ	農業高校、工業高校、水産高校など専門高校は机上で学んだことを実習する施設を持っているが、商業高校は常に実習する施設というものがなかったというのが出店しようと思ったきっかけである。						
事業(活動)内容	店舗経営及び地域活動への参加						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	商品選択、仕入れ、販売、広報等の店舗経営への参画及び地域活動の企画・実施						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり			その他	
	小田原城東高等学校	青少年と大人					
始める前は生徒の間では盛り上がらなかった。どうせ働くならアルバイトの方がいいという意見が多かった。それをやる気にさせるのが大変だった。しかし始めてみると、アルバイトはやらされるだけであるが、このお店では自分たちで考え、商品を仕入れ販売することによって、利益を上げることができるので、楽しいと思うようになっていった。							



## 調査による活動事例一覧

子ども・若者が主体的に参画する活動事例について、関係機関・団体に依頼して調査を実施しました。その結果回答をいただいた 83 事例(全 93 事例から取材事例 10 を除いたもの)をすべて掲載しました。表の見方は P.55 にあります。



# 1 「子ども・若者が主体的に参画した事業・活動について」の調査結果について

## (1) はじめに

神奈川県青少年指導者養成協議会(以後協議会)では平成 16 年 4 月に「かながわ青少年支援・指導者育成指針」を施行しました。その中で青少年育成の視点として、青少年の「多様な体験学習の促進」「主体的な参画の促進」「社会的自立の支援」を掲げています。この3つの視点に立った青少年活動の活性化を目指し、青少年支援・指導者がどのように活動を立ち上げ、子ども・若者と関わればよいのかを明らかにするための事例集作成を目指しました。そのために各関係機関・団体等に調査を依頼し御回答いただきました。そして御回答をいただいた事例を分類した表が、P.110 の活動事例分類一覧表です。

## (2) 調査方法・対象について

郵送・メール・FAX にて調査用紙を送り、FAX・メールで回答していただきました。

調査対象は、協議会会員及び紹介団体、専門部会委員の紹介団体・個人、インターネット等で検索して該当すると思われる団体等です。

## (3) 調査結果について

調査結果は、取材事例も含めると回答団体数 52 (県内 48、県外 4)、事例数 93 (県内 88、県外 5) でした。回答団体のうち行政機関が 28 団体、行政機関の関連組織が 5 団体、県立高等学校 1、民間団体が 18 団体です。

行政機関は、県内市町村 22、横浜市の 4 区、滋賀県 1、町田市 1 です。行政機関の関連組織は、(財)藤沢市青少年協会、(社)神奈川県青少年協会、川崎市子ども夢パーク、横浜市青少年交流センター、神奈川の教育を推進する県民会議です。

民間の 18 団体の内訳を見てもみますと、神奈川県子ども会連絡協議会 1、市子ども会連絡協議会 2、ジュニアリーダーズクラブ・シニアリーダーズクラブ 2、ボーイスカウト 1、ガールスカウト 1、私立高等学校 1、他 10 でした。

表 1 回答団体数

計	県内	県外
52	48	4

表 2 回答団体内訳

行政機関	行政機関の関連組織	県立高等学校	民間団体
28	5	1	18

調査期間は短かったのですが、93 事例の回答(取材事例含む)をいただきました。内容別に事例を分類してみますと表 3 になります。キャンプ、研修がそれぞれ各 13 事例と最も多く、それ以外に多いのが交流が 11 事例、成人式 10 事例でした。「その他」の内容は、ボランティア体験活動、イベント、冒険遊び場が各 2 事例、宿泊体験、自然体験、海洋体験、うどん作り体験、広場あそび、子どもの遊び、ナイトウォーク、レクリエーションゲーム、きもだめし、演劇、人形劇、ライブ、ダンス、講座、国際理解、活動発表会、情報誌発行、店舗経営、電話相談、フリースペースが各 1 事例です。

行政機関に主に調査をお願いしたこともあり、特に行政機関の主催事業または委託事業が多くなっています。またそれ以外の事例で大きな組織での活動が主で、地域での小さな活動や草の根的な活動は少なくなっています。単位子ども会活動などのもっと身近な活動事例を発掘したかったところです。

表3 回答事例 内容別内訳

内容	キャンプ	研修	交流	成人式	まつり	子ども会議	スポーツ	地域活動	その他	合計
事例数	13	13	11	10	6	6	4	4	26	93

企画・立案は誰がしたのかを内容別で見たものが表4です。10事例以上あるものについて見てみると、どの内容も青少年と大人による事例が多くなっています。しかしキャンプ、成人式について青少年だけで企画・立案した事例の割合がやや多く、また大人だけによるものはありません。研修、交流については青少年だけによる企画・立案の事例が少なくなっています。全体では青少年が企画・立案に関わっているものが93事例中75事例になっています。

表5は、『「参画の段階」の説明』(P.56)を参考に回答していただいた結果です。参画の段階が6～8になっている事例は事業・活動に青少年がより主体的に参画しているもので、78事例あります。表4と表5は、ある程度連動している結果だと言えます。

表4 企画・立案

	キャンプ	研修	交流	成人式	まつり	子ども会議	スポーツ	地域活動	その他	計
青少年	5	3	2	4	2	1	1	2	6	26
青少年と大人	8	7	7	6	2	2	1	1	15	49
大人	0	3	2	0	2	3	2	1	5	18

表5 参画の段階別内訳

参画の段階	1	2	3	4	5	6	6と7	7	7.5	8
事例数	0	0	1	9	5	45	2	19	1	11

活動主体というのは実際の事業・活動の場面で中心になって運営をした側のことです。青少年が主体的に参画している事業・活動の事例ですから、活動主体は実行委員会(青少年)、ジュニアリーダー・シニアリーダー、青少年グループ、運営委員会(青少年)、高校生などで、青少年が多くなっています。しかし市子ども会連絡協議会、青少年指導員連絡協議会、行政、青少年育成団体、NPO(公益性のある非営利団体、市民活動団体等)、NPO法人(NPOのうち法人格を取得している団体)、社団法人などで、大人が活動主体になっている事例もあります。これらは青少年が何らかの形で運営に関わっている事例ということになります。

企画・立案との関連性を見ると、ジュニアリーダー・シニアリーダーや青少年グループでは青少年による企画・立案の事例が多く占めています。

表 6 活動主体と企画・立案

活動主体	事例数	企画・立案		
		青少年	青少年と大人	大人
実行委員会(青少年)	22	6	14	2
ジュニアリーダー シニアリーダー	15	10	4	1
青少年グループ	13	9	4	
子ども会(市子ども会連絡協議会、単位子ども会等)	12	1	4	7
行政	7		6	1
市民活動団体	5		3	2
青少年指導員連絡協議会	4		4	
青少年育成団体	3		1	2
運営委員会(青少年)	3		2	1
高校生	2		2	
NPO 法人	2		1	1
ボーイスカウト	1		1	
社団法人	2		1	1
ガールスカウト	1		1	
青少年団体	1		1	

## 2 調査結果のまとめ ～提言に変えて～

子ども・若者が主体的に参画した活動事例として、93 事例が集まってきました。調査対象の多くが行政機関及び関係団体であることもあり、行政機関の主催事業や委託事業の事例が多くなっています。これらの事例は基本的には大人が仕掛けたもの(参画の段階 4～6)です。子ども・若者が主体的に取りかかったもの(参画の段階 7,8)は多くありません。子ども・若者が主体的に取りかかった事例はまだ他にもあると考えられますが、今回の調査では多くは集約できませんでした。

時間をかけて地域に根ざした活動を掘り起こせば、さらに身近な事例がまだまだあるのではないかと考えられます。これについては今後の課題とさせていただきます。しかし今回集まってきた事例についても、示唆に富むものは多く、じっくり見ていただければ子ども・若者への大人の関わり方について参考になるでしょう。

特に注目して取材した事例では、必ず活動の中心となっている大人、若者が存在しています。誰にでも同様な子ども・若者との関わり方ができるとは言えませんが、「取材事例紹介」を読んでいただければ、関わり方のエッセンスを見つけることができるでしょう。また若者が何を考え、活動を立ち上げ続けているのかということも見えてくるのではないかと思います。

例えば P.25 の「子どもによる市民のための情報誌『WAVE 桜』」や P.28 の「チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン」では、若者が主体的に取りかかって活動している事例ですが、そこにはいろいろな方法で彼らを支えている大人がいます。この辺りは P.30 からの Q&A をお読みいただきたいと思います。物理的な支援だけでなく、心の支えになっている部分が大きいのではないかと思います。若者が活動の中で壁

にぶつかった際に、それを支えていくためには日常的な人間関係ができていて、気軽に声をかけたりかけられたりする関係でないと難しいでしょう。また若者から何かを言い出すまで待つという姿勢も必要です。特に精神的に不安定な思春期にある若者とつきあっていくには、そういうきめ細かい配慮が必要となります。

また P.33 の「町田市子どもセンターばあん 子ども委員会」では、「ばあん」建設時から開設されて以降も、温かく見守り続けている地域住民(大人たち)の存在は、欠かせないものであることがわかります。大人の役割は多様で、直接子ども・若者と関わらなくても支援する方法があることを示唆していると言えます。そしてこのような施設には「人」(施設職員)がいて、初めて若者たちが自由に活動できるようになるということもわかります。このような「人」は、若者と同じ目線になることができ、ある時は一緒にはしゃぎ、騒ぎ、楽しみ、またある時は厳しく若者を叱ることができる「人」です。

Q&A や若者たちに執筆していただいた文章を読むと、若者たちが活動を通して自分の変化や成長に気づき、目的意識を持って活動を継続していることがわかります。そして社会へ出ていくための自覚を育み、自立のきっかけにしています。

子ども・若者と関わる際に、指導的関わりが必要だと思いますが、支援的な関わりがより必要になってきています。特に子ども・若者の主体的な参画活動を促進していくためには、どちらかということ子ども・若者の持っているものを引き出し、子ども・若者が自らの力で活動できるようにすることが大切です。そしてその支援的関わりが一律でなく、多様であることがこの事例集の中で明らかになっています。

さてこの章に出てくる調査による活動事例を見ていく際に、気をつけていただきたい点は、「参画の段階」の数字の高低にはあまりこだわらない方がよいということです。子ども・若者の個人あるいは団体の成長の段階によって、それは変わってくるものです。大切なことは子ども・若者が自らその活動を選び取って、これらの活動に関わったのかどうかです。そして子ども・若者がこの活動を通じて、何を学びどう変わったのかということが最も重要です。

子ども・若者が主体的に参画する活動における大人の役割は、子ども・若者のそれぞれの段階に応じて支援していくことです。支援にもいろいろな方法があります。活動を立ち上げる際に子ども・若者が何を考え、どんなことをしてみたいのかということを引き出す役割、あるいは活動の中でうまくいかなくてモチベーションが下がったときなどにそれを支える役割もあります。また活動するための会場や資金の確保など、大人でできないものもあるかもしれません。そういうところで大人が支援していくことが必要なのです。あくまで大人は脇役であり、子ども・若者が主役なのです。

このように子ども・若者が主体的に参画する活動が、各地域で盛んに行われることで、子ども・若者の体験学習の機会が増え、彼らが社会的に自立するきっかけになることでしょう。



### 3 活動事例83

活動事例の表の見方(下の表は例です)

**活動事例分類一覧表(P.110)の分類1と分類2**

分類1(内容)は事業名をカテゴリー化  
 分類2(活動主体)は団体名をカテゴリー化

参画の段階の解説を参考に、自己評価した

参画の段階につけた自己評価の数字の理由

**事業名**

分類	内容 活動主体	キャンプ 青少年	<b>チャレンジ ザ キャンプ in 丹沢</b>			
参画の段階	6	その理由	大人が主催者であるが、企画の段階から子どもたちの考えを取り入れ、大人と相談しながら最終的に決定したから			
団体名	愛甲サッカークラブ	E-Mail	なし	URL なし		
代表者名	愛甲 太郎		-	スタッフ	大人2人、高校生3人	
実施時期	夏休み 4泊5日	参加人数	20人(大人2、高校生3、小学生15)	対象	愛甲サッカークラブの小学校5～6年生	年齢 10～12歳
他団体・組織との連携	かながわ森林づくり公社、清川青少年の家		活動資金	ニッセイ財団の助成金50万円を使ってキャンプ道具を購入、食費、交通費、宿泊費等は親に負担してもらった。		
趣 旨	自分のことは自分でしなければならないキャンプ生活を通して、日常では体験できないことを体験し、自立心を養い生活力を身につける。キャンプの楽しさ・苦しさを味わう。					
実施することになったきっかけ	子どもたちのキャンプをしてみたいという声					
事業(活動)内容	丹沢山中の登山、森林ボランティア、キャンプ。1泊目は札掛森の家、2、3泊目は山中にキャンプ、4泊目は清川青少年の家。					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	登山計画、食糧計画、キャンププログラムについて、子どもが中心に考え、大人と一緒に決定した。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり			その他
	愛甲サッカークラブ	青少年と大人	(ここから複数回答)			
できるだけ子どもたちに考えさせることで、やる気を損なわないように務めた。しかし登山の経験のない子どもたちに計画を立てさせると、無謀なものになるので、それを修正して安全な計画にするのが大変だった。登山経験のある高校生のボランティアの手配や資金繰りについて大人が進めた。						

### 活動事例分類一覧表(P.110)の分類3

分類3(企画立案)は、「青少年」「大人」「青少年と大人」から選択回答

大人の関わり方に下記の選択肢から複数回答してもらった。

- 基本的には口出しせず、青少年が事業・活動を進めるのを見守った。
- 青少年が事業・活動を進める中で、青少年に悩みなどで相談を受けたときに、話を聞き相談に乗った。
- 青少年が事業・活動を進めていくときに重要な場面で助言した。
- 会場、資金、広報等について手配した。
- 安全管理について配慮した。
- その他

## 「参画の段階」の説明

参画の段階	説明	大人と子どもの関係	事例
8	子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する。	子ども・若者が自分たちで発案して大人を巻き込んでいるが最後まで自分たちが責任を持つ活動である。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例えばネパールに学校を作るための募金活動を企画し、日本のNPOを巻き込んで、現地の受け皿を探してもらい、募金で集まった資金を送ってもらう。</li> <li>・学校の文化祭でクラスとか部活で子どもたちが活動するときに、先生を巻き込んでしまうものである。演劇やスタンプをやるときに、先生に役割を与えて、盛り上げる活動である。</li> </ul>
7	子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する。	子どもたちが何のためにやるかを自分たちで決めて、自分たちで分担をして活動をする。大人がほとんど役割がなくて腕を組んでみてほしい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞でネパールのNPOが現地で学校づくりをしているのを知り、募金活動をして、集まった資金をNPOに送る。</li> <li>・ストリートミュージシャン、クラブ文化、ネット文化など、若者が勝手に企画をしてやってみて自分たちで評価をしているもの。</li> <li>・親の目の届かないところで、好き勝手に子どもたちが遊んでいる。</li> <li>・学校の文化祭でクラスとか部活で子どもたちが活動する。</li> </ul>
6	大人が仕かけ、子どもと一緒に決定する。	大人が子どもに投げかけて、子どもと話し合いをして納得の上で決めていく。	子どもたちが何のために募金をするのかがわかっていて、活動の方法・場所等について子どもと大人で話し合って決め、募金活動をする。
5	子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる。	決定するのは大人であるが、子どもは意見が言える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが何のために募金をするのかがわかっていて、募金活動の方法・場所等について子どもは意見を言えるが、決定は大人がするような募金活動。</li> <li>・「子ども議会」「青年議会」などで、子どもが事前の質問まで考え、終わった後大人がフォローをして実行する。</li> </ul>
4	子どもは仕事を割り当てられるが、情報は与えられている。	大人が計画をして、子どもは役割を果たしている。最終決定は大人の側にあり、子どもに意見は聞いてない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが何のために募金をするのかがわかっていて、募金活動している。</li> <li>・学校で言えば当番とか日直とか役割を決められたもの。</li> <li>・「子ども議会」「青年議会」などで、終わった後大人がフォローをして実行する。</li> <li>・地域の伝統行事とか子どもとやっている歌舞伎など。</li> </ul>
3	形だけの参画	子どもは形だけは参加しているが、実は参加していない。	「子ども議会」「青年議会」などで、事前の質問にはシナリオがあり、終わった後に何もしない。
2	お飾り参画	子どもは何しているかわからないが、ほしいものをもらえるのでそこにいる。	大人の募金活動、チャリティーでも子どもがここにいてくれたら絵になるというので子どもに来てもらう。子どもに募金箱を持たせているが、子どもは何しているかわからない。けれども絵がほしいからそこにいるという状態。
1	操り参画	大人がやっているのにもかわらなく、子どもがやったということにするものである。	幼稚園の子どもに絵を描かせる。それをまとめて絵本にする。子どもが作ったとって売り出す。子どもは絵を描いただけで、大人が編集をして勝手に作った絵本である。

『子どもの参画』（ロジャー・ハート、萌文社）の「参画のはしご」を参考に事例作成

< キャンプ >

分類	内容		キャンプ		平塚市シニア・リーダーズクラブ大イベント「キャンプ」		
	活動主体		シニアリーダー				
参画の段階	8		その理由	職員も参加者の1人としてプログラムへの参加を勧められたりする。			
団体名	平塚市シニア・リーダーズクラブ	E-Mail	なし		URL	なし	
代表者名	H16年度 会長 鈴木 伸明		0463-32-7029 平塚市市民部 青少年課	スタッフ	平塚市シニア・リーダーズクラブ生18名程度		
実施時期	夏休みの土日1泊	参加人数	40人 (募集人数)	対 象	市内在住の小学4年～6年生の児童	年 齢	9～12歳
他団体・組織との連携	平塚市青少年課・平塚市びわ青少年の家(青少年課管轄)		活動資金	参加費1人2,300円 この中から現地までの交通費、食材代、シートクリーニング代などをまかなう。			
趣 旨	団体生活の楽しさ・難しさを体験してもらい、今後に役立ててもらう。						
実施することになったきっかけ	本会は平塚市ジュニア・リーダーズクラブの卒業生が自主的に集まった会で、ジュニア・リーダー時代に培った技術や精神を参考に、小学生に対するキャンプを行うことで自分達の活動の活性や、小学生へ集団生活の喜びを理解して欲しいと始めた。						
事業(活動)内容	1泊の宿泊に伴い、班での役割分担決め、子ども達だけで食材の購入、路線バスでの移動、野外炊事、入浴などの集団生活を中心に行う。宿泊はテントで通常行う。(本年度は、場所の関係上宿泊施設での宿泊となった)						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	平塚市シニア・リーダーズクラブ生が募集・企画・立案等全てを行う。行政側は募集する際の事務処理や安全管理のみを行う。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	平塚市シニア・リーダーズクラブ	青少年	(広報のみ)				
基本的に行政側は見守るだけで、プログラム自体は一切クラブ生に任せている。参加者募集の際には広報へ掲載のための事務を行政側が行うが、施設の予約や資金繰り、小学生の安全管理等も全てクラブ生の方で行う。							

分類	内容		キャンプ		チャレンジキャンプ in びわ 2003		
	活動主体		行政				
参画の段階	6		その理由	キャンプにおけるすべての内容などは子どもたちの意見をできるだけ尊重し、大人と相談しながら最終的に決定したから			
団体名	平塚市市民部 青少年課	E-Mail	なし		URL	なし	
代表者名	鈴木 通明		0463-59-0871 平塚市びわ 青少年の家	スタッフ	大人11人 大学生20人 高校生4人		
実施時期	夏休み1泊2日	参加人数	63人(職員・スタッフ35人、参加者28人)	対 象	全小学校4～6年生	年 齢	9～12歳
他団体・組織との連携	特になし		活動資金	食費、交通費などは各参加者に負担していただき、その他必要物品は市の公費より支出			
趣 旨	自然に囲まれたびわ青少年の家を舞台に子どもたちが自ら計画を立て、普段の生活では体験することのできない時間や空間を共有することを通じて子どもたちの自主性、協調性及び創造性を養うことを目的として実施する。						
実施することになったきっかけ	特になし						
事業(活動)内容	びわ青少年の家におけるキャンプ、内容は各班ごとに決定						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	1泊2日の間のプログラム、食事などすべて子どもが中心に考え、スタッフと一緒に決定。しかし、安全面などのことを考え、最低限度のルールはスタッフが決定						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	平塚市市民部青少年課	青少年と大人					
子どもたちがすべてのプログラムを決め、実行する中で、自主性や協調性などを養ってもらうのが基本的な目的なので、プログラムなどを決めていく際に、どこまでスタッフの方で助言や注意をしてよいのかの判断が難しかった。ボランティアスタッフの手配や必要物品の準備などについて大人が進めた。							



< キャンプ >

分類	内容		キャンプ		中学生広場			
	活動主体		行政					
参画の段階	6		その理由	大人が主催者であるが、企画の段階から子どもたちの考えを取り入れ、大人と相談しながら最終的に決定したから				
団体名	秦野市青少年課	E-Mail	seisyou@city.hadano.kanagawa.jp		URL			なし
代表者名			0463-81-7011 秦野市青少年課	スタッフ	秦野市青少年指導員連絡協議会・秦野市子ども会育成連絡協議会・秦野リーダー研修			
実施時期	夏休み	参加人数	30人	対象	市内在住の中学生	年齢	13～15歳	
他団体・組織との連携	秦野市青少年指導員連絡協議会・秦野市子ども会育成連絡協議会・秦野リーダー研修		活動資金	公費及び参加者負担金				
趣 旨	中学生の成長段階にあった活動を通して、自主性や創造性を養うとともに、ジュニアリーダーとしての芽を育て、子ども会活動や地域活動に積極的に参加する中学生を養成する。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	秦野市の国内姉妹都市である長野県諏訪市の中学生との交流キャンプ							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	キャンププログラムについて、高校生を中心に企画し運営							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	秦野市教育委員会		青少年と大人					
高校生のボランティアを中心にプログラムを企画、運営。また、キャンプ活動中においても、直接の指導は高校生が行い、大人については、主に安全理解に努めた。								

分類	内容		キャンプ		小学生広場			
	活動主体		行政					
参画の段階	6		その理由	大人が主催者であるが、企画の段階から子どもたちの考えを取り入れ、大人と相談しながら決定したから				
団体名	秦野市青少年課	E-Mail	seisyou@city.hadano.kanagawa.jp		URL			なし
代表者名			0463-81-7011 秦野市青少年課	スタッフ	高校生10人、大人10人			
実施時期	基本的に夏休み期間 1泊2日または2泊3日	参加人数	最大40人	対象	市内在住の小学5,6年生	年齢	10～12歳	
他団体・組織との連携	ジュニアリーダー研修クラブ、秦野市子ども会育成連絡協議会、秦野市青少年指導員連絡協議会		活動資金	公費及び参加者負担金(食糧費、傷害保険加入費など)				
趣 旨	市内の小学生が様々な集団活動を通じて自主的に活動し、多くの体験に基づいた学習をすることにより、地域のリーダーとしての知識や技術を習得する。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	丹沢の自然の中でのキャンプ							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	キャンププログラムについて、大人が仕掛け子どもの意見を聞き、決定した。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	秦野市教育委員会		青少年と大人					
できるだけ小学生に考えてもらうようにしたが、小学生のみでプログラムを考えるには難しいため、高校生のボランティアを中心にプログラムを作成した。またキャンプ活動についても直接の指導等については高校生が行い、大人については安全管理等に努めた。								

分類	内容	キャンプ		秦子連リーダー交流キャンプ			
	活動主体	子ども会					
参画の段階	6	その理由	特になし				
団体名	リーダー交流キャンプ 実行委員会	E-Mail	seisyou@city.hadano.kanagawa.jp	URL	なし		
代表者名	信田 和子		0463-81-7011 秦野市青少年課	スタッフ	子ども会育成者、リーダー研修クラブ会員、青少年指導員		
実施時期	16年8月28日～ 8月29日	参加人数	47人	対 象	子ども会リーダー	年 齢	11～12歳
他団体・組織との連携	リーダー研修クラブ	活動資金	事業予算と会費				
趣 旨	単位子ども会のリーダー交流						
実施することになったきっかけ	子どもたちの企画で実施したいことだった。						
事業(活動)内容	くずは野外センターにて、テント設営・野外炊飯 1泊2日 野外活動						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	内容(プログラム)・募集案内・運営について、子ども達で企画・運営し、大人が補助した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	秦野市子ども会育成連絡協議会	青少年と大人					
できるだけ子ども達に考えさせることで自主性と達成感を体験させることを目的に協力した。キャンプ経験の少ない子ども達であったためか発想に限界があったので、リーダー研修クラブ(高校生)に助言・援助をお願いした。それでも足りないところを大人が補助した。							

分類	内容	キャンプ		ジュニアリーダーキャンプ IN 七沢			
	活動主体	ジュニアリーダー					
参画の段階	7	その理由	子どもたちが主催者であるため、主体的に取り組んだ。				
団体名	JLC・OF・あやせ	E-Mail	なし		URL	なし	
代表者名	渡辺翔太		0467-76-5998	スタッフ	高校生3人、中学生2人		
実施時期	夏休み2泊3日	参加人数	16人(大人8、高校生5、中学生3)	対 象	ジュニアリーダー	年 齢	12～17歳
他団体・組織との連携	綾瀬市子ども会育成連絡協議会	活動資金	JLC・OF・あやせ予算より支出				
趣 旨	ジュニアリーダーとして子ども会の発展のためにゲーム指導等の技術を高める。						
実施することになったきっかけ	実施することになったきっかけ:ゲーム指導等の技術向上を図るため						
事業(活動)内容	1泊目、2泊目ともに厚木市七沢弁天の森キャンプ場に宿泊するキャンプ全般						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	キャンププログラムについて、子どもたちが中心に考え決定した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	JLC・OF・あやせ	青少年					
プログラムの進行を見守った。 会場の予約、文書の発送を行った。 けがをしないように安全に配慮した。							

< キャンプ >

分類	内容	キャンプ		第10回あおばサマーキャンプ			
	活動主体	実行委員会					
参画の段階	7	その理由	「参画のはしご」解説、大人と子どもの関係の記載文を勧察した。				
団体名	あおばサマーキャンプ実行委員会	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	事務局 青葉区役所 地域振興課	045-978-2295	スタッフ	青葉レクリエーションリーダー倶楽部17人、青少年指導員4人、行政職員2人、看護師1人			
実施時期	夏休み3泊4日	参加人数	83人	対象	青葉区内在住の児童 4年生～6年生	年齢	9～12歳
他団体・組織との連携	特になし		活動資金	特になし			
趣 旨	野外活動を中心とした共同生活を通じて、自発的に活動に取り組み、学校や学年を超えた仲間づくりの中で協調性を育む						
実施することになったきっかけ	青葉区役所青少年リーダー育成事業による						
事業(活動)内容	国立那須甲子少年自然の家宿泊(1泊目のみテント泊)野外炊事、イワナのつかみ取り、肝試し、山登り、キャンプファイヤー等						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	青葉区レクリエーションリーダー倶楽部という青少年団体が主体となり、キャンププログラムの企画・立案を行った。青少年指導員、行政は前者のバックアップとなった。(上記3組織でキャンプ実行委員会を組織)						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	青葉区	青少年	～				
	青少年のメンバーが極力自主的に取り組めるように大人のメンバーはサポート役に徹しました。またプログラムの立案・実行に専念できるように物品を手配し、施設との連絡などの庶務関係は行政が担当しました。						

分類	内容	キャンプ		鶴見区子どもサマーキャンプ			
	活動主体	ジュニアリーダー					
参画の段階	4	その理由	ジュニアリーダーが自分達で決め、分担して活動している。大人はスタッフの食事と安全への気配りをしている。				
団体名	鶴見区ジュニアリーダーズクラブ	E-Mail	haru.ku@axel.ocn.ne.jp	URL	なし		
代表者名	工藤 春治	045-510-1691 鶴見区 地域振興課	スタッフ	大人17人、中高生13人			
実施時期	夏休み 2泊3日	参加人数	70人	対象	区内小学校4～6年生	年齢	9～12歳
他団体・組織との連携	鶴見区地域振興課、鶴見区子ども育成会連絡協議会、(社)横浜市レクリエーション協会、赤城キャンプ場		活動資金	区役所からの助成金および参加者負担			
趣 旨	1. キャンプ生活を通して色々なことを体験し、自立心を養い生活力を身につける。 2. ジュニアリーダーの育成						
実施することになったきっかけ	区役所からの依頼						
事業(活動)内容	赤城キャンプ場でのキャンプ						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	キャンププログラムについてジュニアリーダーが中心に考え、大人はサポートとして活動						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	鶴見区ジュニアリーダーズクラブ	青少年と大人					
	1. ジュニアリーダー自身に考えさせることで、やる気につながるよう務めた。 2. レクを進める上で、参加した子どもたちがハードにならないように計画してもらった。 3. キャンプ場の手配、バスの手配は大人が進めた。						

< キャンプ >

分類	内容		キャンプ		アドベンチャーキャンプ in 赤城			
	活動主体		実行委員会					
参画の段階	6		その理由	実行委員会が主催者であるが、企画の段階から子どもたちが中心に考え、運営についても子どもたち自身があたることを実行委員会で決定している。				
団体名	アドベンチャーキャンプ実行委員会		E-Mail	なし		URL		なし
代表者名	鈴木 耐子		045-367-5694 横浜市瀬谷区 地域振興課	スタッフ	中学生12人、高校生3人、シニアリーダー6人、大人4人			
実施時期	夏休み 2泊3日 (8月1日～3日)		参加人数	50人	対象	瀬谷区内在住・在学の 小学5年生～中学生	年齢	10～15歳
他団体・組織との連携	瀬谷区役所との共催		活動資金	参加費、瀬谷区役所補助金、瀬谷区子供会育成連絡会補助金				
趣 旨	キャンプを通して、小中学生に自然とのふれあい、ウォークラリー、レクリエーションでの仲間づくり、自炊する野外生活の楽しさを体験するとともに、共同生活の中で自主性と社会性を培います。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	横浜市少年自然の家赤城林間学園(2泊)での、往復大型バスと自家用車を利用した共同生活、事前研修会(2日間)と事後研修会を実施し、参加者のコミュニケーションをつくりました。キャンプでは、レクリエーション、肝試し、運動会、ウォークラリー、クラフト、宝さがし、キャンプファイヤーなどのプログラムも実施しました。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	キャンププログラムについて、実行委員会構成メンバーのジュニアリーダースクラブが中心に考え、その運営についても子ども達自身が実行することとしており、実行委員会で決定しました。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他			
	瀬谷区	青少年と大人	-					
・28回目となる事業であり、ジュニアリーダースクラブも継続して関わっており意義は理解しています。 ・広報による参加者募集や会議会場の確保、会計、宿泊場所、大型バスの手配等は大人が受け持ちますが、その他は、子ども達自身が企画しています。								

分類	内容		キャンプ		青少年キャンプ			
	活動主体		ジュニアリーダー					
参画の段階	8		その理由	大磯町教育委員会が主催し、大磯町ジュニアリーダーズクラブが計画立案していく。				
団体名	大磯町ジュニアリーダーズクラブ		E-Mail	なし		URL		なし
代表者名	大磯町教育委員会		-	スタッフ	大磯町ジュニアリーダーズクラブ、大磯町教育委員会			
実施時期	8月5日～7日		参加人数	36人	対象	小学5年生、6年生	年齢	-
他団体・組織との連携	大磯町教育委員会		活動資金	参加費 1人 6,000円				
趣 旨	集団生活におけるリーダーとしての自主性と自覚を持つ							
実施することになったきっかけ	ジュニアリーダー養成のため							
事業(活動)内容	キャンプを通して、集団生活におけるリーダーとしての自主性と自覚を持つ。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	ジュニアリーダー、中学生以上高校生以下の会員たちがキャンプの計画・立案・指導をしていく。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他			
	大磯町ジュニアリーダーズクラブ、大磯町教育委員会	青少年						
ジュニアリーダーを中心として、自主的に企画・運営を行い子どもたちの野外活動について研修をし、大人はその安全管理に努めた。								

< キャンプ >

分類	内容	キャンプ		大井町子どもキャンプ			
	活動主体	青指協					
参画の段階	6	その理由	特になし				
団体名	大井町 青少年指導員協議会	E-Mail	kyouiku@town.oi.kanagawa.jp	URL	なし		
代表者名	大井町教育委員会		0465-85-5016	スタッフ	青少年指導員22人、ジュニアリーダー25人、教育委員会4人		
実施時期	9月に1泊2日	参加人数	108人(指導者を除く)	対象	小学4～6年生	年齢	10～12歳
他団体・組織との連携	神奈川県立足柄ふれあいの村		活動資金	参加費2,500円自己負担			
趣 旨	青少年指導員協議会主催による手作りのキャンプ						
実施することになったきっかけ	野外活動を通して青少年活動を行うため						
事業(活動)内容	ウォークラリー、バームクーヘン作り、火おこし体験、ナイトウォークラリー、キャンプファイヤー						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	参加児童、青少年指導員、ジュニアリーダーと共に班行動を行う。キャンプの企画はジュニアリーダー(中学生)と共に検討・立案した。キャンプ企画は3～4回行う。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	大井町青少年指導員協議会	青少年と大人					
参加児童の面倒は基本的にはジュニアリーダーが責任を持って行い、大人の指導員は必要に応じて助言等をする。							

分類	内容	キャンプ		かもしかキャンプ			
	活動主体	青少年の団体					
参画の段階	7	その理由	キャンプカウンセラーは参加者をファシリテートする役割なので				
団体名	かもしかクラブ	E-Mail	c_kamoshika@yahoo.co.jp	URL	http://www8.plala.or.jp/kamoshika/		
代表者名	小島秀行		046-288-2319	スタッフ	構成メンバーは、18歳以上の県内外に住む青少年です。約30人		
実施時期	7月:事前研修1泊2日 8月:本キャンプ7泊8日	参加人数	16人	対象	小学5年生から高校生まで	年齢	10～18歳
他団体・組織との連携	後援:神奈川県、事務局:清川青少年の家		活動資金	クラブ員会費、キャンプ参加費、賛助会員からの賛助金、寄付等			
趣 旨	日常生活とは異なった自然の中で困難な冒険活動を成し遂げるにより、自分自身や他者、そして自然に対する認識を深める。						
実施することになったきっかけ	クラブ自体は、1988年から文部省(現・文科省)により実施されたフロンティアアドベンチャー事業の、神奈川県版にスタッフとして関わったボランティアによって結成されました。その事業の終了後、有志が集まり自分たちで主催していくことになり、現在に至っても毎年1回キャンプを行っています。						
事業(活動)内容	かもしかキャンプは丹沢の山の中で自然と接しながら、また仲間と協力しながら、7泊8日という時間を過ごすキャンプです。テントで生活しながら、自然に親しむゲームをしたり、山登りをしたり、自然の中で一人っきりで過ごしてみる体験などをします。プログラム:バックパッキング、サバイバルテクニック、エコロジープログラム、イニシアチブゲーム、ソロ活動、夜間活動等 プログラムの特徴:冒険プログラムを中心に展開する。自然環境に配慮する為に少人数の班を編成し、班単位で移動型・定住型のキャンプを行う。集団活動において社会性を育成する為に、異年齢の構成員からなる班を編成する。自然・自分・他者について考える時間を作る為に、ソロ活動を取り入れる。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	クラブ・キャンプの企画・運営・活動・準備等、すべてをスタッフがボランティアで行っている。年間を通してキャンプに向けて活動をしている。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	かもしかクラブ	青少年と大人			キャンプカウンセラーは参加者の成長の促進を目標にファシリテーションをした。		
1週間以上の長期キャンプなので、スタッフの確保がとて難しい。特に参加者と直接接するキャンプカウンセラーは途中で抜けることができないために、人員の確保が特に難しい。また広報活動が思うようにいかないため応募者が少ない。是非都市部での広報活動をして参加者を広く集めたいと思っている。							

分類	内容		研修		第15回サークルありんこ自主研修会			
	活動主体		青少年の団体					
参画の段階	8		その理由	実施するかどうかの決定を含め、すべての企画運営をサークルありんこで行っている。市子連役員は報告を受け、必要な部分をサポートする体制となっている。				
団体名	ありんこ(大和市子ども会連絡協議会)		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	加藤 周平		046-260-5224 大和市 青少年センター	スタッフ	企画者 = 青年2人、補助 = 大人7人			
実施時期	平成15年7~9月	参加人数	21人	対象	サークルありんこ会員及び前年度自主研修会参加小中学生、市子連	年齢	11~52歳	
他団体・組織との連携	大和市子ども会連絡協議会		活動資金	サークルありんこ年間予算からの支出と参加費				
趣 旨	異年齢との交流や仲間づくりを通して人間関係・社会性を学ぶ、学校や家庭生活では得られない体験を通して社会参加活動、青少年活動への足掛かりとする。							
実施することになったきっかけ	サークルありんこは創設20年以上の歴史のある大和市子連傘下のジュニアリーダーサークルである。自主研修会はその活動の一環として、原則年1回開催している。							
事業(活動)内容	本研修2泊3日(愛川ふれあいの村)、事前・事後研修1日(大和市青少年センター)内容:野外炊事、キャンドルファイヤー、軽スポーツ、レクリエーション、グループワークトレーニング、話し合いなど							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	すべての企画、運営を青少年が行った。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他			
	ありんこ	青少年						
大人(市子連役員、青少年センター職員)は青少年が決めたそれぞれの役割を分担した。基本的には事業視察とスタッフの補助となっている。								

分類	内容		研修		川崎市青少年育成連盟 中高生リーダー研修		
	活動主体		育成会				
参画の段階	6		その理由	研修の企画から当日の運営まで、基本的には中高生リーダー研修委員会の中高生委員が協議をし、必要に応じて大人(指導者)が助言等しながら進めている事業であるから。			
団体名	川崎市青少年育成連盟		E-Mail	なし	URL <a href="http://web-k.jp/ikuren/">http:// web-k.jp/ikuren/</a>		
代表者名	中島 忠三		044(733)3951	スタッフ	川崎市青少年育成連盟加盟団体の中・高校生 11人 指導者 5人		
実施時期	1~3月	参加人数	11人 (平成15年度)	対象	川崎市青少年育成連盟加盟団体の中高生	年齢	13~18歳
他団体・組織との連携	川崎市		活動資金	170,000円(川崎市青少年育成連盟事業費)			
趣 旨	青少年育成連盟加盟団体の中高生が、リーダーとしての資質を向上させるため、研修の企画・立案を行い、実施する。						
実施することになったきっかけ	実施することになったきっかけ: 育成連盟加盟団体の中高生のリーダーとしての資質を向上させようという意見から。						
事業(活動)内容	川崎市青少年育成連盟中高生リーダー研修委員会にて研修の企画・立案、運営を協議し、研修を実施した。 平成15年度 長野県八ヶ岳少年自然の家にて、立ちかまどづくり、ロープワーク、おやつづくり、ゲーム大会等を実施						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	川崎市青少年育成連盟の中高生が主体となって、リーダーの資質を高めるための研修を自ら企画し、大人(指導者)は必要に応じて助言等をした。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	川崎市青少年育成連盟	青少年と大人					
研修委員ができるだけ主体となって、研修の企画・運営が行えるように配慮した。しかし、中高生の研修委員だけにすべてを任せきりにするのではなく、重要な場面では、指導者がアドバイス・修正を行うことで、研修が安全で実りのあるものになるよう努めた。							

< 研修 >

分類	内容		研修		JL研修「夏キャンプの楽しみ方」		
	活動主体		シニアリーダー				
参画の段階	7		その理由	シニアリーダーが主体的に取りかかり活動したから			
団体名	シニアリーダーズ クラブむげん	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	橋本 加奈子		-	スタッフ	川崎市在住 18歳(高卒年齢)～25歳の会員20人		
実施時期	夏休み2泊3日	参加人数	56人	対象	川崎市子ども会連盟所属 ジュニアリーダー	年齢	12～18歳
他団体・組織との連携	なし		活動資金	川崎市研修委託費15万円、参加者自己負担は交通費・参加費1500円			
趣 旨	夏のキャンプに必要な知識・技術を身につける						
実施することになったきっかけ	年間のジュニアリーダー研修会の一環						
事業(活動)内容	応急処置の講義、キャンプファイヤー、野外炊事、レクリエーションの講義						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	シニアリーダーが計画から当日の運営、講義進行を行った						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	シニアリーダーズクラブむげん	青少年					
基本的にはシニアリーダーが計画し、JLの案内を作成し、準備や当日の運営まで行った。大人は必要書類の確認や研修内容に関して、助言等をした。							

分類	内容		研修		平成15年度ジュニアリーダー・インリーダー研修会		
	活動主体		青指協				
参画の段階	5		その理由	青少年がすべてのプログラムを主体的に運営するには、意識的にも技術的にも未熟のため、必要に応じてサポートした。			
団体名	愛川町青少年指導員 連絡協議会	E-Mail	shogaigakusyuu@town.aikawa.kanagawa.jp	URL	http:// www.town.aikawa.kanagawa.jp/		
代表者名	愛川町教育委員会 生涯学習課		(046) 285-2111 内線528	スタッフ	大人7人		
実施時期	平成15年6月21日	参加人数	59人(中学生14人、小学生37人、大人8人)	対象	-	年齢	9～15歳
他団体・組織との連携	愛川ふれあいの村		活動資金	町からの委託金			
趣 旨	子ども会活動をサポートするために必要な資質とゲームやレクリエーションの指導技術の向上を図る。						
実施することになったきっかけ	子ども会活動を子ども主体で運営し、活性化させるため						
事業(活動)内容	講話「ジュニアリーダー・インリーダーって何するの」、レクリエーション実習、野外炊事						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	プログラム決定のための事前話し合い、当日の進行、レクリエーション実習での主体的な運営						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	愛川町青少年指導員連絡協議会	青少年と大人			青少年に主体的な活動の場を提供した。		
青少年がすべてのプログラムを主体的に運営するには、意識的にも技術的にも未熟のため、必要に応じてサポートした。							

< 研修 >

分類	内容		研修		平成15年度イン・シ・ジュニアリーター - 合同研修会		
	活動主体		子ども会				
参画の段階	6		その理由		大人が主催者であるが、企画運営はジュニアリーターが中心になって行う。7のレベルが理想であるが、実際はキャンプ中も大人の助けが必要。		
団体名	伊勢原市子ども会育成会連絡協議会	E-Mail	seisyounen@is ehara-city.jp	対象	市内在住中学生(公募7人)、市内子ども会5~6年生37人		
代表者名	市子連会長 石井秀子		0463-94-7171(事務局)	スタッフ	大人(市子連役員)13人、ジュニアリーター(中学生)7人		
実施時期	平成15年7月1日~平成16年3月31日	参加人数	57人(中学生7人、小学生37人、大人13人)		年齢	10歳~15歳	
他団体・組織との連携	伊勢原ジュニアリーダースクラブ、成瀬ジュニアリーダースクラブ		活動資金	市よりジュニアリーター養成事業委託費108,000円、市子連事業費			
趣 旨	実践的な交流活動や体験学習を通して、ジュニアリーターとしてのあるべき姿を学ばせる。						
実施することになったきっかけ	子ども会活動において、大人と子どもの橋渡し役としてジュニアリーターの養成が必要。						
事業(活動)内容	ジュニアリーターは1泊2日のキャンプリーターを務めるため、事前研修4回受講。伊勢原市日向ふれあい学習センターでの1泊2日のキャンプを運営する。キャンプの反省会として、事後研修を1回実施。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	キャンプのプログラム検討や企画をジュニアリーターが考え、大人の助言の中で決めた。キャンプ当日のプログラム運営をジュニアリーターが中心となって行い、大人がその補助をした。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	伊勢原市子ども会育成会連絡協議会		大人				
キャンプ経験のある中学生でも自分で企画するとなると、実施の難しい意見が数多く出た。ジュニアリーターの自主性を重視しながら、安全確保するための助言方法に苦労した。							

分類	内容		研修		平成16年度イン・シ・ジュニアリーター - 合同研修会		
	活動主体		子ども会				
参画の段階	6		その理由		大人が主催者であるが、企画運営はジュニアリーターが中心になって行う。7のレベルが理想であるが、実際はキャンプ中も大人の助けが必要。		
団体名	伊勢原市子ども会育成会連絡協議会	E-Mail	seisyounen@is ehara-city.jp	対象	市内在住中学生(公募20人)、市内子ども会6年生37人		
代表者名	市子連会長 荒川幸隆		0463-94-7171(事務局)	スタッフ	大人(市子連役員)12人、ジュニアリーター(中学生)20人		
実施時期	平成16年6月1日~平成17年3月31日	参加人数	69人(大人12人、中学生20人、小学生37人)		年齢	11歳~15歳	
他団体・組織との連携	伊勢原ジュニアリーダースクラブ、成瀬ジュニアリーダースクラブ		活動資金	市よりジュニアリーター養成事業委託費10万円、市子連事業費			
趣 旨	実践的な交流活動や体験学習を通して、ジュニアリーターとしてのあるべき姿を学ばせる。						
実施することになったきっかけ	子ども会活動において、大人と子どもの橋渡し役としてジュニアリーターの養成が必要。						
事業(活動)内容	ジュニアリーターは1泊2日のキャンプリーターを務めるため、事前研修5回受講。8月に伊勢原市日向ふれあい学習センターでの1泊2日のキャンプを運営する予定。キャンプの反省会として、事後研修を1回実施予定。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	キャンプのプログラム検討や企画をジュニアリーターが考え、大人の助言の中で決めた。キャンプ当日のプログラム運営をジュニアリーターが中心となって実施した。9月に事後研修を開催し、反省点を洗い出す予定。今後は子ども会事業において、ジュニアリーターとして協力してもらう予定。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	伊勢原市子ども会育成会連絡協議会		大人				
ジュニアリーターの自主性とやる気を維持させながら、やりたいこととできることの区別を助言するのに苦労した。8月のキャンプではプログラム運営はジュニアリーターが中心となって実施した。キャンプ中はプログラムごとの個別指導はジュニアリーターに任せることができたが、プログラム全体の進行については、大人のフォローが必要だった。							



< 研修 >

分類	内容		研修		中学生リーダー研修事業			
	活動主体		青少年					
参画の段階	6		その理由	一番最初に一つひとつの事業の目的を説明したので、子ども一人ひとりが目的を理解して職員と話し合えた。				
団体名	中学生リーダー		E-Mail	youth@cityfujisawa.ne.jp	URL http:// www.cityfujisawa.ne.jp/~youth			
代表者名	(財)藤沢市青少年協会		0466-25-5215	スタッフ	-			
実施時期	年間5回事業実施	参加人数	20人	対象	藤沢市内在学・在住の中学生	年齢	13～15歳	
他団体・組織との連携		特になし		活動資金	委託費 189,000円			
趣旨	青少年が学校・学年といった枠をこえた仲間と共に、一緒に力を合わせ事業の活動内容の企画・立案を行うことで主体性や自主性を育み、豊かな人間性を形成し、リーダー的素養を形成することを目的とする。							
実施することになったきっかけ		豊かな人間性やリーダー的存在の中学生を増やす。						
事業(活動)内容	市内の中学校に募集をかけ、おおまかな年間計画は職員間で決めておき、一つひとつの事業の内容については中学生の参加者と職員で決定していく							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	一番最初に職員からおおまかに決めた事業の一つひとつの目的などを説明した上で事業の内容などを職員と一緒に話し合った。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	(財)藤沢市青少年協会		青少年と大人					
キャンプや野外活動を行なう際に、「危険」だと認識していながら危ないことをする傾向があった。そのため、職員は安全管理に非常に気をつけた。また、集団になじめない子に対しては職員が積極的に関わりを持った。								

分類	内容		研修		高校生リーダー研修事業			
	活動主体		青少年					
参画の段階	7		その理由	今回の参加者は3年生がとても下の学年の者をまとめてくれた。職員としては、助言と施設などの手続きくらいしかやっていないから。				
団体名	高校生リーダー		E-Mail	youth@cityfujisawa.ne.jp	URL http:// www.cityfujisawa.ne.jp/~youth			
代表者名	(財)藤沢市青少年協会		0466-25-5215	スタッフ	-			
実施時期	年間6回事業実施	参加人数	18人	対象	藤沢市内在学・在住の高校生	年齢	15～18歳	
他団体・組織との連携		特になし		活動資金	委託費189,000円			
趣旨	参加者が興味・関心のある活動に主体的に関わり、活動プログラムの企画・立案・運営まで自主性に行うことで達成感を得る喜びと共に、一人ひとりに責任感を持たせ同年代との相互に交流することを目的とする。							
実施することになったきっかけ		大人への第一歩として責任感の持てる高校生やリーダー的存在の高校生を増やす。						
事業(活動)内容	市内在住・在学の高校に募集をかけ、年間計画から運営まで企画、立案をし、一つひとつの事業に対して目的を持たせて高校生自身が一人ひとり意見を言ったことに対して責任感を持ち、事業の組み立て等を行っている。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	基本的には、高校生が目的を持ったうえで進めて行っている為、職員は重要な所だけを言うなどの他、施設の手続きなどしか行わない。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	(財)藤沢市青少年協会		青少年					
年間計画から企画・運営・立案まで高校生が主となって行っており、職員が関わることは非常に少なかった。ただ、話し合いを進める中で、しばしば話がそれてしまうことがあり、職員が修正する場面もあった。								

分類	内容		研修		子ども会リーダー野外研修会		
	活動主体		市子連				
参画の段階	4		その理由	大人が計画して子どもは役割を果たしているが、最終的に大人の指示が多い。			
団体名	座間市子ども会育成会連絡協議会	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	市子連会長 丸尾		046-253-8415 座間市青少年課	スタッフ	大人18人、中・高生22人		
実施時期	夏休み 2泊3日	参加人数	120人	対象	市子連加入者(小学4~6年生)	年齢	10~12歳
他団体・組織との連携	宮ヶ瀬共栄貯蓄会(森林組合)		活動資金	市の委託金30万円と参加費(1人1,500円)で、食費・交通費・宿泊費を賄う。			
趣 旨	自然の尊厳・社会の決まりや生きることの大切さを認識し、自らの力で考え判断し、野外活動を通して行動できる子ども会のリーダーとして自覚を高め、生きがいに満ちた人間形成が行われること。						
実施することになったきっかけ	研修の一環						
事業(活動)内容	座間市立清川自然の村 1日目 川遊び・きもだめし(ジュニアリーダー指導)						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	ジュニアリーダーが当該研修のための事前研修を行い、当日のレクリエーション等のメニューの進行を決定した。当日も、ジュニアリーダーが中心となり班をつくり、参加者をそれぞれ活動班(班長・副班長・まき・かまと係・食器係)、就寝班(室長・シーツ係・清掃係)で分担を決め活動した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	座間市子ども会育成会連絡協議会		青少年と大人				
以前は、登山コース等で登山経験を取り入れたが、無理と危険が生じたためメニューが制限されてきた。研修については、ジュニアリーダーを中心とした異年齢交流を図り、また、リーダーシップを養いながら自然の中での団体生活を学ばせた。							

分類	内容		研修		ジュニアリーダー初中級養成研修会		
	活動主体		ジュニアリーダーズクラブ				
参画の段階	6		その理由	賃金、場所については大人が決めているが、プログラム立案から進行まではジュニアリーダーのみで実行している			
団体名	厚木市ジュニアリーダーズクラブ連絡協議会	E-Mail	8700@city.atsugi.kanagawa.jp	URL	なし		
代表者名	厚木市青少年課		046-225-2580	スタッフ	高校1,2年生のジュニアリーダー		
実施時期	平成16年7月24日~25日	参加人数	100人	対象	中学1年生~高校2年生	年齢	12~17歳
他団体・組織との連携	厚木市青少年指導員連絡協議会への委託		活動資金	市からの委託金(483,000円)			
趣 旨	中学生ジュニアリーダーの育成						
実施することになったきっかけ	ジュニアリーダーの育成						
事業(活動)内容	ジュニアリーダーとしての知識と技術、また子ども会や地域青少年団体の活動において指導・助言を行うために必要なキャンプの知識と技術を習得させるとともに、援助のできる初級(主に中学校1年生)及び中級(主に中学校2,3年生)のジュニアリーダーを養成する。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	キャンプファイヤーと野外料理のみ必ずプログラムに取り入れることとし、その他のプログラムについてはジュニアリーダー(高校1~2年生)が自分らで会議を重ね、当日もジュニアリーダー主体で進行した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	厚木市ジュニアリーダーズクラブ連絡協議会		青少年と大人				
申し込み期限が守れず、参加人数の最終確認が大幅に遅れた。							

< 研修 >

分類	内容	研修		第32回関東甲信越静地区子ども会ジュニアリーダー大会			
	活動主体	ジュニア・シニアリーダー					
参画の段階	6	その理由	各々の活動はレベルアップしていたが、全体的な流れの把握が出来ていなかった。				
団体名	神奈川県子ども会連絡協議会	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	山上 武久		045-365-3424	スタッフ	神奈川県内のジュニア・シニアリーダー、県子連役員		
実施時期	平成16年 7月29～31日	参加人数	217人	対象	中高生、青年指導者	年齢	13歳～
他団体・組織との連携	全国子ども会連合会を主とし、関東ブロック9県の県子連		活動資金	参加者の会費と全子連、関ブロ各県からの助成金、神奈川県子ども会安全会より助成金			
趣 旨	一人ひとりがレベルアップに努め、リーダーとして向上心を持ち地域での活動を充実させる。						
実施することになったきっかけ	関東甲信越静ブロック10県(東京除く)で当番制						
事業(活動)内容	2泊3日のプログラムのうち、全体で行うプログラムと個々にコース別に分かれて行うコース別研修(レクゲーム、レクダンス、討論、野外炊事など)プログラムを中心に、レベルアップを目指した。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	昨年10月に実行委員会を立ち上げ、半年間はスタッフの研修を行い、3月よりプログラムの内容等を討議。全体会、係別などを通して、全体の意識の向上に努めた。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	神奈川県子ども会連絡協議会	青少年と大人	-				
県内各地からスタッフを募集したので、意識の統一、時間・場所の調整、それにとまなう経済面などに苦労した。							

分類	内容	研修		インリーダー研修会			
	活動主体	子ども会					
参画の段階	7	その理由	リーダー養成のための研修であるので、質問には答えるが子どもの自主性に任せた。				
団体名	小田原市子ども会連絡協議会	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	橋本 輝夫		0465-33-1723 小田原市 青少年課	スタッフ	小田原市子連役員、ジュニアリーダーズクラブ員、行政職員		
実施時期	平成16年1月24日	参加人数	156人	対象	小学5年(単位子ども会)	年齢	10～11歳
他団体・組織との連携	小田原市総合体育館アリーナジュニアリーダーズクラブ		活動資金	市子連の予算内で行う			
趣 旨	単位子ども会の5年生全員が参加し、リーダーに必要な知識・技術を習得する。						
実施することになったきっかけ	5年生の間に上級生としての心得・技術などを習得しておく、6年生になってから即戦力になるので。						
事業(活動)内容	危険予知訓練、工作体験、どんな6年生になったらよいか、ゲームなどを通してリーダーに必要な知識・技術を習得した(毎年行っている)						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	市子連役員が子どもの立場になって考え決定。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	事業・活動主体(主催)	企画・立案	大人の関わり		その他		
	小田原市子ども会連絡協議会	大人					
限られた時間内で盛りだくさんのプログラム内容で行うので大人は我慢が大切。つい口を出してしまいそうになるのを我慢して子どもとジュニアリーダー員に任せた。							

分類	内容		研修		地域少年リーダー養成講座			
	活動主体		青少年指導員協議会					
参画の段階	6		その理由		青少年指導員と青少年と一緒に活動している。			
団体名	小田原市教育委員会	E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL	http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen			
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1723	スタッフ	青少年指導員、ジュニア・リーダーズ・クラブ			
実施時期	7月	参加人数	55人	対象	小学6年生、中学1年生	年齢	12～13歳	
他団体・組織との連携	小田原市青少年指導員協議会へ委託		活動資金		市、参加費			
趣 旨	自然の中での共同生活を通じて自主性、自立心、積極性などリーダーとして必要な意識を育てる。							
実施することになったきっかけ	地域における青少年リーダーの養成を図る。							
事業(活動)内容	小学6年生、中学1年生を対象に、青少年の家にて野外炊事、グループワーク、奉仕活動、キャンプファイヤー等の研修を行う。また、事前研修、事後研修を各1回行う。							
青少年がどのように参加して事業・活動を進めたか	青少年指導員とジュニア・リーダーズ・クラブが企画、立案、運営している。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	小田原市青少年指導員協議会		青少年と大人					
大人は、技術を伝授し、青少年の活動を見守る。								



< 交流 >

分類	内容		交流		第3回スカウトキャンポリー		
	活動主体		ボーイスカウト				
参画の段階	6		その理由	大人が主催者であるが、行事の内容は子どもたちの考えに基づき、大人も相談に乗りながら子ども達に決定させたから。			
団体名	日本ボーイスカウト神奈川連盟横浜南央地区	E-Mail	masato-n@mx7.ttcn.ne.jp	URL <a href="http://www.mandala.co.jp/boyscout/bs_nanoh/">http:// www.mandala.co.jp/boyscout/bs_nanoh/</a>			
代表者名	酒井 繁		045-714-3450	スタッフ	指導者200人、高校生・大学生等79人		
実施時期	平成16年8月12日～16日 4泊5日	参加人数	586人	対象	小学1年生～社会人	年齢	2～78歳
他団体・組織との連携	ガールスカウト日本連盟横浜友好団、国立那須甲子少年自然の家		活動資金	個人参加費 地区費 ガールスカウト補助金 寄付金 合計13,283,000円			
趣 旨	ボーイスカウト横浜南央地区のスカウト・指導者とガールスカウトの友好団が那須甲子少年自然の家に会し、野営・舎営を行う。						
実施することになったきっかけ	横浜南央地区では、創立10周年である平成5年と13周年である平成8年にキャンポリーを実施しており、今年が創立20周年にあたるため。						
事業(活動)内容	1. 小学1年～5年生のスカウト・指導者及び一般の父母は8月13日～16日の3泊4日とし、本館に附帯する宿泊棟を利用。 2. 小学6年～中学生のスカウトおよび指導者は8月12日～16日の4泊5日で、テントによるキャンプ場での野営。 3. 高校生以上のスカウトおよび指導者は8月12日～16日の4泊5日とし、宿泊棟						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	ボーイスカウトのベンチャースカウト(高校生)、ローバースカウト(大学生と社会人)およびガールスカウトのレンジャー(高校生)、ヤングリーダー(大学生と社会人)が中心になり、約1年前から数回の委員会・部会を作り計画し、大人も色々アドバイスを決定した。現地では高校生以上のスカウトにプログラムをすべて任せただけで、自炊する時間がなく、宿泊棟にて給食となった。全体行事のプログラム進行で夜を徹してのミーティングになることもしばしばあった。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	日本ボーイスカウト神奈川連盟横浜南央地区	青少年と大人	～				
主として高校生に大会の華である、全体行事(開会式、村祭り、閉会式など)および選択プログラムを担当して貰ったが、当初はやる気があるのか無いのか、あまり力が入らない様子だったが、大会直前3ヶ月位から、大いに意気あがり、遅くまでミーティングを繰り返し、現地に現地に入ってから調整業務に一生懸命だった。現地ではのほせ気味のところもあったので、それを抑えるのに苦労した。							

分類	内容		交流		日韓ガールスカウト交流事業		
	活動主体		ガールスカウト				
参画の段階	8		その理由	支部が主催し、県内から募集した。スカウト実行委員とサポートリーダーにより、最初から取り組み、子どもたちの考えを尊重して、サポートしながら決定していった。			
団体名	(社)ガールスカウト日本連盟神奈川支部	E-Mail	gs-kana@muse-ocn.ne.jp	URL <a href="http://www2.ocn.ne.jp/~gs-kana/">http:// www2.ocn.ne.jp/~gs-kana/</a>			
代表者名	小山 文子		045-365-3423	スタッフ	高校生(県内のレンジャースカウト)とサポートリーダー(8人)		
実施時期	平成16年7月28日～8月4日	参加人数	約600人(韓国28、日本実行委17)	対象	日本・韓国のガールスカウト	年齢	高校生
他団体・組織との連携	(社)ガールスカウト日本連盟の支援と連携		活動資金	外務省(日韓文化交流基金)より			
趣 旨	若い世代の相互理解を深め、両国の友好関係を強化すること						
実施することになったきっかけ	ガールスカウト神奈川支部結成50周年記念事業の一環として						
事業(活動)内容	1998年日韓首脳会議の合意に基づき、日韓関係を創り上げるために青少年の交流が大切であるとのことから実施され、今年6年目となるこの事業の地区プログラムをガールスカウト神奈川支部結成50周年を記念して受託した。7/28～8/4までの神奈川県滞在中のプログラムの企画・運営に高校生9人とヤングリーダーがサポートをして行った。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	交流を中心としたプログラムを担当。より多くのガールスカウトまたホームステイを通して地域の人たちとの交流ができるようにし、選択プログラムで日本の文化や地域の産業などについて体験(一緒に)できるように計画し、その為の資料づくりや実際の活動を行った。またその為にはサポートリーダーの支援があって計画通りに実施できた。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	ガールスカウト神奈川支部	青少年と大人					
外務省 日本連盟 神奈川支部での事業のため、予算や経費などの取り決めがあり、マネージメントについては大人がサポートした。特に施設や行政への依頼や申請書類などは組織として提出しなければならないので、実行委員の思いが実現しないこともあった。またガールスカウトのプログラムとしてスカウト主体ではあるが、このような大きな事業に対しては経験不足や準備期間が短く大変だった。							

分類	内容		交流		青少年国際化推進事業		
	活動主体		実行委員会				
参画の段階	7		その理由	子どもといってもみんな大学生以上で社会人も多くいるため、主体的に取り組んでいた。ただ、逆に社会人等は忙しく時間の調整が難しかった。			
団体名	青少年国際化推進事業実行委員会	E-Mail	youth@cityfujisawa.ne.jp	URL <a href="http://www.cityfujisawa.ne.jp/~youth">http:// www.cityfujisawa.ne.jp/~youth</a>			
代表者名	(財)藤沢市青少年協会		0466-25-5215	スタッフ	-		
実施時期	通年	参加人数	-	対象	青少年	年齢	-
他団体・組織との連携		特になし		活動資金	委託費 770,000円		
趣 旨	青少年が多くの外国人と交流し、相互に理解を深め、共に生きる体験を通して互いの人権を尊重する心を養うとともに青少年が国際的視野を持つことの出来るような事業を行う。						
実施することになったきっかけ		藤沢に在住している外国人と日本人青少年の交流の橋渡しをする。					
事業(活動)内容	・外国人のための日本語講座の実施 ・世界のあいさつ入門講座の実施 ・情報紙の発行						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	日本語講座:基本的に授業の進め方、教え方は全て青少年のスタッフが相談し、決定している。国際交流のつどい:イベントの企画・運営は青少年のスタッフが相談し、決定している。情報紙:紙面の内容からレイアウト、翻訳まで青少年のスタッフが行っている。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	青少年国際化推進事業実行委員会		青少年と大人				
ボランティア活動として非常に気楽に、楽しく参加していたが、反面、責任感に欠ける場面があった。事業が具体化しても打ち合わせに欠席したり、遅刻したりするスタッフが多くみられた。そのようなときに大人から苦言を呈するよりは、逆に「無理をしないで」という声かけをすることにより、自立性を促した。							

分類	内容		交流		平成16年度奈川村青少年ふれあい交流		
	活動主体		実行委				
参画の段階	6, 7		その理由	実際の動きとしては子どもたちが主体的になり実施できたが、何のためにやるのか、次に何をやるべきかについての認識が不足していると感じた。			
団体名	湯河原町親善都市子ども交流推進事業実行委員会	E-Mail	syakaiky@town.yugawara.kanagawa.jp	URL <a href="http://www.town.yugawara.kanagawa.jp">http:// www.town.yugawara.kanagawa.jp</a>			
代表者名	実行委員会委員長 湯河原町教育長 木村昌夫		0465(63)2111 湯河原町 教育委員会	スタッフ	大人4人(ジュニアリーダーズ・クラブ指導者1人及び教育委員会職員3人)		
実施時期	8月9日~11日	参加人数	20人(中学生16人・引率者4人)	対象	湯河原町ジュニアリーダーズ・クラブ会員	年齢	13歳~15歳
他団体・組織との連携		町子ども会との連携・協力		活動資金	町委託料633,000円により宿泊費及び各種研修諸費用を賄う。なお、参加者負担金として1人5千円を徴収した。		
趣 旨	友好親善提携を結ぶ長野県奈川村の青少年との交流を図り、青少年の健全育成とふれあいを推進する。また、環境学習や郷土芸能を学ぶことによりリーダー養成事業としても併せて実施する。						
実施することになったきっかけ		以前から奈川村の青少年が海洋学習として隔年で湯河原町を訪れていた経過があり、湯河原町からも奈川村を訪問し青少年の相互の交流を図ろうとしたもの。					
事業(活動)内容	奈川村での青少年相互の交流と、地域の魅力を生かした体験活動を軸に実施した。交流会では互いの学校生活や進路の話で交流した茶話会、湯河原町と奈川村の地域紹介やレクリエーションを行った。普段取り入れられない活動として、奈川村のブナの森林の手入れ作業(下草刈り)や乗鞍高原での環境学習を実施し体験活動を推進した。また、製糸女工にまつわる民俗芸能を学習し、郷土の歴史への理解を深めた。特産である奈川村のそば粉を用いてそば打ち体験も実施し、食文化とのふれあいも図った。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	奈川村の青少年との交流会では、両町村の中学生が直接(または電話で)話し合い、内容を企画した。今年度は湯河原町からの訪問であったため奈川村中学生がよる主導となり、交流会の流れや準備品などの企画を行った。湯河原町中学生は内容についての提案をし、特に地域紹介では内容を吟味し職員の指導のもとパワーポイントでの湯河原町の紹介を企画した。林業体験や環境学習、そば打ち体験については、参加者の希望により実施し内容を考慮した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	湯河原町親善都市子ども交流推進事業実行委員会		青少年と大人				
2泊3日の日程に対してどのようなアウトラインを描くか、体験学習で何を学ぶかについて参加者の発案をできるだけ生かすよう配慮した。交流に関する事務的な手続きや調整は育成者が行い、研修会の進行に始まり役割分担や奈川村中学生との連絡調整など、中学生自身でできることは極力参加者が行う環境を整えた。							

< 交流 >

分類	内容		交流		横須賀市ジュニアリーダー他都市交歓会		
	活動主体		行政				
参画の段階	7		その理由		市主催であるが、ジュニアリーダーのための行事ということを認識してもらうためこのようなスタイルをとっている。		
団体名	横須賀市		E-Mail	なし	対 象	横須賀市ジュニアリーダー養成講習会OB会会員および平塚市ジュニアリーダーズクラブ会員	
代表者名	横須賀市青少年課		046-822-8224	スタッフ	大人2人、高校生3人、中学生1人		
実施時期	平成16年2月14日 (土)～15日(日)	参加人数	20人(横須賀市5人、平塚市15人)		年 齢	14～22歳	
他団体・組織との連携	平塚市・横須賀市ジュニアリーダー養成講習会OB会、平塚市ジュニアリーダーズクラブ		活動資金	食費は横須賀市負担、現地までは横須賀市バスにて移動、宿泊費は平塚市所管の施設のため全額減免			
趣 旨	他都市のジュニアリーダーとの交流を通じて見聞を広め、自己の活動に活かすとともに、ジュニアリーダー相互の連帯と活動の発展を図る						
実施することになったきっかけ	特になし						
事業(活動)内容	平塚市びわ青少年の家にて、両市のジュニアリーダーが情報交換・レクゲーム・共同作業などを行い、1泊2日交流した。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	両市のジュニアリーダーがそれぞれスタッフを2～3人ずつ出し、会議を数回行った。会議はジュニアリーダーのみで実施し、内容・スケジュールを話し合い、資料作成・会場下見を行った。また、当日の進行・運営も全てジュニアリーダーが行った。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	横須賀市		青少年と大人				
内容・スケジュール・食事内容について決定の締切を提示し、後はジュニアリーダーに任せました。会議の都度、ジュニアリーダーから決定事項を聞き、スケジュールに無理はないかなど助言を行いました。苦労した点はスタッフがなかなか集まらなかった点と、両市のスケジュール調整が難しく、中・高校生のテスト前にしか実施日が設定できなかった点です。							

分類	内容		交流		横須賀市ジュニアリーダー他都市交歓会		
	活動主体		行政				
参画の段階	7		その理由		市主催であるが、ジュニアリーダーのための行事ということを認識してもらうためこのようなスタイルをとっている。		
団体名	横須賀市		E-Mail	なし	対 象	横須賀市ジュニアリーダー養成講習会OB会会員および平塚市・葉山町ジュニアリーダーズクラブ会員	
代表者名	横須賀市青少年課		046-822-8224	スタッフ	大人3人、高校生以上2人、高校生9人		
実施時期	平成16年6月26日 (土)～27日(日)	参加人数	25人(横須賀市12人、平塚市8人、葉山町5人)		年 齢	14～22歳	
他団体・組織との連携	平塚市・葉山町・横須賀市ジュニアリーダー養成講習会OB会、平塚市・葉山町ジュニアリーダーズクラブ		活動資金	食費は横須賀市負担、宿泊費は横須賀市所管の施設のため全額減免			
趣 旨	他都市のジュニアリーダーとの交流を通じて見聞を広め、自己の活動に活かすとともに、ジュニアリーダー相互の連帯と活動の発展を図る。						
実施することになったきっかけ	特になし						
事業(活動)内容	横須賀市田浦青少年自然の家にて、3市町のジュニアリーダーが情報交換・レクゲーム・キャンプファイヤー講習などを行い、1泊2日交流した。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	3市町のジュニアリーダーがそれぞれスタッフ3～4名ずつ出し、会議を数回行った。会議はジュニアリーダーのみで実施し、内容・スケジュールを話し合った。また、当日の進行・運営も全てジュニアリーダーが行った。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他
	横須賀市		青少年と大人				
内容・スケジュール・食事内容について決定の締切を提示し、後はジュニアリーダーに任せました。会議の都度、ジュニアリーダーから決定事項を聞き、スケジュールに無理はないかなど助言を行いました。苦労した点は3市町のスケジュール調整が難しかったことです。							

分類	内容	交流		ジュニアリーダー他都市交歓会			
	活動主体	ジュニアリーダー					
参画の段階	7	その理由	誘いを受けた葉山町からはそのように見えたから				
団体名	葉山町ジュニアリーダーズクラブ	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	葉山町生涯学習課		046-876-1111 (代)	スタッフ	市町職員、ジュニアリーダー10人程度		
実施時期	平成16年6月26日 (土)~27日(日)	参加人数	30人(欠席あり)	対象	横浜市・平塚市・葉山町のジュニアリーダー	年齢	15~20歳
他団体・組織との連携	横須賀市、平塚市青少年課、横須賀市田浦青少年自然の家		活動資金	宿泊費不要、交通費自己負担、食費はクラブで負担			
趣 旨	他市のジュニアリーダーと接することで、交流を深め、自己のスキルアップ等を図る。						
実施することになったきっかけ	横須賀市からの誘い、ジュニアリーダーの交流したいという声						
事業(活動)内容	田浦青少年自然の家で1泊2日のキャンプを実施。3食の野外炊事、キャンプファイヤー、レクゲーム、レクリーダーとしての研修を実施。						
青少年がどのように参加して事業・活動を進めたか	上記の内容については、すべてジュニアリーダーが考えて決定した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	横須賀市	青少年					
葉山町の青少年担当職員としては、引率として参加しただけですべてをジュニアリーダーが実施したと思う。							

分類	内容	交流		平塚市海洋少年団交流事業			
	活動主体	実行委員					
参画の段階	5	その理由	主催者は大人であるが、研修中は青少年スタッフと相談しながら研修を進めていく機会があるから。				
団体名	平塚市海洋少年団交流事業実行委員会	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	実行委員長 清水泰宏		0463-32-7029 平塚市市民部 青少年課	スタッフ	19人(大人10人、高校生9人)		
実施時期	平成16年7月28日 (水)~30日(金) 2泊3日	参加人数	91人(中学生)	対象	市内在住の中学生	年齢	12~15歳
他団体・組織との連携	東海大学		活動資金	平塚市からの委託料(別途、参加者から負担金を徴収する)			
趣 旨	本市の中学生が船上で集団活動することにより、自主性、協調性、他人を思いやる心を育てる。また日頃経験できない洋上生活を行うことで心身を鍛える。 海洋観察や星空観察、孤島の自然にふれあうことにより、自然のすばらしさを体験する。また、万が一、海難事故が発生した場合に備えての緊急訓練を実施し、海上における危機管理の重要性を認識する。 本事業終了後、地域における社会活動へ自主的に参加し、指導的役割の担い手としての資質の向上を図る。						
実施することになったきっかけ	上記の趣旨による青少年育成事業として効果的な事業のため						
事業(活動)内容	東海大学所有の「望星丸」を使った、2泊3日の海洋研修。途中、伊豆諸島で上陸活動を行う。						
青少年がどのように参加して事業・活動を進めたか	事業内容やスケジュールについては、実行委員会で決定するが、スケジュールの実行に当たっては、青少年を中心とした運営委員(スタッフ)の意見を取り入れながら、運営委員が運営する。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	平塚市海洋少年団交流事業実行委員会	大人					
今回、台風の影響でスケジュールの大幅な変更を行って実施した。							



< 交流 >

分類	内容		交流		今市市・小田原市子ども会交歓会			
	活動主体		子ども会					
参画の段階	4		その理由	事前研修において、何のために、今市に行くのかは知っている。プログラムの中では自由に行っているが役割は果たしている。				
団体名	小田原市子ども会連絡協議会	E-Mail	なし	URL なし				
代表者名	橋本 輝夫		0465-33-1723 小田原市 青少年課	スタッフ	小田原市子ども会連絡協議会、役員、小田原市ジュニアリーダーズクラブ員、行政職員			
実施時期	平成16年7月21日～22日	参加人数	50人	対象	市内子ども会員 (25学区から男女1人ずつ)	年齢	11～12歳	
他団体・組織との連携	今市市・今市市子ども会連絡協議会等		活動資金		小田原市の委託事業のため予算があり予算内で行う、参加者の負担無し			
趣 旨	小田原市子ども会連絡協議会、役員、小田原市ジュニアリーダーズクラブ員、行政職員							
実施することになったきっかけ	小田原市と今市市が姉妹都市のため子ども会も交流することになる							
事業(活動)内容	今市市・小田原市の子どもが50人ずつで交歓会を行う。 二宮神社見学と歓迎式～自然の家～いわなのつかみどり～川遊び～キャンプファイヤー キーホルダー作り・ウエスタン村1泊2日							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	・今市市行政が主催 ・歓迎式、おわかれ会、キャンプファイヤー等、プログラムの中に子どもの出番がある							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	小田原市子ども会連絡協議会		大人					
・バス2台で早朝から出発のため、健康管理に注意する。 ・出来るだけ、子ども達にもやる気を起こさせるために、事前研修、事後研修を行い、遊びに行くのではないという意識を持たせた。 ・毎年、交互に今市と小田原を交替で訪問するようにしている。15、17年度は小田原で交歓会を行う。								

分類	内容		交流		小田原市・岸和田市青少年活動交流			
	活動主体		行政					
参画の段階	4		その理由	その年の内容については、事前に大人が決定している。				
団体名	小田原市教育委員会	E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL <a href="http://www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen">http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen</a>				
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1723	スタッフ	小田原市シニアリーダーズ・クラブ会員			
実施時期	平成15年6月	参加人数	18人	対象	学生、社会人	年齢	18～30歳	
他団体・組織との連携	平成15年度は、小田原市シニアリーダーズ・クラブへ委託		活動資金		市からの委託料			
趣 旨	小田原市・岸和田市が青少年に関する友好都市として、友好・親善の輪を広げる。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	小田原市シニアリーダーズ・クラブ代表18人が参加。岸和田市カウンセラー協議会と新緑会12人を迎え、キャンプ技術の交流や中心市街地等の社会見学を通して交流を深めた。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	宿泊地である青少年の家でのプログラムを進行。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	小田原市教育委員会		青少年と大人					
岸和田市との連絡調整は、事務局にて行った。								

< 成人式 >

分類	内容		成人式		平成15年度 やまと成人式			
	活動主体		実行委					
参画の段階	6		その理由	行政と実行委員が主催者であり、企画の段階から若者の考えを取り入れ、協議を重ねて最終的に決定したから。				
団体名	平成15年度やまと成人式実行委員会		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	大和市 青少年センター		046-260-5224	スタッフ	新成人・青年19人、大人6人			
実施時期	平成16年 1月12日(月)	参加人数	1,513人	対象	昭和58年4月2日～昭和59年4月1日の期間に生まれ、平成15年11月1日現在大和市内に住民登録(外国人登録者を含む)のある人	年齢	20歳(新成人)	
他団体・組織との連携	(社)大和青年会議所・大和商工会議所・大和市母親クラブ連絡協議会・大和市青少年指導員連絡協議会・桜林会・林間着付サークル・大和ユースクラブ・サークルありんこ			活動資金	市からの委託金6,175,000円			
趣旨	成人の日を記念し、社会人としての自覚を高めるとともに、これからの人生を自らの力と自主的な判断で歩んでゆこうと決意している新成人をお祝いすることを目的として開催する。							
実施することになったきっかけ	行政が設定し、参加するだけの式にするよりも、新成人自身が企画に加われるようにするため。							
事業(活動)内容	第1部は式典、第2部はアトラクション(立食パーティー・抽選会)。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	式典・アトラクションの企画から実行にいたるまで、新成人を中心とした実行委員会が行った。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	平成15年度やまと成人式実行委員会		青少年と大人					
成人式の開催にあたり総予算、日程、会場を除くほとんどの事柄を実行委員会で決定している。その中心となるのは参加者でもある新成人代表で、それをサポートするのが新成人代表経験者からなる青年代表である。団体推薦の大人の委員には青少年の議論の様子を見守り、大人ならではのアドバイスを送ってもらった。また、当日参加してもらった協力団体のとりまとめを担っていただいている。15年度は、より新成人の意見を反映させるため、実行委員会を青少年だけの会議と全体会議を交互に開いていく形式とした。								

分類	内容		成人式		新成人のつどい			
	活動主体		実行委					
参画の段階	6		その理由	大人が主催者であるが、企画の段階から子どもたちの考えを取り入れ、大人と相談しながら最終的な決定したから。				
団体名	新成人のつどい 実行委員会		E-Mail	seisyou@city.hadano.kanagawa.jp	URL			なし
代表者名	秦野市青少年課		0463-81-7011	スタッフ	40人程度			
実施時期	成人の日	参加人数	1,600人程度	対象	新成人	年齢	19～20歳	
他団体・組織との連携	秦野市青少年指導員連絡協議会・秦野市相談員連絡協議会			活動資金	公費			
趣旨	新たに成人する若者を祝い、新成人の旧友との再会の場という考えのもとに気軽な歓談の場を設け、また社会的責任や立場を自覚し、明るい未来を想像する力を持てるよう励ますため、新成人で組織される実行委員会により、企画・運営・当日の進行を進めていく「新成人参加型成人式」を実施。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	「新成人のつどい」 1部 式典 2部 二十歳のパフォーマンス(参加者を公募)							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	「新成人のつどい」の企画・運営							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	秦野市・秦野市教育委員会		青少年と大人					
全体的な方向性を定め、実行委員会を組織し、軌道補正していく。								

< 成人式 >

分類	内容		成人式		平成17年平塚市成人式			
	活動主体		実行委員会					
参画の段階	6		その理由	主催者は市であるが、新成人だけで集まる実行委員会を組織し企画運営業務を委託する機会があるため。				
団体名	平成17年平塚市成人式実行委員会		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	実行委員長 河原まいこ			0463-32-7029 平塚市市民部 青少年課	スタッフ	実行委員20人		
実施時期	平成17年1月10日 (月)		参加人数	不明	対象	3,167人	年齢	20歳
他団体・組織との連携			ボランティア		活動資金	平塚市委託料 5,480,000円		
趣 旨	成人式の企画運営に青年の意見を反映させる目的							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	年間9回の実行委員会、担当毎の打ち合わせ、式典前日、式典当日							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	予算・式典内容・アトラクション決定							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	平塚市市民部青少年課		青少年				共同で作業	
意見の集約								

分類	内容		成人式		山北町成人式(第2部)			
	活動主体		実行委員					
参画の段階	6		その理由	成人者が自ら企画・立案し、一生に一度の成人式を思い出深いものにするため実行委員会制度をとり、一線を超えないよう大人がチェックする。				
団体名	山北町成人式実行委員会		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	山北町教育委員会 生涯学習課			0465-75-3649	スタッフ	成人者10人、青少年指導員4人		
実施時期	成人の日		参加人数	187人	対象	成人者	年齢	20歳
他団体・組織との連携			山北町青少年指導員		活動資金	町より助成		
趣 旨	明日の日本を担う新成人の門出を、町をあげて祝福するとともに、法的に諸々な権利が与えられたことや、それに伴い大人としての責務が生じたことを自覚する機会とする。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	山北町中央公民館で実施される成人式(第2部)を実施。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	成人式(第2部)の企画・立案をし、16年は立食パーティーを実施。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	山北町成人式実行委員会		青少年と大人					
実行委員の選定が課題である。								

分類	内容		成人式		平成16年成人式				
	活動主体		実行委員						
参画の段階	6		その理由	大人(行政)が実施計画案を提示し、それを元に実行委員会にて協議決定し、当日の運営も子ども(新成人)が実施しているから。					
団体名	平成16年成人式 実行委員会		E-Mail	なし	URL				なし
代表者名	南足柄市教育委員会 教育部教育総務課			0465-73-8034	スタッフ	平成16年新成人(8人) 市担当職員			
実施時期	平成16年1月12日	参加人数	423人	対象	平成16年新成人	年齢	-		
他団体・組織との連携	青少年指導員連絡協議会		活動資金	市の補助金					
趣 旨	成人の仲間入りをする市民(新成人)を祝福するとともに、成人としての自覚を高める。								
実施することになったきっかけ	新成人の手で思い出に残る成人式を実施するため、毎年実施している。								
事業(活動)内容	成人式当日の企画と運営(司会・新成人のこぼし・受付など)。実行委員会を2回開催								
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	実行委員会にて、当日の役割分担やアトラクションの決定、新成人のこぼしを考えた。								
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他		
	南足柄市		青少年と大人						
時間と予算の関係上、大人(行政)の実施計画案を元に実行委員会にて検討し実施している。									

分類	内容		成人式		成人のつどい開催事業				
	活動主体		実行委員						
参画の段階	6		その理由	市の主催事業のためある程度の方向性を示すことが必要のため					
団体名	綾瀬市成人のつどい 実行委員会		E-Mail	なし	URL				なし
代表者名	綾瀬市青少年課			0467-70-5655	スタッフ	新成人対象者6人、前年実行委員6人、青少年育成団体4人、中学校推薦者1人			
実施時期	平成15年5月 ～平成16年3月	参加人数	17人	対象	特になし	年齢	19歳以上		
他団体・組織との連携	青少年指導員、青少年補導員、市子連、JLCから1人ずつ委員を選出		活動資金	委託金1,244,000円(平成15年度)					
趣 旨	大人になった事を自覚し、自ら生き抜こうとする新成人を祝い励ます。								
実施することになったきっかけ	新成人の立場に立ったよりよい成人のつどいとするため								
事業(活動)内容	成人のつどいの会場レイアウト、案内状、次第、パンフレット、アトラクションを企画・運営								
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	月1回会議を行い、会場部会、広報部会、アトラクション部会に分かれ、それぞれ企画・運営を行った。								
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他		
	綾瀬市青少年課		青少年と大人						
<p>…基本的に昨年の状況説明をする程度で話し合いを行っている。企画したことが実際に行うことができるか等相談に乗った。</p> <p>…会場は実行委員が活動する前から問い合わせがあるので事前に確保している。資金は委託料で行っている。広報も希望に応じて掲載した。</p>									

< 成人式 >

分類	内容		成人式		平成16年「成人の日」を祝うつどい			
	活動主体		実行委					
参画の段階	8		その理由		実行委員からの発案で、事務局の意見を参考にしながら最後まで職務を遂行している。			
団体名	平成16年「成人の日」記念事業実行委員会		E-Mail	sa02-harada@city.yokohama.jp	URL <a href="http://www.city.yokohama.jp/me/gakusyu/section/ad/index.html">http:// www.city.yokohama.jp/me/gakusyu/section/ad/index.html</a>			
代表者名	山崎 大輔		045-671-3716 (事務局)	スタッフ	委員長1人、副委員長3人、会計2人、監事2人、書記2人、委員13人			
実施時期	平成15年5月7日～16年3月31日		参加人数	23人	対象	横浜市内在住の市民	年齢	19歳～21歳(年度当初の4月1日現在)
他団体・組織との連携			横浜市、横浜市教育委員会、横浜市選挙管理委員会(共催)		活動資金	自主企画の活動資金として約50万円		
趣 旨	「成人の日」の趣旨に沿って、新成人を祝い励ますための記念行事を円滑に運営・実施する。							
実施することになったきっかけ	新成人を中心とした若者が自ら企画・運営に参画するために、教育委員会が公募を行った。							
事業(活動)内容	(1)記念行事のコンセプト・キャッチコピーの決定 (2)当日参加者に配布するパンフレットの作成							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	毎月2～3回程度の会議を実施し、企画・立案を行う。また、パンフレットの取材、自主企画の準備を適宜行い、前日の準備及び当日の運営を行った。平成17年も同様の形態で実施している。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	「成人の日」記念事業実行委員会		青少年				事務局として教育委員会職員が入り、適宜助言した。	
基本的には実行委員会の発案で、企画・立案・運営でイベントを実施しているが、記念式典全般に関することは、教育委員会と共催して運営している。予算面や実現可能性については、事務局として教育委員会職員が適宜助言している。平成16年は新たにホームページを立ち上げ、実行委員会の紹介や式典のPRを行ったり、著名人からのビデオレター撮影を実行委員自らの手で行った。苦労した点については、若者の斬新なアイデアと予算面などの制約の中で、実行委員の主体性を保ちつつ、いかに実現に向けて方向性をつけていくかを事務局職員に求められる。								

分類	内容		成人式		成人式			
	活動主体		実行委員会					
参画の段階	6		その理由		青少年と大人と一緒に活動している。			
団体名	小田原市・小田原市教育委員会		E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL <a href="http://www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen">http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen</a>			
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1723	スタッフ	成人式運営委員、青少年育成推進員、シニア・リーダーズ・クラブ			
実施時期	平成16年1月		参加人数	2,326人	対象	新成人	年齢	20歳
他団体・組織との連携			成人式運営委員会を組織、小田原市青少年育成推進員協議会や小田原市シニア・リーダーズ・クラブの協力		活動資金	小田原市		
趣 旨	新成人を対象として、その将来を祝福し、社会人としての自覚を高める。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	1部式典、2部アトラクション「はたちのパフォーマンス～はたちの主張～」の2部構成で1回開催。 式典・・・お祝いのことば、励ましのことば、新成人の抱負など アトラクション・・・主張発表・バンド、管弦楽演奏など							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	成人式運営委員会を新成人で組織し、企画、立案、運営、実施している。 ・式典開始前上映ビデオの作成 ・舞台看板、外看板のデザイン ・司会台本の作成及び当日の司会進行 ・パフォーマンス参加者の募集に関すること ・記念品及び案内通知等への掲載内容の検討 など							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	小田原市・小田原市教育委員会		青少年と大人					
大人は、式当日の運営に関わる。								

分類	内容		成人式		平成16年相模原市はたちのつどい						
	活動主体		青少年の団体								
参画の段階	6		その理由 8が近いと思いますが、最終的な責任は大人(行政)にあるため								
団体名	はたちのしゃべり場!!		E-Mail	なし		URL			なし		
代表者名	中山さとみ		042-769-8289 相模原市 青少年課		スタッフ		新成人18人				
実施時期	平成15年6月結成 ～平成16年1月		参加人数	7,637人		対象	新成人		年齢	19～20歳	
他団体・組織との連携			特になし			活動資金	行政が支出				
趣 旨	一生に一度の成人式に様々な形で関わっていく。										
実施することになったきっかけ	5月に実施した市主催の意見提案会の席上で「一生に一度の成人式だから自分たちで作りあげたい」との発言										
事業(活動)内容	大ホール入口の装飾作成、ニュースレターの企画・制作、VTR「プロジェクト20」の撮影・編集、舞台看板・外看板のデザイン企画、司会(台本作成を含む)、記念映画選考会議への参加、「FMさがみ」市長インタビュー中継(詳細は別紙) 実行委員会ではありません										
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	仲間の増やし方は、市の広報紙やFMさがみ、市のHPでの呼びかけと友人への声かけによる。活動の方法は、市がある程度の条件提示をしながら、新成人自身が自由に発想して市側と調整してアイデアを実現していくというスタイル。市側や団体内の連絡は電子メールを活用、市とのメールは168回であった。メールを活用したため、実際に会議をした回数はあまり多くはないようだ。										
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他				
	成人式自体は市の主催だが、活動自体は団体が自主的に実施		青少年				新成人が様々なアイデアを出した際に、そのアイデアを具現化するために必要な事項や超えなければならない課題などを自分なりに考えて発言し、新成人の立場になってアシストしていきました。				
<p>&lt;市の担当者意見&gt; 実行委員会形式といった「かたち」にこだわりはありませんでした。成人式の裏側などの情報を説明し、課題が生まれたら新成人と共有して考えるという姿勢で行いました。むしろ、携わってくれた新成人の方にどれだけ思い出をつくれるかということを考えていました。図書券などの謝礼は用意せず、成人式終了後に沢山の写真やFM放送のデータをCD-Rにして全員にプレゼントしたのがとても喜ばれたのが印象的でした。</p>											

分類	内容		成人式		平成16年成人式「津久井町はたちのつどい」						
	活動主体		実行委								
参画の段階	3		その理由 主催は町及び町教育委員会で行事の構成はあらかじめ決まっている。								
団体名	はたちのつどい 実行委員会		E-Mail	なし		URL			なし		
代表者名	遠藤 綾乃		042-784-3211 津久井町 生涯学習課		スタッフ		新成人15人、事務局(大人)2人				
実施時期	平成16年1月12日		参加人数	353人		対象	新成人(町内在住、出身他)		年齢	20歳	
他団体・組織との連携			町青少年指導員、町交通指導 隊、町明るい選挙推進協議会			活動資金	町一般会計予算				
趣 旨	-										
実施することになったきっかけ	特になし										
事業(活動)内容	平成16年1月12日(月)成人の日 10:00～アトラクション(スライドショー)										
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	アトラクションの企画の検討、スライドショーの資料収集、作成、成人式当日の運営などを大人と一緒にいった。										
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他				
	津久井町及び津久井町教育委員会		青少年								
過去の資料を提供し、なるべく実行委員の意見で決定するよう助言は控えた。											

<まつり>

分類	内容		まつり		浅間祭			
	活動主体		実行委員					
参画の段階	8		その理由	浅間祭に参加する青少年団体から1人ずつ出された実行委員が、実行委員会の一構成員として浅間祭の企画・立案・運営に参画した。				
団体名	浅間祭実行委員会		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	実行委員長 朝倉孝之		0463-32-7029 平塚市市民部 青少年課	スタッフ	実行委員及び役員			
実施時期	11月8・9日(土・日)	参加人数	12,000人	対象	制限なし	年齢	制限なし	
他団体・組織との連携	なし		活動資金	平塚市からの委託料				
趣 旨	青少年会館の利用者及び市内の青少年を中心に市民との交流を深める。							
実施することになったきっかけ	同上							
事業(活動)内容	青少年会館及び正面広場を会場として、主に青少年会館利用団体による日頃の活動の成果の発表・展示や物品販売・ワークショップなどを行った。広報紙や学校を通じたチラシ配布などにより広く市民にPRし、より多くの市民の参加を呼びかけた。浅間祭の企画・立案から運営にいたるまで実行委員会が行った。参加団体から1人ずつの実行委員を出し、実行委員会を構成した。							
青少年がどのように参画して事業、活動を進めたか	浅間祭に参加する青少年団体から1人ずつ出された実行委員が、実行委員会の一構成員として浅間祭の企画・立案・運営に参画した。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他			
	浅間祭実行委員会	青少年と大人			青少年と大人は対等な立場			
上述のとおり、青少年も一実行委員としての立場に位置するため、青少年と大人の区別はない。								

分類	内容		まつり		青少年フェスティバル			
	活動主体		実行委員					
参画の段階	6		その理由	フェスティバルの企画から当日の運営まで、基本的には青少年主体の実行委員会が協議をし、必要に応じて助言等しながら進めている事業であるから。				
団体名	川崎市青少年育成推進委員会		E-Mail	25seiiku@city.kawasaki.jp	URL			<a href="http://www.city.kawasaki.jp/25/25seiiku/home/festival/top.htm">http://www.city.kawasaki.jp/25/25seiiku/home/festival/top.htm</a>
代表者名	川崎市市民局 青少年育成課		044(200)2669	スタッフ	平成15年度 企画運営スタッフ 16人 当日ボランティア 105人			
実施時期	例年3月	参加人数	約12,000人 (平成15年度)	対象	川崎市内の青少年	年齢	-	
他団体・組織との連携	川崎市		活動資金	2,250,000円(川崎市から委託)				
趣 旨	青少年自身が同世代に向けてのイベントの企画・運営を担うことにより、青少年の社会参加を促進することを目的とする。また、川崎市内の青少年を対象にイベントを通じて様々なふれあい・体験をってもらうことを併せて目的とする。							
実施することになったきっかけ	青少年の社会参加を促進するという意見から							
事業(活動)内容	会議の開催 川崎市青少年育成推進委員会の中に実行委員会(高校生～25歳までの青少年で構成)を立ち上げ、企画・広報・運営方法等について協議する。 実行委員は市内青少年関係団体による推薦または一般公募 事業内容(平成15年度)テーマ 「汗～川崎オリμπック区 とどろきザワールド～」 内 容 ゲームコーナー・ステージ・フリーマーケット・模擬店等							
青少年がどのように参画して事業、活動を進めたか	実行委員会(高校生～25歳までの青少年で構成)で青少年フェスティバルの企画・広報・運営方法等を協議し、また、フェスティバル当日には青少年ボランティアの協力を得ながら、事業を開催した。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他			
	川崎市青少年育成推進委員会	青少年と大人						
実行委員ができるだけ主体となって、青少年フェスティバルの企画・運営が行えるように、会場の確保や資料づくりなど支援した。しかし、実行委員だけにすべてを任せきりにするのではなく、重要な場面では、大人がアドバイス・修正を行うことで、フェスティバルが安全で楽しいものになるよう努めた。								

分類	内容	まつり			
	活動主体	実行委			
<b>海老名市青年の祭典</b>					
参画の段階	7	その理由	実行委員会が企画、運営をしているから		
団体名	海老名市青年の祭典実行委員会	E-Mail	なし	URL	なし
代表者名	実行委員長 小関拓	046-231-9787	スタッフ	社会人11人、大学生3人、高校生3人	
実施時期	平成16年7月25日	参加人数	-	対象	高校生以上30歳未満の青年 年齢 16~29歳
他団体・組織との連携	海老名市	活動資金	海老名市からの委託料2,170,000円		
趣 旨	団体活動、ボランティア活動の中から青年の意識の高揚を図る。				
実施することになったきっかけ	1984年国際青年の年に青年の社会参加を目的として始まった。				
事業(活動)内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>毎年夏期に実行委員会が企画・運営する祭りの開催</li> <li>活動拠点である海老名市立青少年会館の清掃活動、青少年会館利用団体のまつり参加(模擬店出店)</li> </ul>				
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	近隣の高校・大学に実行委員会への参画者を募集、現実行委員の口コミによる友人への参画依頼をし、事業に向けて定期的に会議を開催した。				
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり	その他	
	海老名市青年の祭典実行委員会	青少年			
実行委員不足、半数以上が社会人で組織構成されているため、平日に活動できない部分について(祭りの協賛依頼、会場設営業者打ち合わせ等)は事務局が行ったが、実行委員に活動してもらいたかった面が多々あった。					

分類	内容	まつり			
	活動主体	子ども会			
<b>ふれあい子どもフェスティバル</b>					
参画の段階	4	その理由	アンケートを用意して来年の参考にしています。		
団体名	小田原市子ども会連絡協議会	E-Mail	なし	URL	なし
代表者名	橋本 輝夫	0465-33-1723 小田原市 青少年課	スタッフ	-	
実施時期	平成16年7月3日	参加人数	約2,000人	対象	市内子ども会会員 年齢 6~12歳
他団体・組織との連携	小田原市総合体育館アリーナ、ジュニアリーダーズクラブ	活動資金	小田原市の委託事業のため市から予算がある		
趣 旨	スポーツレクリエーションを通して親睦・交流を深め、自身の健全な発達と体力の増進を助長し、文化活動の発展を通して、子ども会活動の発展をはかる。				
実施することになったきっかけ	当初はスポーツ部門と文化部門に分かれて開催していましたが、1日に両方を行うことにしました。				
事業(活動)内容	小田原アリーナにおいて文化部門は絵画・習字・工作等を展示、メインアリーナでは、いろいろなゲームを競技し、リレーなど学区対抗4種目もあり、午前9:30~午後4:00間で盛り上がる。昼休みは大声コンテスト、紙ヒコーキとばし、北条だいこの演奏などを行う。				
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	プログラムについては市子連、企画部会が提案し、実行委員会で決定する(地域役員)。子どもは、開会のことば、閉会のことばに参加する。				
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり	その他	
	小田原市子ども会連絡協議会	大人			
<ul style="list-style-type: none"> <li>大人が立案し、子どもは参加するのみ。</li> <li>2,000人の子どもを動かすのに苦労している(集合、出発、などが毎年頭のいたいところ……)。</li> </ul>					



<まつり>

分類	内容		まつり		北条五代祭			
	活動主体		子ども会					
参画の段階	4		その理由	観光協会が計画しているが、子どもたちは行列の少年少女武者隊として、パレードを盛りたてているので、行事には立派に子どもの意思で参画している。				
団体名	小田原市子ども連絡協議会		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	橋本 輝夫		0465-33-1723 小田原市 青少年課	スタッフ	市子連役員、地域役員(学区役員)(付き添い)			
実施時期	平成16年5月3日	参加人数	150人	対象	市内子ども会25学区5,6年生男女3名ずつ	年齢	10～12才	
他団体・組織との連携	小田原市観光協会		活動資金	衣装については用意されている。弁当もある。子供のジュースは市子連活動資金から用意する150本				
趣 旨	伝統行事に参加し地域をより理解し誇りを持つと共に祭りを盛りたてている。							
実施することになったきっかけ	小田原をあげての祭り武者行列に市の団体として参加する。							
事業(活動)内容	少年少女武者隊として市内を隊列を作って行進する。二ヶ所で勝どきをあげる。スタッフは子供の隊列を引率している。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	観光協会に立案しそれに従っている。実行委員会には市子連も参加している。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	小田原市観光協会		大人					
3時間位前から着物の着付けをしたり出陣式を炎天下で待ったり、市内を行進して歩くため体調をくずす子どもが出てくるので、観光協会にお願いして出来るだけ子ども会は大目にもってもらっているところもある。 着付けのプロが行進について歩いてくれるが履きなれない「わらじ」に足が痛くなったり着付けない着物が着くずれたり苦勞が多いが帰って来た子どもはとても立派に見えます。								

分類	内容		まつり		市民まつり模擬店出店			
	活動主体		実行委員会(青少年)					
参画の段階	6		その理由	販売は子ども達のみで行ったが、用具や材料の仕入れは大人が行ったから。				
団体名	逗子市子ども連絡協議会		E-Mail	なし	URL			なし
代表者名	小沢 正和		046-873-2976	スタッフ	大人5人、中学生15人			
実施時期	秋の休日	参加人数	15人(中学生)	対象	ジュニアリーダーズクラブ会員	年齢	12～15歳	
他団体・組織との連携	特になし		活動資金	準備金は市子連事業費だが、売上金から精算し、利益は宿泊研修費用などにあてる。				
趣 旨	将来の子ども会指導者養成の一環として、ジュニアリーダーズクラブ(中高生27名)を運営している。そのILの子ども達に様々な体験の場を与える。							
実施することになったきっかけ	年度初めの全体会議を行い年間の行事を検討して、今年も実施することになったから。							
事業(活動)内容	会場:市民まつりセピアエリア(市第1運動公園) 内容:おでん(250皿)、フランクフルト(300本)、ラムネ(400本)、カップdeチョコばな(100個)・・・新作							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	市子連ジュニアリーダーズクラブのメンバーで販売品目を考え、会場看板や値札などを作成し、当日は会場設営・飾り付けを行いそれぞれ販売する担当を割り振り活動した。ガス器具や鉄板などの用具、材料の仕入れは大人が担当した。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	逗子市子ども連絡協議会		青少年					
企画委員会や実行委員会の開催設定は大人が行ったが、部活や塾などで忙しい中高生の予定を合わせて会議を設定するのに苦勞した。委員会の運営については、ジュニアリーダーの委員長を議長に指名し議事進行を任せるが、会議のやり方、進め方などを適時指導しながら、子どもたちの意見を多く引き出せるよう協力してきた。当日の運営は子どもたちの必死に販売する姿に大人も負けじと競い合うように楽しんでいる。								

< 子ども会議 >

分類	内容	子ども会議		川崎市子ども会議宿泊交流会			
	活動主体	青少年					
参画の段階	6	その理由	多少の失敗もあったが、これまで説明してきたとおりの関わりである。				
団体名	川崎市子ども会議	E-Mail	88syogai@city.kawasaki.jp	URL	なし		
代表者名	川崎市教育委員会生涯学習推進課		044(200)3309	スタッフ	大人14人		
実施時期	8月4日～5日	参加人数	62人(大人24、高校生7、中学生10、小学生31)	対象	川崎市内の子ども	年齢	10～17歳
他団体・組織との連携	他団体・組織との連携:川崎市青少年の家を利用。宮前区子ども会議委員の団体参加。		活動資金	活動資金:食費は自己負担。施設利用費は減免処置。その他の費用は川崎市子ども会議事業費より支出。			
趣旨	川崎市子ども会議の子どもたちが市内の子どもたちと親睦交流を深める中で、「子どもの権利」を教えあい学びあい、子ども会議活動に興味を持ってもらい、子どものネットワークを広げていく。						
実施することになったきっかけ	川崎市子ども会議委員の発想						
事業(活動)内容	1泊2日の生活を通して、互いに権利を学習しあい、レクリエーションを楽しみ、意見交流をはかった。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	企画、立案、運営計画、当日の進行について、子ども会議委員が中心にすべてを行い、おとなは支援に徹した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	川崎市子ども会議	青少年					
主催者が子どもの社会参加を推進し、意見表明とその取りまとめに携わる川崎市子ども会議の委員さんたちなので、極力子どもたちの主体的な取り組みを尊重した。昼間の企画推進に関しては大変がんばって感動したが、夜間等、一部の子どもたちがルール違反をした時等に、おとながしゃり出るのは簡単だが、室長、実行正副委員長等の自らの気付きや該当者の自己責任を問うたり、自己解決能力に期待したりと、やはり我々おとなたちにも大きな戸惑いが生じた。おとなの子どもに対する関わり方は難しいものである。							

分類	内容	子ども会議		21世紀淡海子ども未来会議設置運営事業			
	活動主体	NPO法人					
参画の段階	6	その理由	場面によっては7という段階のところも見られることもあるが、時間や施設などの物理的な面についてはおとなの方が設定しなければ活動できないため。				
団体名	県事業(NPOに事業を委託)	E-Mail	EM00@pref.shiga.a.jp	URL	http://www.pref.shiga.jp/bbs4/		
代表者名	滋賀県児童家庭課		077-528-3557	スタッフ	NPO生涯学習研究所ほかサポーター10人前後		
実施時期	7～3月	参加人数	58人(小40、中18)	対象	滋賀県内小学校4年生～中学校3年生	年齢	9～15歳
他団体・組織との連携	組織との連携:県の各地域振興局と連携して実施。		活動資金	-			
趣旨	次代の主人公である子どもたちの健全な育成を図る観点から、体験学習等を通じて自ら考え、自ら行動する力を引き出すことを支援						
実施することになったきっかけ	子ども権利条約の理念を具体化するものとして、子どもの意見表明や社会参加の場を提供						
事業(活動)内容	小学校4年生から中学校3年生までの子どもたちを公募し、「21世紀淡海子ども未来会議」を設置。県内を4つのブロックに分け、体験学習・研修活動を通じて子どもたちが身近な地域の問題を糸口に社会への理解と関心を高めながら、知事をはじめとする大人への意見表明や意見交換を中心とした大人との交流事業を行う。子どもが主体的に取り組む過程を重視するため、活動内容等は子どもたちの意見を尊重して実施する。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	7月の下旬に知事から子ども議員としての任命書を受与され、8月に2泊3日の夏キャンプで、これからの滋賀県内の4つの地域会議の活動テーマを話し合いを通して決定した。本年度のテーマは第1回目(9月)の湖南地域で「ボランティア」、第2回目(11月)の湖西地域で「外来魚」、第3回目(12月)の東近江地域で「近江牛を知ろう」、第4回目(1月)の甲賀地域で「陶芸家になろう」に設定している。その後、地域会議を通して、子どもの目線で滋賀県をよりよいものとするため意見表明の場として、「子ども県議会」を3月の春休みに開催。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	NPO生涯学習研究所	大人					
基本的には子どもたちの意見表明をする場としての事業であり、子どもたちにとっては活動の場であるので、自分の思いを相手にどのように伝えるのかということについて、アドバイスできるかわり方を共通理解している。また、次のような体験学習サイクルを基本として、子どもたちが主体的に学べることを期待している。 DO(体験する) LOOK(指摘する) THINK(分析する) GROW(成長する) NextDO(次の体験へ)							

< 子ども会議 >

分類	内容	子ども会議		< 第7回 > 2003 神奈川ふれあい子どもサミット		
	活動主体	NPO				
参画の段階	6	その理由	-			
団体名	神奈川の教育を推進する県民会議	E-Mail	なし	URL	なし	
代表者名	-		-	スタッフ	大人6人(含事務局員2人)、実行委員19人(小学生5人、中学生12人、高校生2人)	
実施時期	平成15年11月8日	参加人数	141人	対象	構成団体の親子、教師、県民	年齢 大人68、高10、中32、小31
他団体・組織との連携	県内各地の「地域ミニ子ども会議」(9団体)	活動資金	S鉄道株式会社からの寄付金			
趣 旨	青少年の豊かな心とたくましく生きる力を育み、テーマに基づく協議や意見交流を深め、自ら考え行動する実践力を培う。					
実施することになったきっかけ	大人の声だけでなく子どもの声も聞く必要から					
事業(活動)内容	県立地球市民かながわプラザにおいて(時間 13:00~16:00)、「地域ミニ子ども会議」の報告、参加者全員によるテーマ「現代の友達関係」に基づいた論議(フリートーク)					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	19人の小・中・高校生で構成する実行委員会において、テーマ設定、内容の検討(決定)、準備運営等を4人の「サポーター(大人)」の側面支援のもとに行った。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他	
	神奈川の教育を推進する県民会議	大人				
できるだけ子どもたちに考えさせ、主体的に取り組ませることにより、子どもたちの「やる気」を引き出すように務めた。						

分類	内容	子ども会議		川崎市子ども夢パーク子ども運営委員会		
	活動主体	運営委員会(青少年)				
参画の段階	5	その理由	設備や運営に子どもたちの意見を生かそうと「運営準備会」ができたが、予算や日程などの都合で、子どもたちの意見を実感に伴うところまで生かすことができなかった。「子ども運営委員会」となった後も、「イベント」や「運営について」といった大人側からの投げかけがあって、話し合いを進めているようなところがあり、必ずしも自主的な活動となっていない。			
団体名	川崎市子ども夢パーク	E-Mail	yumepark@q00.itscom.net	URL	http:// home.h00.itscom.net/yumepark	
代表者名	京 利幸		044-811-2001	スタッフ	-	
実施時期	月1~2回	参加人数	10人前後	対象	川崎市内の小学生から18歳未満の子ども	年齢 小学4年生から18歳未満の子ども
他団体・組織との連携	子ども夢パーク運営委員会、子ども夢パーク支援委員会	活動資金	川崎市子ども夢パークの運営費			
趣 旨	子どもたちが自分で動かしていく場として、自主的な運営を行うため「子ども運営委員会」を設置した。					
実施することになったきっかけ	「川崎市子どもの権利に関する条例(2001年4月1日施行)」に基づいて設置された施設であり、子どもたちの活動拠点、情報発信の場として、自主的活動を支援し、運営に生かすため。					
事業(活動)内容	月1~2回程度の活動日を設け、日常運営のルールやイベントなどについて話し合い、具体的な活動を行う。畑や花壇について、計画を立て、土を耕したり、種や苗の購入・水やり、肥料やり、収穫などを行う。8月1日に1周年記念イベントを企画・運営・実施した。大きなイベントやルール変更については、「川崎市子ども夢パーク運営委員会(行政・財団・スタッフ・支援委員会・関係団体)」に各代表とともに子ども運営委員会委員も出席している。					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	「川崎市子ども夢・共和国」からはじまり、「仮称川崎市子ども夢パーク推進委員会」、「仮称川崎市子ども夢パーク運営準備会」が夢パークのあり方や運営について協議・検討してきた結果、2003年7月に開所した。川崎市子どもの権利に関する条例(以下「子どもの権利条例」)、川崎市子ども夢パーク条例(以下「夢パーク条例」)に基づき、「子どもの権利条例」の具現化を図り、子どもが自分の責任で遊び、夢を育み、安心していられる居場所として、子どもの子どもによる、子どものための活動の拠点として設置された。子どもたちの話し合いや活動には、夢パークスタッフや支援委員(子ども運営委員会担当)が参加、活動を支援している。「子どもたちとともにつくり続ける施設」というコンセプトから、日常運営やイベントなどについても、ともに話し合い、活動している。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他	
	川崎市子ども夢パーク	青少年と大人	-			
士・日曜日など子どもたちの学校休業日に子ども運営委員会を開催している。スタッフと市民が話し合いのサポートとして参加。「お知らせ」文書を送ったり、話し合いのテーマや資料を準備したり、活動に必要な用具の調達など、段取り的なことを大人が行っている。苦労した点、開所するまでの「運営準備会子ども部会」では、「こんな施設がほしい」「こんな施設にしたい」「こういう運営を望む」といった意見集約の場であったため、話し合い中心の活動に参加できる中高生が中心であったが、開所してから実際に利用しているのは近隣の幼児・小学生と家族連れが中心である。開所以降、「つくり続ける施設」として、子どもたちが運営やイベントなどについての話し合いのために集まることが困難になってきた。このことから、利用主体である子どもが自主的活動主体(運営や施設のあり方を考える)となるには、ここが自分の居場所であるという実感や、日々の活動を通して、この居場所をもっとよくなってほしいという欲求、子ども自身のエンパワーメントが必要であることがわかった。しかし、今、遊び中心の子どもたちにこのことを求めるのは性急である。子どもが成人するのと同様に、「成果が出るのはまだまだ先」であろう。今後は、子どもと大人のパートナーシップのなかで子どもたちが育っていくことを保障していきたい。						

分類	内容	スポーツ		大運動会			
	活動主体	ジュニアリーダー					
参画の段階	7	その理由	子どもたちが主催者であるため、主体的に取り組んだ。				
団体名	JLC・OF・あやせ	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	綾瀬市青少年課		0467-70-5655	スタッフ	高校生6人、中学生3人		
実施時期	3月	参加人数	33人	対象	市内小学校4～6年生	年齢	9～11歳
他団体・組織との連携	綾瀬市子ども会 育成連絡協議会		活動資金	JLC・OF・あやせ予算より支出			
趣 旨	ジュニアリーダーと小学生が一同に集い、スポーツやレクリエーションゲームを通じて交流を図り、ジュニア活動の楽しさを小学生に理解してもらおう。						
実施することになったきっかけ	ジュニアリーダーの勧誘						
事業(活動)内容	スポーツセンター小体育室において、スポーツ、ダンス、レクリエーションゲームを行う。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	大運動会プログラムについて、子どもたちが中心に考え決定した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案	大人の関わり		その他	
	JLC・OF・あやせ		大人				
プログラムの進行を見守った。 会場の予約、文書の発送を行った。 けがをしないように安全に配慮した。							

分類	内容	スポーツ		リーダー企画「秋の行事」			
	活動主体	子ども会					
参画の段階	6	その理由	主運営は大人であるが、企画の段階から子ども達为中心で考え、要所を大人が助言・決定したから。				
団体名	逗子市 子ども会連絡協議会	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	小沢 正和		046-873-2976	スタッフ	大人21人、小学生リーダー8人、協力者18人(大人、高校生、小学生)		
実施時期	秋の休日	参加人数	105人	対象	子ども会会員と家族	年齢	4～12歳
他団体・組織との連携	共催・県立逗子高等学校、 協賛・逗子体操クラブ等		活動資金	市からの補助金、子ども会費を元にした市子連の事業活動費(参加無料)			
趣 旨	将来の子ども会指導者養成の一環として、子どもリーダーたちに自主的に企画運営する機会を与え、様々な体験をしてもらう。						
実施することになったきっかけ	今年はスポーツをやりたいとの子ども達の声で、体操クラブや逗子高校ボランティアセンターの積極的なアプローチがあった。						
事業(活動)内容	会場:県立逗子高等学校体育館 10時～15時 体験コーナー:跳馬、鉄棒、吊り輪、平均台、トランポリン チャレンジコーナー:輪投げ、ストラックアウト、ヒットベッ、射的、大人の体力測定など とん汁サービスあり 前年は「みんなDEウォーク」						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	6月のリーダー養成研修会(1泊2日)の中で、「秋の行事」について子ども達が話し合い、方向性を決めた後、企画運営メンバーを選出して実行委員会を構成し、企画案を具体化していく。基本的に子ども達の意見・希望を大切にしながら、育成者が必要な助言をして決定した。チャレンジコーナーは子どもリーダーたちが担当し、模範演技は逗子体操クラブの子どもたちが行い、会場の設定は逗子高校ボランティアセンターの生徒が企画した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案	大人の関わり		その他	
	逗子市子ども会連絡協議会		青少年と大人				
実行委員会では、話し合いの進め方やまとめ方など適時指導しながら子どもたちの意見が多く出るように支援してきた。当日は子どもたちと共同して運営するよう努力している。つつい大人の方が夢中になってしまい、でしゃばってしまうこともある。							

<スポーツ>

分類	内容	スポーツ		球技大会			
	活動主体	子ども会					
参画の段階	4	その理由	子どもは参加するのみであるが楽しんでいる。				
団体名	小田原市子ども連絡協議会	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	橋本 輝夫		0465-33-1723 小田原市 青少年課	スタッフ	小田原市子連、地域役員 140名位		
実施時期	平成15年10月25日	参加人数	約1,500人	対象	市内子ども会会員 (小学1～6年生)	年齢	6～12才
他団体・組織との連携	市内小学校(4校が会場となる)		活動資金	小田原市の委託事業のため予算があるので予算内で行う			
趣 旨	スポーツを通して学区を越えた子ども同士の交流、親睦を深める。						
実施することになったきっかけ	25学区の交流、親睦のため						
事業(活動)内容	キックベースボール、ドッジボールを市内小学校、4会場を借りて行う。学区の参加する子どもを集めて当日の朝グループ分けをして試合を展開していく。(17年度メディングボール、ドッジボール)						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	市子連企画委員会が提案し、実行委員会(地域役員)が決定する。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	小田原市子ども連絡協議会	大人					
<ul style="list-style-type: none"> <li>当日集まった子どもでチーム分けをするため、初めが忙しくなるがチーム分けがスムーズに行くように工夫している。</li> <li>1年生から6年生までいるのでルールや試合の展開に差がありとても苦労する。</li> <li>1,2年生は男女混合でチーム作り、3,4年生、5,6年生は男子チーム女子チーム作りをする。</li> <li>1,2年生はキックベースボールを知らない子がいるので、男性の方(得意な人)にお願いしたりする。</li> </ul>							

分類	内容	スポーツ		スポーツ大会兼親睦会			
	活動主体	ジュニアリーダー					
参画の段階	8	その理由	高校生がこの事業を「やりたい」と発案し、大人の方と協力して行ったから				
団体名	茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	神名部 義裕		080-5439-1336	スタッフ	高校生(8人)大人(4人)		
実施時期	平成16年8月8日	参加人数	42人	対象	茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブの会員、保護者等	年齢	13～64歳
他団体・組織との連携	茅ヶ崎市子ども連絡協議会、香川公民館、鶴ヶ台小学校		活動資金	茅ヶ崎市子ども連絡協議会からの助成金1万5千円を使い、参加費は無し			
趣 旨	日頃の活動報告をし交流することにより、保護者の方をはじめとする茅ヶ崎市JICを支えてくださっている方により、一層のご理解をして頂き、これからの活動をさらに活発なものにする。						
実施することになったきっかけ	自分たちの活動をもっと知ってほしいという意見が高校生会議の中で出たから						
事業(活動)内容	レクリエーション・スポーツ大会(バスケット&バレー)・座談会(活動報告・関ブロ体験談・中学生の帰宅時間や派遣についての話し合い)・縁日						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	目標・予算・当日のプログラムについては高校生が考え、場所の確保は大人の方に頼みました。プログラムについては高校生の意見が中心だが、基本的には中学生や大人の意見も取り入れ、「目標に沿った」プログラムになるよう注意した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ	青少年					
<p>大きな事業だけに準備や企画が大変だったが、その分やりがいがあった。目標に沿ったプログラムを考えることでプログラム自体に味が出たのではないだろうか？ただ、準備期間が1ヶ月しかなく、内容を煮詰めきれなかったのが残念だった。また、大人の方が参加が少なかった上に入りが激しく、せっかく一生懸命やったのに悔しくて仕方がなかった。</p>							

分類	内容	地域活動		平塚市ジュニア・リーダーズクラブ			
	活動主体	ジュニアリーダー					
参画の段階	7	その理由	上記のとおりクラブ生が中心であり、「事例8」のように大人を巻き込むという点では、活動の内容は自分達が行うものであって大人はあくまでも見守って欲しいという方針のため7とした。				
団体名	平塚市ジュニア・リーダーズクラブ	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	平塚市民部 青少年課		0463-32-7029	スタッフ	クラブ生が開催する各定例会には、クラブ生の中からその定例会に対する担当長などの中心メンバーをそれぞれ決めている。		
実施時期	通年	参加人数	109人 (本年度会員数)	対象	平塚市ジュニア・リーダー養成講習会を修了した者	年齢	中学2年生～ 高校3年生
他団体・組織との連携	各地区子ども会・平塚市青少年課	活動資金	年会費1,600円にて、ボランティア保険への加入や新規加入者のネームプレート作り、その他活動に必要な物品を購入している。				
趣 旨	余暇を利用して自己を鍛え、仲間づくりをはかり、青少年関係団体活動への協力及び地域社会への参加を通じて明るい街づくりに役立つ活動を行う。						
実施することになったきっかけ	昭和57年に、第1期平塚市中学生リーダー養成講習会(第2期より平塚市ジュニア・リーダー養成講習会と改名)の卒業生30人によって自主的に結成された団体。						
事業(活動)内容	余暇を利用して自己を鍛え、仲間づくりをはかり、青少年関係団体活動への協力及び地域社会への参加を通じて明るい街づくりに役立つ活動を行うことを目的とする。青少年課事業への協力・参加や、各地区子ども会へ行きゲーム指導を行ったり、リーダーとしての資質向上のため自主的に定例会を行いお互いの意識を高めたりする。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	会の会長を中心に、各活動に対する計画や準備を行っている。行政側は活動する施設の予約や各事業開催中の安全管理等、事務的な分野でサポートを行っている。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	平塚市民部青少年課	青少年	(一部の事業で)				
基本的に会の運営はクラブ生のみで行うが、中・高校生のための施設予約の際に不都合が生じたり連絡が行き届かない事なども考慮し、担当という形で青少年課職員がサポートを行っている。キャンプ等では決定した食材の発注や安全管理、施設の予約やバスの手配、使用料などの金銭的受け渡しを中心に職員が行い、内容に関しては疑問点があったときに一緒に考える程度である。							

分類	内容	地域活動		わくわく冒険隊			
	活動主体	NPO					
参画の段階	6	その理由	子どもが全体的に参画しているが、主体的に取り組む力が不足しているため。				
団体名	わくわく冒険隊	E-Mail	m-yasnet @beige.plala .or.jp	URL	http:// www14.plala.or.jp/tqi-sato/		
代表者名	安川 源通		-	スタッフ	大人4人、子どもリーダー5人(小学校高学年)		
実施時期	通年	参加人数	30～140人	対象	小学生～大人	年齢	6～60歳
他団体・組織との連携	冒険遊び場つくい、津久井町一周山歩き隊	活動資金	今年度については、ニッセイ財団より助成				
趣 旨	身近な自然との体験活動と社会奉仕(森づくり)						
実施することになったきっかけ	子どもたちや町民に身近な自然とのふれあいを持たせたかった。						
事業(活動)内容	津久井町の裏山(中野山)を中心に年間を通じて自然体験活動を行う。また、町民の憩いの場とするため、道標設置やハイキングコースの整備を行っている。						
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	イベント実施の前段で、子どもリーダー会議を3～5回開催して、内容を検討する。また、当日の運営も子どもが中心となる。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	わくわく冒険隊	青少年と大人	～				
企画・準備・運営・片づけの過程の中で、大人が手助けをし過ぎるのに苦労した。森づくりをするための地権者との接触・交渉が難航している。資金不足にするための活動停滞。中高生の参加が少ない。							

< 地域活動 >

分類	内容	地域活動		港南区こどもフォーラム			
	活動主体	青少年健全育成会					
参画の段階	4	その理由	事業の流れは大人が主に決めるため				
団体名	青少年健全育成を推進する会	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	港南区役所 地域振興課		045-847-8395	スタッフ	助言者(区内学校教諭9人、地域から大人9人)		
実施時期	7~10月	参加人数	120人	対象	港南区内小中学生	年齢	10~15歳
他団体・組織との連携	港南区役所共催、区内小学校		活動資金	区からの補助金			
趣 旨	区内の小中学生から構成される委員が企画・運営を行い、子どもと大人の交流ある地域づくりを目指す。						
実施することになったきっかけ	子どもから大人まで心が通い合う区づくりを目指すため						
事業(活動)内容	班ごとに分かれて活動のテーマを決める。 地域活動 まとめ・発表						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	区内の小中学生が運営委員として企画・運営をし、地域でやっていきたいことや大人との協働について主体的に考えていく。大人の助言を得ながら活動を進めていく。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	青少年健全育成を推進する会	大人					
事業計画は事務局(区)が形作りました。事業の具体的内容については、助言者と子どもが力を合わせて企画・運営します。							

分類	内容	地域活動		わくわく冒険隊、ジュニア・シニアクラブ、ユースボランティア			
	活動主体	青少年の団体					
参画の段階	7	その理由	子供達で企画から実行までを行っている。				
団体名	大和ユースクラブ	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	大和市 青少年センター		046-260-5224	スタッフ	大人3人 子ども6人		
実施時期	通年	参加人数	延べ1,457人	対象	わくわく:小5・6、JL/SL:中1~高3、ユ-ボ:高卒年齢以降の青年	年齢	10歳~高校卒業以降(相当)
他団体・組織との連携	大和市青少年指導員連絡協議会、大和市子ども会連絡協議会、大和市母親クラブ連絡協議会		活動資金	市からの委託金 ¥ 1,150,000 ほかに参加者負担(実費)あり			
趣 旨	青少年の成長と発達の特長性及び発達課題を踏まえ、自主性・活動性・協調性を十分に発揮できるようなプログラムを実施することにより、自己決定能力を育成し、リーダーシップ・メンバーシップを実体験の中で学習する機会を提供する。						
実施することになったきっかけ	ユースクラブ発足前は、ジュニアリーダー研修会・青年リーダー研修会といった名称で、年間十数回程度の活動をしてきたが、活動の内容・形態を抜本的に改め、小学5・6年生を含めた組織として「大和ユースクラブ」を組織。当初は小学生・中高生・青年層の各組織は、連携をとりあう別々の組織であったが、平成10年度に3つの組織を一体化。現在に至る。						
事業(活動)内容	レクリエーションゲーム実習、野外活動実習、社会参加事業、ボランティア事業、宿泊研修など なお、ジュニア・シニアクラブはわくわく冒険隊の支援、ユースボランティアはジュニア・シニアクラブの支援も行なう。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	学校や地域・家庭では出来ない活動を、年間を通して参加している子ども達自身が企画・立案・運営・実施を行なった。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	大和ユースクラブ	青少年					
企画から実行までできるだけ子どもたちにやらせることで各種資質を養うとともに、将来の青少年育成指導者の育成発掘をもその狙いとしている。年間を通して積極的に活動を展開しているが、平成10年の発足から6年が経過する中で、近年は行事がマンネリ化しつつあるため、今後は新しい事業展開の模索が早急の課題となっている。							

< ボランティア体験活動 >

分類	内容		ボランティア体験活動		高齢者とのふれあい活動 アニマルセラピー			
	活動主体		高校生					
参画の段階	7		その理由	毎回事前に生徒のミーティングにて話し合いをし、計画を立てて積極的に行っているため				
団体名	日本大学藤沢高等学校生物部		E-Mail	なし	URL <a href="http://www.fujisawa.hs.nihon-u.ac.jp">http:// www.fujisawa.hs.nihon-u.ac.jp</a>			
代表者名	以西 千春		0466-81-0123	スタッフ	大人1人、高校生(生物部)14人			
実施時期	年間約7回		参加人数	65人	対象	老人保健施設 ソフィア横浜	年齢	50~90才(認知症の方)
他団体・組織との連携	特になし		活動資金	部費を一部充当。費用はほとんどかからない。動物の飼育費は除く。				
趣 旨	生物部で飼育している小動物を連れて行き、単調になりがちな施設での生活に動物とふれあうことにより少しでも楽しんでもらおうというボランティア活動							
実施することになったきっかけ	卒業生の父の勤務先で「アニマルセラピー」の依頼を受けたこと							
事業(活動)内容	動物と触れ合うことで認知症の方や高齢者の気持ちが落ち着いたり精神的に安心感を得る「アニマルセラピー」。これを行うために小動物を連れて施設への慰問を行っている。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	事前に施設で行うプログラム(七夕、クリスマス会などのイベント)を計画し、千代紙で製作したりクイズ作りをするなど生徒の案で計画している。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	日本大学藤沢高等学校 生物部		青少年と大人		-		-	
<p>新入生はアニマルセラピーのことを知らずに入学してくるため先輩から後輩へと実践を通じて教わっていく。その中で認知症の方や高齢者と接することが普段ないために、最初戸惑う生徒も多い。回数を重ねるごとに「次回はこうしよう」などと自ら提案するようになり、積極的に取り組むことができるようになった。アニマルセラピーの日程決めや相手との連絡は顧問を通して行っている。生徒の反応も良好で前向きに取り組んでいる。</p>								

分類	内容		ボランティア体験活動		青少年のボランティア体験活動			
	活動主体		社団法人					
参画の段階	6		その理由	主催者(共催・協力を含む)は大人であり、中高生の主体性・自主性を引き出す。				
団体名	(社)神奈川県青少年協会		E-Mail	info@kya.or.jp	URL <a href="http://www.kya.or.jp/">http:// www.kya.or.jp/</a>			
代表者名	理事長 吉村恭二		045-402-0346	スタッフ	大人30人、高校生20人			
実施時期	夏休み3日程度		参加人数	260人	対象	神奈川県内在住・在学	年齢	12~18歳
他団体・組織との連携	厚木市、相模原市、茅ヶ崎市、大和市、各市社会福祉協議会、ボランティアセンター、NPOセンター他		活動資金	参加者負担金(保険料、教材費)、協会事業費(講師料・報告書他)				
趣 旨	自分たちがやりたいボランティアを見つけ、自分たちで連絡を取りながら活動を体験する支援を行う。							
実施することになったきっかけ	身近なところでボランティア体験できる機会がないとの声							
事業(活動)内容	4地区ごとに、「環境保全」「児童保育施設」「動物愛護」等の中から自分がやりたい活動を選び、受け入れ側と連絡を取りながら、3~4日間活動を体験し、報告書をまとめる。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	これまでも社会福祉協議会を中心にボランティア体験事業が実施されていたが、福祉中心であったため、「自分がやりたいボランティアがない」との声を受けて、高校を中心に、どのようなボランティアを体験したいのか、実行委員会を設けて実施している。またすべて大人側で準備・実施するのではなく、受入側団体施設等と中高生に紹介する方式で、自分たちで選び、自分たちで連絡しながら体験する。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	(社)神奈川県青少年協会		青少年と大人		-		-	
<p>青少年自身がどのようなボランティアを体験したいのか、自主性を大切にすること 中学生・高校生を受け入れてもらえる団体・施設等の開拓 ふりかえりを大切に、その後の活動につなげていくこと 実行委員会には過去に参加経験のある若者を入れること</p>								



< イベント >

分類	内容		イベント		わくわくホリデープラン この指止まれ！			
	活動主体		JL					
参画の段階	6		その理由	きっかけは大人が作ったが、企画段階から子どもたちの考えをできる限り取り入れていくようにした。				
団体名	愛川町教育委員会・ジュニアリーダーズクラブ		E-Mail	shogaigakusy@town.aikawa.kanagawa.jp		URL http:// http://www.town.aikawa.kanagawa.jp/		
代表者名	愛川町教育委員会生涯学習課		046-285-2111 内線528	スタッフ	ジュニアリーダー、町職員			
実施時期	年間2回	参加人数	活動内容により決定	対象	町内在住の小中学生	年齢	6～15歳	
他団体・組織との連携	特になし		活動資金	町の委託金(ジュニアリーダーズクラブの活動を青少年指導員連絡協議会に委託)				
趣 旨	子どもたちが自ら計画し、協議し、行動することで、自主性や協調性を養うと同時に、事業をなし終えた成就感を味わい、「生きる力」をつける。							
実施することになったきっかけ	町で実施した学校5日制のアンケート結果より、子どもたちが自ら計画を立てて、みんなと何かしたいという願望があることがわかった。							
事業(活動)内容	町内の公園でハイキング(フィールドアスレチック・レクリエーション)、地球市民かながわプラザ見学、インドカレー調理及び試食会							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	休日における教室やイベントに関するアイデアを子どもたちから募集し、それをもとに、ジュニアリーダーが中心となって活動を企画し、応募者と相談しながら計画し当日の運営もした。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	愛川町教育委員会		青少年と大人					
できるだけ、子どもたちに考えさせることで、主体性を持たせた。プログラムの組み立て方、募集方法・場所の選択、安全面での配慮等、経験不足を補うようにした。								

分類	内容		イベント		あそびっこ隊			
	活動主体		青少年の団体					
参画の段階	7		その理由	周りの大人を巻き込むにいたっていないから。				
団体名	さがみちびっこクラブ		E-Mail	-	URL なし			
代表者名	宮腰 晃裕		042-769-8289 相模原市 青少年課	スタッフ	平均25名(スタッフ7名含む) 高校生～社会人で構成			
実施時期	年間10回(予定)	参加人数	延約60人 (4回まで)	対象	小学生全学年	年齢	6～12歳	
他団体・組織との連携	東京工芸大学 大久保研究室		活動資金	参加費(実費)やクラブの活動資金から物品の購入				
趣 旨	様々な新しい企画を行うことで参加者の興味の幅を広げ、何事にも失敗を恐れず挑戦する精神を養う							
実施することになったきっかけ	私たちの視点を活かした事業をやりたいと考えたから							
事業(活動)内容	高校生～社会人の青年が地域の子どものために実施する若者ならではの事業 第1回「みんなでウォークラリー」 地図を頼りに普段歩いている地域でウォークラリーを行いました。 第2回「集まれ！未来の建築士」 紙とはさみで理想の部屋を作りました。 第3回「どきどき！ちびっこレストラン」 みんなで好きな具材を話し合い、買い物をして、お昼ご飯を作ってもらいました。 第4回「動け！がたがたアニメーション」 デジタルカメラで撮った画像を連続で見ることでアニメのようにして楽しみました。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	企画・準備・実行のすべてを通してちびっこクラブのメンバーで行っています。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	さがみちびっこクラブ		青少年				大人の関与がほぼない	
自分たちの方向性が見えきれていない活動であるため、企画内容・目的が絞れないです。また、大人からの信用が確立できていなかったり、資金面や企画実行場所の確保が困難であったり、スタッフ不足といった様々な問題があり、活動範囲や内容を広げたいと思っても難しいのが現状です。								

< 宿泊体験 >

分類	内容		宿泊体験		中学生とのつどい			
	活動主体		青指協					
参画の段階	6		その理由	プログラムの一部のみを担当させたことで、無理な負担もなく、ジュニアリーダーと十分な話し合いもでき、終了後の反省会では、双方に達成感が感じられた。				
団体名	箱根町青少年指導員連絡協議会	E-Mail	なし	URL	なし			
代表者名	会長 加藤修司		0460-5-7601	スタッフ	青少年指導員17人、リーダースクール受講生7人			
実施時期	平成16年3月28日～29日 1泊2日	参加人数	参加人数 36人 (指導員17人、 中学1年生10人、 ジュニア7人)	対象	中学1年生	年齢	13歳	
他団体・組織との連携	青少年指導員連・協委託金のほか、参加者から、参加費(食費、保険料など)を徴収している。		活動資金	青少年指導員連・協委託金のほか、参加者から、参加費(食費、保険料など)を徴収している。				
趣 旨	趣旨:1泊2日の宿泊生活を通じて、楽しく過ごすために守らなければならないルールや、助け合い、協力し合うことの大切さを、青少年指導員と一緒に話し合い、考える。							
実施することになったきっかけ	実施することになったきっかけ:青少年指導員が、中学生と本音で話し合える場をもちたいという思いから							
事業(活動)内容	県立足柄ふれあいの村(南足柄市)を会場とした、1泊2日の宿泊体験事業。青少年指導員(とジュニアリーダー)と、中学生と一緒にあって、ハイキングや炊事、レクリエーションゲームなどを行うもの。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	青少年指導員連絡協議会での当初の話し合いの中では、1泊2日のすべてのプログラムをジュニアリーダーに計画させ、青少年指導員がサポートしながら事業を運営することを、リーダースクールのカリキュラムに位置づけていたものであるが、リーダースクールの進行が遅れてしまい、結局、プログラムの中のレクリエーションゲームの部分のみを、ジュニアリーダーと青少年指導員とで話し合い、実際の運営を担当させた。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	箱根町青少年指導員連絡協議会		青少年と大人					
今回の事業(プログラムの企画・運営)に参加したジュニアリーダーは、過去に全員が、この事業に参加した経験があったことから、事業の目的や内容の説明はある程度省略し、「自分だったらこうしたい」という話し合いに終始できた。基本的には、「1時間30分の時間をどのように中学生と過すか」に重点をおき、企画・運営をジュニアリーダーにすべて任せ、青少年指導員は、時間の管理や会場内の安全確保に努め、声小さくなった時や“間”が悪い時などに、サポートするに留まった。								

分類	内容		宿泊体験		自然ふれあい教室			
	活動主体		実行委員会					
参画の段階	8		その理由	実行委員が率先してやってくれた。実行委員一人ひとりが自覚をしっかりと持ち参加者を引っ張っており、参加者はもちろんの事、実行委員もこの事業を通して絆が深まった。				
団体名	自然ふれあい教室実行委員会	E-Mail	youth@cityfujisawa.ne.jp	URL	http://www.cityfujisawa.ne.jp/~youth			
代表者名	(財)藤沢市青少年協会		0466-25-5215	スタッフ	-			
実施時期	1月10～12日(2泊3日)	参加人数	40人	対象	藤沢市内在学・在住の小学5,6年生	年齢	11～12歳	
他団体・組織との連携	後援として藤沢市教育委員会		活動資金	委託費 765,000円				
趣 旨	雪の冷たさ、柔らかさを感じ雪をおとして自然への体験をし子どもたちに理解してもらおう。また、様々な活動をおとして、主体性・自主性を育み、仲間とのふれあいを深めながら、人とのつながりを感じることを目的としている。							
実施することになったきっかけ	藤沢では体験のできない自然の中で活動をさせたかった。							
事業(活動)内容	藤沢市内の小学校に募集をかけ、約230人の中から実行委員会にて選考を行い、選ばれた40人が参加できる。2泊とも長野県のハヶ岳野外体験教室で1日目は体験教室から少し離れたグラウンドで雪上フラッグなどの運動会を行ない、2日目はハヶ岳の上の方にある美鈴池までハイキングのあと凍った池の上で遊んだり、ソリ遊びを行い、夜にはナイトウォークを行なった。3日目は宿泊施設内の清掃や3日間のふりかえりなどをし終了した。							
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	企画運営、安全面、体調管理の事などを職員と一緒に考えた。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	(財)藤沢市青少年協会		青少年と大人					
冬の雪山ということもあり、安全面の確保が最大のポイントであったため、そのことを全実行委員が認識するように心がけた。また、会議を行っている最中に議題からはずれてしまったりした場合には職員が関わり、誘導した。								

< 体験活動 >

分類	体験活動		よこはまこどもマリンスクール			
	内容	活動主体	社団法人			
参画の段階	4		その理由	大人が主催者であり、なおかつ、計画は大人側で作成されており、子ども(リーダー)は当日の割り当てられた役割の中での活動となるから。		
団体名	(社)横浜市レクリエーション協会	E-Mail	hamarec@m18.apha-net.ne.jp	URL <a href="http://www.hamaspo.com/rec/">http:// www.hamaspo.com/rec/</a>		
代表者名	(社)横浜市レクリエーション協会		045-671-5050	スタッフ	大人38人、大学生34人	
実施時期	通年	参加人数	248人(大人38,大学生34,児童176)	対象	市内小学校4~6年生	年齢 9~12歳
他団体・組織との連携	横浜市水泳協会,帆船日本丸記念財団,野島青少年研修センター,南伊豆臨海学園,子ども自然公園野外活動センター,三ツ沢公園青少年野外活動センター		活動資金	(社)横浜市レクリエーション協会への委託金(15年度 6,650,000円、16年度 6,615,000円)及び利用者負担金一人あたり65,000円		
趣 旨	日本丸や南伊豆臨海学園などの海に関する施設を活用し、海事思想の普及と青少年の健全育成を図る。					
実施することになったきっかけ	帆船日本丸の横浜誘致を契機として、21世紀を担うたくましい「はまっこ」を育てること目的として始まった。					
事業(活動)内容	1年単位のプログラムに沿って、月1~2回の活動を実施(日帰り13日、宿泊11日の計24日):平成16年のプログラム...6月 開校式(オリエンテーション等)及び野島合宿訓練(班別編成、友達作り、手旗訓練等) 7月 日本丸海洋教室 (甲板みがき、カッター訓練、講義、操帆訓練、結索訓練) 8月 水泳教室(自然教室に向けた水泳訓練)及び南伊豆自然教室(海や自然に関する勉強、カッター訓練、遠泳訓練、いかだ作り、ハイキング、キャンプファイヤー、ナイトハイク) 9~2月 定例会(甲板みがき、手旗訓練、ロープワーク他、各月ごとに水中運動会、炊飯訓練、餅つき、ウォークラリー等) 3月 日本丸海洋教室 (甲板みがき、手旗訓練、カッターレース、運動会等)及び閉校式					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	毎年、大幅なプログラムの変更がないため、細かい修正を大人が行う。小学生は8班に分割され、各班にリーダーと呼ばれる大学生を配置して各事業を実施している。つまり、計画段階では、リーダーの参加はないが、活動当日はリーダーが中心となって小学生と接しながら、事業を実施している。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案	大人の関わり		その他
	横浜市教育委員会		大人			
	プログラム自体がほぼ完成している事業のため、各リーダーには基本的にプログラムから外れることがないが、大人から修正を求めることはないが、アドバイスや助言は適宜行い、リーダーのモチベーションの維持向上に努めた。原則的に資金や会場を含めた計画づくり、当日の健康管理(救護等)、安全管理が大人の役割となっている。					

分類	体験活動		子ども会活性化事業「うどん作りを体験しよう」			
	内容	活動主体	子ども会			
参画の段階	6		その理由	あくまでも子どもたちが主役で、企画段階から考え、大人は活動のサポートに徹したから。		
団体名	小金原単位子ども会育成会	E-Mail	なし	URL なし		
代表者名	木村 陽子	Tel	046-250-0241	スタッフ	-	
実施時期	夏休み	参加人数	40人	対象	小鮎小学校区 小金原子ども会会員1~6年生	年齢 6~12歳
他団体・組織との連携	厚木市立七沢自然教室		活動資金	市からの交付金 16,000円(小学校区単位子ども会活性化事業)		
趣 旨	子どもたち自らが計画・立案した事業を具体化させ、本来の子ども会活動の楽しさや、地域でのコミュニケーションを図り、生きる力を育む。					
実施することになったきっかけ	何が物づくりをしてみたいという声					
事業(活動)内容	七沢自然教室において、うどん作りや森林ゲーム等を行う。					
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	うどん作りの企画、グループ分け、ゲーム等レクリエーションの企画を、子どもたちが中心となり考えた。					
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案	大人の関わり		その他
	小金原単位子ども会育成会		青少年			
	実際のうどん作りの作業は子どもたちに任せるように心がけたが、計画や準備で大人が御膳立てしてしまった部分があり、もう少し子どもたちが中心的に活動ができるよう環境づくりが必要であると思う。					

< その他 >

分類	内容		冒険遊び場		冒険遊び場つくいの遊びの日						
	活動主体		NPO								
参画の段階	6		その理由	大人が遊びや遊びの道具・材料を用意するが、どの遊びをするかは子どもたちが選んでいる。							
団体名	冒険遊び場つくい		E-Mail	kotaryu2@ybb.ne.jp		URL			http://www14.plala.or.jp/tqi-sato/		
代表者名	稲田浩一				-	スタッフ	6人				
実施時期	第2・3土曜日		参加人数	スタッフ6人 子ども20人程度		対象	小学生以上(未就学児は保護者同伴)		年齢	主に小学生(未就学児は保護者同伴)	
他団体・組織との連携	わくわく冒険隊と交流あり、中野小PTAサークルのひとつ				活動資金	ろうきんの助成金 年間30万円					
趣 旨	大人も子ども自然の中でのびのびと遊ぶ。										
実施することになったきっかけ	子どもたちが外で遊んでいない。ゲームばかりやっている。										
事業(活動)内容	自然の中(津久井湖城山公園根小屋地区)で自由に遊べる場所を設定していっしょに遊ぶ。木の幹にブランコを設置したり(滑車ロープ、ハンモックなども)木工具、スコープ、ロープなどを用意したりしている。										
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	子どもたち(主に小学生)は当日遊びに来て自由に遊ぶ。前もって計画などはしていない。特に参画しているというわけではない。当日は子ども主体で好きにやっている(青少年は参画していない。少年は来るが。)										
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催			企画・立案		大人の関わり			その他		
	冒険遊び場つくい			大人							
大人(スタッフ)は、遊び場を探し、遊びの道具や材料を調達するための資金を見つけ、遊びの日のお知らせを出す。子どもたちの遊びに、基本的には口を出さず手助けする。危険な状況になれば、注意をする。											

分類	内容		広場あそび		あそぼう会						
	活動主体		青少年グループ								
参画の段階	8		その理由	より良い活動とするために地域の大人として、また参加させる親として意見を求められたり協力を依頼された。大人も一緒に遊びに参加した。							
団体名	特定非営利活動法人松戸子ども劇場		E-Mail	mkg@cside5.jp		URL			http://mkg.cside5.jp		
代表者名	渡辺 洋子		047-386-9154		スタッフ	青年10人、高校生8人					
実施時期	平成15年4月～16年7月まで		参加人数	延べ350人		対象	小学生		年齢	6～20歳代	
他団体・組織との連携			なし		活動資金	ちば市民活動サポートクラブ「一歩くん基金」助成金25万円を、スタッフ交通費、広報宣伝費とした。					
趣 旨	小学生から20代の若者が、異年齢集団となって市内の公園で身体を使って遊ぶ楽しさを味わう。また、地域の縦のつながりが生まれ、安心した街づくりにつながる。										
実施することになったきっかけ	小さい頃に年上のお兄さんお姉さんと遊んでもらった経験のある若者が、近頃公園で子どもの姿を見かけなくなって、一緒に遊びたいと提案。										
事業(活動)内容	毎月第3土曜日午後2時～4時30分まで、市内の公園でゲームリーダーの中学生・高校生・青年が、遊びに来た小学生とともに「だるまさんがころんだ」「しっぽとり」「手つなぎ鬼」などルール簡単な身体を使った遊びをする。										
青少年がどのように参画して事業活動を進めたか	実施するきっかけから、その後の広報活動、活動資金の調達、当日の遊びのプログラム、安全面の配慮など当会の青年理事を中心に大人も協力しながら行った。										
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催			企画・立案		大人の関わり			その他		
	松戸子ども劇場			青少年							
近隣の小学校やPTAとつながりのある大人の協力を得て広報・宣伝を行った。安全管理の面では、青少年でつくる実行委員会に対し大人も意見を出し、一緒に決定した。											

< その他 >

分類	内容		ナイトウォーク		ナイト・ウォーク2003			
	活動主体		シニア・リーダー					
参画の段階	7		その理由	すべてにおいて青少年が運営している。				
団体名	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen				
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1723	スタッフ	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ会員			
実施時期	平成15年8月	参加人数	14人	対象	学生、社会人	年齢	18～30歳	
他団体・組織との連携			なし	活動資金	クラブの予算			
趣 旨	普段外出することのない時間帯に歩き、話をしながらたくさんの仲間を作る。							
実施することになったきっかけ	企画運営技術のレベルアップを図る。							
事業(活動)内容	例年は、参加者を一般から募集し、グループ分けし、市内約20キロのコースを歩く。途中、休憩ポイントで小さなイベントを行う。ただし、この年は台風の襲来で中止となり、後日、クラブの会員だけで予定したコースを歩いた。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	コース設定、イベントの企画などすべてにおいて青少年によって運営されている。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ		青少年					
夜間のため、近隣への迷惑行為の防止、交通事故防止等に大人が関わっている。								

分類	内容		レクゲーム		ふれあいレクリエーション			
	活動主体		子ども会					
参画の段階	6		その理由	企画等については、ジュニアリーダーが中心となり進めたが、大人と相談しながら最終的に決定したから。				
団体名	愛川町子ども会連絡協議会、愛川町教育委員会、愛川町老人クラブ連合会	E-Mail	shogaigakusyu@town.aikawa.kanagawa.jp	URL http:// www.town.aikawa.kanagawa.jp/				
代表者名	愛川町教育委員会 生涯学習課		046-285-2111 内線528	スタッフ	子ども、ジュニアリーダー、老人会・子ども会役員			
実施時期	平成15年11月	参加人数	1,904人	対象	町内在住の小学生、老人(老人クラブ加入者他)	年齢	6～75歳	
他団体・組織との連携			-	活動資金	町の交流事業委託料及び各地区負担金			
趣 旨	小学校区児童と高齢者を対象に、レクリエーションやゲームを楽しみ、子ども相互の親睦と高齢者とのふれあいを図り、地域づくりの一助とする。							
実施することになったきっかけ	子ども会、老人会それぞれの活動だけでなく、これを地域全体に広げ幅広い交流とふれあいを図り地域づくりの一助とする。							
事業(活動)内容	各小学校区ごとに子どもと老人が一緒となってレクリエーションやゲームを実施(こま回し、竹とんぼづくり、ペットボトルボーリング、パルーンアート、フリスビー作り、牛乳パッククラフト、輪投げ、くつ飛ばし、玉入れ、ウルトラクイズ、吹き矢、割り箸鉄砲)							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	ジュニアリーダーが中心となり、活動内容の事前の話し合いが行われ、当日も積極的な進行を行い行事を盛り上げた。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	愛川町子ども会連絡協議会、愛川町教育委員会、愛川町老人クラブ連合会		青少年と大人					
単位子ども会加入者のみならず各小学校区ごとの生徒全員を対象としたことに大きな活動の意味を見いだすことができた。参加者が増えることはよいが、その分各地区の負担割合が多くなってしまふ。								

分類	内容	きもだめし		きもだめし大会			
	活動主体	育成会					
参画の段階	6	その理由	子どもと大人で作っている事業であるから				
団体名	善行地区 青少年育成協力会	E-Mail	なし	URL なし			
代表者名	善行公民館		0466-81-4331	スタッフ	-		
実施時期	7月16日	参加人数	340人	対象	小学生(参加者)、中学生 (おばけ・手伝いスタッフ)	年齢	13~15歳
他団体・組織との連携	大越小、善行小、善行中PT A、三者ふれあいネットワーク		活動資金	参加者から300円の負担(カレー代)、三者ふれあいネットワークより30,000円、青少協より62,917円			
趣 旨	地域の活動参加が少なく中学生のおばけを中心にして、地域と学校が協力し、仲間づくりや善行の自然の豊かさを体験する。						
実施することになったきっかけ	地域活動に小中学生の参加を求める。						
事業(活動)内容	善行小学校及び石川東地区一帯を使ったきもだめし大会。参加者は小学生、中学生はおばけ役及び運営の手伝いスタッフ。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	おばけ役は材料費2,000円以内で衣装等をそろえ企画した。又、手伝いスタッフは受付及び小学生の引率をした。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	善行地区青少年育成協力会	大人					
「おばけ」については企画案を提出させ、それに対して賞を与えた。又、参加小学生には歩いて怖かった「おばけ」を選出させ、1位、2位、3位のおばけに賞状・記念品を与えた。苦勞した点は、子どもたちの健康面及び安全面(参加小学生の終了後の親の引き取り)。							

分類	内容	演劇		教育を守る会50周年記念事業			
	活動主体	NPO					
参画の段階	6と7の間	その理由	予算がかなり必要だったこと、見せる対象が子どもと大人だったこと。				
団体名	神奈川県教育を守る会	E-Mail	-	URL なし			
代表者名	浅見 聡		045-241-3531	スタッフ	-		
実施時期	平成16年6月26日	参加人数	250人	対象	会員、市民・子どもたち	年齢	12~70歳
他団体・組織との連携	教職員を中心とした合唱団、障害者のグループ、外国籍の子等		活動資金	県教育を守る会、支部教育を守る会他支援金寄付・チケット代など合わせて50万、子ども達の交通費、出演者の謝礼、会場費などに使用			
趣 旨	教育を守る会の50周年を祝うと共にこれからの教育を子ども達と考える。						
実施することになったきっかけ	50周年という節目を迎えた。						
事業(活動)内容	横須賀支部の子ども達が、子ども会議を6年間積み重ねてきた。その成果を構成劇という形式で発表、関連団体のステージと主催・来賓のあいさつも交えた。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	中・高校生が「子どもの権利条約」を作りたいと考えるに至ったことを、自分自身の言葉で劇に取り入れたり、メッセージとして発表した。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	神奈川県教育を守る会	青少年と大人	~		構成劇は脚本として大人がまとめた発言などは子ども自身の言葉		
子ども達は劇やダンスが好きで集まった子ども達ではなかったため、はじめの内はとまどいがあった。脚本が制作されても訂正を申し込まれたりし、自分達の納得するものにしていった。しかし、12人の時間を作るのが非常に難しく、30日以上もの練習の中で全員そろったのがわずか、大人との葛藤もあり、両者が最後に分かり合えたことがすばらしかった。							

< その他 >

分類	内容		人形劇		子ども人形劇団			
	活動主体		実行委員会					
参画の段階	6		その理由	人形作成、舞台公演を子どもたちが行っている。大人はサポートの立場。				
団体名	子ども人形劇団 実行委員会	E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL <a href="http://www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen">http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen</a>				
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1736	スタッフ	子ども人形劇団実行委員会			
実施時期	平成15年8月	参加人数	20人	対象	小学3年～中学3年生	年齢	8～15歳	
他団体・組織との連携	市内アマチュア人形劇団		活動資金	市からの謝礼(年間35,000円)				
趣 旨	人形製作から舞台発表までを子ども自身の手で行うことにより、自主性・創造性・社会性を育む。							
実施することになったきっかけ	「にんぎょうげきじょう」という人形劇を鑑賞する催しを長年開催しているが、それを見に来た子ども達の人形に興味を持ち自ら出演したいという声が多くなったため。							
事業(活動)内容	夏休み明けから人形制作に取り組み、完成後舞台練習を行い、2月に行われた「きらめき子どもフェスタ」にて旗揚げ公演を行った。その後、4回の公演を行った。(市主催のフェスティバル、市外からの依頼他) 16年度も新たに劇団員を募集し、新たな脚本に取り組んでいる。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	脚本決め、人形制作、舞台公演を行った。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	子ども人形劇団実行委員会		大人					
人形制作、舞台練習での実技指導は、実行委員会(大人)が行った。 会場確保、日程調整、広報周知等は教育委員会が行った。								

分類	内容		ライブ		ライブ in 山北			
	活動主体		実行委員					
参画の段階	6		その理由	機会を大人が提供し、高校生が高校生らしい発想で運営、実施し、重要なポイントの時は大人が指導する。				
団体名	ライブ in 山北 実行委員会	E-Mail	なし	URL なし				
代表者名	山北町青少年指導員協議会		0465-75-3649 山北町教育委員会 生涯学習課	スタッフ	高校生13人、青少年指導員2人、計15人			
実施時期	12月	参加人数	37人(高校生)	対象	足柄上地区高校生	年齢	16～18歳	
他団体・組織との連携	山北町青少年指導員協議会		活動資金	-				
趣 旨	青少年に活動と交流の場を提供するとともに、地域の人々とのふれあいを深め、青少年の健全育成を推進することを目的とする。							
実施することになったきっかけ	特になし							
事業(活動)内容	山北町中央公民館でライブコンサートを実施。							
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	出演順序、会場関係、ライティング等高校生が考え、大人の意見を聞き、業者と打ち合わせを行う。							
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催		企画・立案		大人の関わり		その他	
	山北町青少年指導員協議会		青少年と大人					
高校生のみならず、大人の人にも観てもらえるようにするのが課題である。								

< その他 >

分類	内容	講座		ヒラツカ・ユース・カルチャー・サークル			
	活動主体	青少年の団体					
参画の段階	6	その理由	青少年課企画の講座のため、大筋は青少年課で方向性を示し、その中でメンバーがいるいと決定するため				
団体名	ヒラツカ・ユース・カルチャー・サークル	E-Mail	なし	URL	なし		
代表者名	H16年度代表 横山 篤正		0463-32-7029 平塚市市民部 青少年課	スタッフ	メンバー内で代表・副代表 各種実行委員を決めて運営している。		
実施時期	5月～2月までの 原則毎週木曜日	参加人数	今年度 37人	対象	市内在住・在勤 (高校生は除く)の男女	年齢	18～30歳
他団体・組織との連携	平塚市青少年課		活動資金	平塚市からの委託料及び講座内容により材料費実費負担			
趣 旨	青年が共同学習を通じて、現代社会に対応できる知識や技術の習得と価値観の向上を図ることにより、相互の連帯を深め、自己啓発及び生涯学習への意欲を高揚させる。また、想像力と行動力を持った人材を育成し、積極的な社会参加のきっかけを作る。						
実施することになったきっかけ	同上(昭和40年に青年教室として始まり、いくつかの学級を開設していたが、平成4年に現在の名称に変更し、現在1つのコースを開設している。)						
事業(活動)内容	原則5月～2月までの毎週木曜の19:00～21:00に青少年会館を利用して活動を行う。参加費は原則無料だが、講座内容によっては実費負担とする。学習内容は文化・教養講座としてテーマを大筋で決め、そのテーマに沿った様々な分野の内容を学習するもの、サークルで学習したことなどを活かして野外活動・ボランティア活動・イベント企画をするもの、年間活動のまとめとして文集を作るなどがあげられる。あと、所定のプログラム以外で自主的に企画活動すること、各種講座・研修の情報提供などを勤めている。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	メンバーの自主性を図るため、定期的に話し合いの場を設けている。 またメンバーの中から代表・副代表を選出し、必要に応じて各種実行委員会を設置し、委員のメンバーが中心になって活動を企画・実施してもらう。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	ヒラツカ・ユース・カルチャー・サークル	青少年と大人					
	対象が青年(18歳～30歳)なので、大人との関わりというより、職員との関わりということになる。上記「事業活動(内容)」、「青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか」に記したとおり、原則として講座の講師依頼、会場準備等は職員が行うが、講座内容の希望や各大きいイベント的なことは、メンバー内の委員が計画進行していく。						

分類	内容	国際理解		国際シンポジウム			
	活動主体	シニア・リーダー					
参画の段階	6	その理由	企画、立案、運営について青少年がすべて行っている。				
団体名	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL	http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen		
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1723	スタッフ	-		
実施時期	平成16年2月	参加人数	16人	対象	一般	年齢	中学生以上
他団体・組織との連携	小田原市		活動資金	クラブの予算			
趣 旨	青年海外協力隊の方の講話を聞くことにより、国際交流を図る。						
実施することになったきっかけ	市主催の他行事への参加						
事業(活動)内容	市主催による「地球市民フェスタ」に参加する形で、青年海外協力隊で活躍し、帰国した方を講師に招き、講話をしてもらう。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	企画、立案、運営について青少年がすべて行っている。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり		その他		
	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	青少年					
	講師に依頼するときに支援をする。						



< その他 >

分類	内容	活動発表会		青少年と育成者のつどい			
	活動主体	行政					
参画の段階	4	その理由	大人が役割を割り振りし、青少年はそれに従う。				
団体名	青少年問題協議会・教育委員会	E-Mail	seisho@city.odawara.kanagawa.jp	URL <a href="http://www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen">http:// www.city.odawara.kanagawa.jp/seishonen</a>			
代表者名	小田原市教育委員会 青少年課		0465-33-1723	スタッフ	市教育委員会		
実施時期	平成15年12月	参加人数	234人	対象	中学生、青少年指導者	年齢	中学生以上
他団体・組織との連携	小田原市青少年指導員協議会		活動資金	小田原市			
趣 旨	青少年に対する市民の関心と理解を深め、青少年、育成者相互の連携を深める。						
実施することになったきっかけ	市内の青少年と青少年関係者が一堂に会す機会を作る。						
事業(活動)内容	第1部 善行青少年等表彰 善行少年・青年及び優良青少年団体並びに青少年の育成に貢献した者を表彰する。 第2部 中学生の主張発表 中学生が日頃、日常生活や学校生活あるいは団体活動を通して考えていることや感じていることを発表し、広く市民に訴える。						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	市内の中学生から作文を募集し、その中から各校代表1人が中学生の主張発表の場で発表する。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり	その他			
	小田原市教育委員会	大人		準備、運営はすべて大人が行う。			
青少年は、中学生の主張発表の司会と発表を行う。							

分類	内容	子どもの遊び		あそびの学校			
	活動主体	青少年グループ					
参画の段階	7	その理由	活動のほとんどが団体による自主運営である。				
団体名	あそびの学校運営委員会	E-Mail	seisyonen-center@city.sagamihara.kanagawa.jp	URL <a href="http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/homepage/801904/ylc/index.html">http:// www.city.sagamihara.kanagawa.jp/homepage/801904/ylc/index.html</a>			
代表者名	片野寿一		042-751-0091 相模原市青少年学習センター	スタッフ	土曜にこにこクラブ、青山子ども会、シニアリーダーズ・クラブ		
実施時期	毎月第4日曜日	参加人数	30人前後	対象	小学生	年齢	6~12歳
他団体・組織との連携	特になし		活動資金	事務的消耗品は行政が、材料費は参加者が自己負担			
趣 旨	子どもたちに開放的で自由なあそびの場を提供し、あそびを通して自ら楽しみを作り出しながら、仲間づくりや子ども同士のつながりを深める機会づくりとします。						
実施することになったきっかけ	学校週5日制実施に伴う子ども達の交流の場所づくり						
事業(活動)内容	複数の青年ボランティア団体の手による、体験型の遊びを通じた仲間づくりや子ども同士のつながりを深める場 毎月1回 クラフトやゲーム、科学実験や焼き芋、スポーツなど幅広いジャンルのあそびを実施						
青少年がどのように参画して事業・活動を進めたか	(事業実施団体の活動のほかに)3団体の代表者が集まり、年4回会合を開いて「あそびの学校」のあり方や方向性、今後の計画について話し合っている。実際の活動は運営委員会内の3団体が順番に事業を担当する。団体が合同で企画・実施することもある。						
事業・活動に関わった大人が、青少年とどのように関わり、支援したか	主 催	企画・立案	大人の関わり	その他			
	相模原市青少年学習センター	青少年と大人	団体内にいる大人や青少年学習センター職員が指導・助言を行っている。				
現在は、3団体による運営だが、今後は事業に関心のある個人や団体を発掘・募集・育成をして、事業の拡大や多様な人材の確保につなげたい。							

# 資 料

## かながわ青少年支援・指導者育成指針

神奈川県青少年指導者養成協議会

県・市町村・青少年関係団体で構成する神奈川県青少年指導者養成協議会は、青少年指導者の養成及び確保を、県・市町村及び青少年関係団体等の共通理解による連・携のもとに、円滑に推進することを目的としてきました。

近年の社会状況の変化などによる青少年自身と青少年をめぐる状況の変化に伴い、指導的関わり方だけでは現代の青少年への対応は不十分であり、青少年の社会的自立を促進するためには支援する形での関わり方ができる大人・若者の育成も必要になってきました。そういった青少年指導者養成をめぐる環境の変化に、より効果的に対応するために『かながわ青少年指導者養成総合計画（指針）』を改定し、『かながわ青少年支援・指導者育成指針』を平成16年度より適用しました。

## 児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）

この条約は、1989年に成立して、1994年に日本は批准しました。それによって、憲法と同等の上位法となっているので、これに基づいた施策が要請されています。

この条約の第12条にある「意見表明権」は、「子どもの参画」という考え方の基本になっています。

## 『かながわ青少年支援指導者育成指針』

この『指針』は、青少年が自立した大人になることを願って、その支援にあたる青少年支援・指導者の育成を推進するために、県・市町村及び青少年関係団体が役割分担のもとに実施する青少年支援・指導者育成施策の指針とするものです。

### 第 章 青少年支援・指導者育成の基本的考え方

#### 1 青少年育成の視点

青少年を育成するにあたり、「多様な体験学習の促進」「主体的な参画の促進」「社会的自立の支援」という三本の柱を視点とした。

##### (1) 多様な体験学習の促進

社会環境の変化・ライフスタイルの多様化・高度情報化など、社会の変化が激しい現代から未来を生きていくためには、「生きぬく力」と「共感する心」を青少年自らが育む必要がある。そのためには青少年に対して地域社会の中で、情報化社会の中で、自然の中で発達段階に応じた多様な「体験活動」を提供することが必要である。さらに重要なことはその体験をもとに気づき、考える力を養い、自ら行動することができるようになる学習方法としての「体験学習」を促進していくことである。

青少年は体験学習によって、現代社会で生きていくための問題解決能力・自己決定能力・情報の取捨選択能力を身につけていくことができ、また合わせて、他者や自分と異なったものを尊重する心、美しいものや自然を見て感動する心や感性、そして生命を大切にすることを養うこともできる。

##### (2) 主体的な参画の促進

青少年は自らの意見を表明する権利を持ち、その発達段階に応じて参画する能力があり、参画の意思を持っている。この『子どもの参画』という考え方に基づいて、社会を担う一員として青少年を捉え、地域活動などへの青少年の主体的な

参画を促進していくことが重要になる。

青少年の主体的な参画を促進することで、地域社会で自分が大切にされているという意識が青少年に芽生え、地域社会を居場所と感じるようになる。また自ら問題を見つけ出し、それを解決する力を身につけることができるようになる。そして最も大切なことは地域社会で民主主義のプロセスを実践し学ぶことができるということである。

### (3) 社会的自立の支援

青少年が今を充実して生きると同時に未来を見据えることができるようにし、将来に向けての社会的自立を支援する取り組みが求められている。

青少年は日常生活に支障のない環境にある者から家庭や心身の状況などによりスタートラインにおいて既に不利な状況下にある者まで、様々な環境に置かれている。これらすべての青少年を受け身でなく自ら積極的に他に働きかけることができる存在として捉えることによって、主体性・社会性を持ち自己実現を図れる大人へと成長できるように支援していく必要がある。

## 2 青少年支援・指導者育成の視点

青少年支援・指導者を育成するにあたり、「指導から支援・指導へ」「若者の特性を活かす」「多様な支援・指導の関わり」という三本の柱を視点とした。

### (1) 指導から支援・指導へ

青少年をめぐる社会環境の変化の中で、青少年の社会的自立を促進するためには、指導的な関わり方だけではなく、子ども・若者の持っている能力を引き出すための支援も必要になってきている。ここでいう「支援」とは、例えば青少年の主体性を引き出すファシリテーター役、青少年の悩みを聞いたり、相談を受けたりするカウンセラー役、青少年活動を運営していく際に必要な関係機関等との調整役等を演じたり、青少年に寄り添い一緒に考えるような関わり方のことである。

この「支援」を鮮明にし、指導から支援・指導の方向を明確に位置づけていくことが重要である。なお、「指導」とは方向性を指し示し、教え導くような関わり方のことで、例えば指導者とは登山などの野外活動においてグループをまとめ、安全に目的を遂行できるように導くような役割のことを言う。

## (2) 若者の特性を活かす

子どもたちにとって身近な世代の若者、すなわち小学生に対する中高生年齢、中高生に対する大学生年齢の若者は、子どもと無理のない関わりを保つことができる。若者はこの特性を活かし、子どもの考え・意見・能力を引き出す役割を担うのに相応しい存在になり得るとともに、子どもと大人の架け橋の役割を果たしていける。

また、グループで活動している場合などに、子どもたちでは判断できない場面で、若者がリーダーとしての役割を果たすことも必要であり、こうしたリーダー的な体験を重ねることで、社会へ出たときに組織や団体の中でリーダーとして主体的に関わっていくための基礎ができる。

こうしたことから多くの若者を青少年支援・指導者として人材育成していくことが望まれる。

## (3) 多様な支援・指導の関わり

様々な状況下に置かれている青少年への関わり方は一様ではなく、青少年それぞれの個性にも対応していく必要がある。そのためには青少年支援・指導者も多様な関わり方を身につけなければならない。

また子ども・若者に関わる活動、若者自身が主体的に展開している活動、子ども・若者の参画による地域活動などで、関わっている大人・若者が一人ですべての役割を果たすのではなく、関わっている大人・若者それぞれの得意な分野・能力を活かして役割を分担し、支援・指導をしていく方が多様な子ども・若者の活動に対応することが可能となる。

このような視点で、大人・若者が、多様な関わり方を学び、得意な分野を磨き、さらに活動分野を広げることで、青少年の社会的自立をより望ましい形で支援することができる。

## 第 章 青少年支援・指導者育成への取り組みと役割分担

### 1 取り組みの方向

#### (1) 人材育成

様々な状況下にある青少年を社会的に自立させるための支援・指導を行う多様な人材を育成していかなければならない。そのための研修方法・内容を考え実施していく。

##### ア 技術・能力の向上を図る研修体系の充実

入門的講座やフォローアップ研修等、青少年支援・指導者の経験年数や実績に応じた研修体系を組み、実施することにより、それぞれの青少年支援・指導者に必要な知識・技能を習得できるようにする。

##### イ 効果的な青少年支援・指導者育成研修の開発と普及

青少年支援・指導者が活動を展開していく上で、必要な知識の習得や技術・能力を向上させるための研修を充実させるために、研修プログラム・展開方法を研究し開発普及を図る。

#### (2) 活動支援

青少年支援・指導者（団体及び個人）に対し、青少年活動を展開する上で必要な活動支援を行う。

##### ア 情報収集・提供等

青少年支援・指導者（団体及び個人）が青少年活動を展開する上で必要な情報の収集・提供、青少年活動の場の提供等を行う。

##### イ 活動しやすい環境づくり

青少年支援・指導者が青少年活動を活発に展開できるように社会の理解を深めることが必要である。そのためには青少年活動が青少年の社会的自立を促進しているということが社会的に認知されることが重要である。こうした青少年活動に対し理解と協力が得られるような広報、啓発に積極的に取り組む。

#### (3) 連携・調整

(1)人材育成、(2)活動支援を円滑に進めるために、県・市町村・青少年関係団体等が連携・調整を図る。

##### ア 人材育成の面

### (ア) 裾野の拡大

県・市町村・青少年関係団体の役割分担及び連携による青少年支援・指導者の育成を行う。また青少年支援・指導者の裾野の拡大を行う。

#### (イ) 学校教育機関への情報提供

より有効な青少年育成が行われるようにするため、学校教育機関に対して、県・市町村・青少年関係団体の行っている青少年支援・指導者の育成体系及びこれらで把握している青少年支援・指導者に関する情報提供を行う。

#### イ 活動支援の面

県・市町村・青少年関係団体は研修修了者や実際に活動している青少年支援・指導者から活動の場や講師などについて情報を求められた場合、相互に連携・調整することで、青少年活動の場の紹介・提供等について積極的に支援していく。

研修修了者の活動の場としては、従来の地域活動に加え、地域の学校と連携を図ることで活動の場として学校を活用する方法も考える。

## 2 役割分担

地方分権の趣旨などを踏まえ、県・市町村・青少年関係団体の役割分担は別表「青少年支援・指導者育成の役割分担」(P.104)の通りとする。

別表 青少年支援・指導者育成の役割分担

実施主体	県	市町村	青少年関係団体
特性	広域性	地域性	独自性
役割の概要 取り組み	市町村・青少年関係団体の取り組みを支える視点で、広域性を活かした青少年支援・指導者の人材育成事業を主に展開する。	青少年関係団体や支援・指導者の活動を支える視点で、地域性を活かして地域の特性やニーズに応えられるようより身近な要素を取り入れた人材育成事業を主に展開する。	団体固有の独自性を活かした人材育成事業を主に展開する。
人材育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>県域や行政センター単位で実施する青少年支援・指導者の人材育成</li> <li>市町村域や青少年団体で中心的な存在となる青少年支援・指導者向けの研修</li> <li>青少年行政関係職員等の研修</li> <li>青少年支援・指導のための実践的調査研究</li> <li>青少年支援・指導者育成のための研修プログラム・展開方法の開発普及</li> <li>県域の青少年支援・指導者育成のための啓発</li> <li>大人・若者対象の青少年支援・指導者育成のための啓発</li> <li>青少年支援・指導者の育成への支援</li> <li>市町村が行う青少年支援・指導者の育成事業への助成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市町村域で実施する青少年支援・指導者の人材育成</li> <li>地域において中心的に活動している青少年支援・指導者の研修</li> <li>初心者向けの内容の研修</li> <li>青少年指導員への研修</li> <li>青少年補導員・相談員への研修</li> <li>健全育成会会員への研修</li> <li>ジュニアリーダー等の研修</li> <li>市町村域の青少年支援・指導者育成のための啓発</li> <li>大人・若者対象の青少年支援・指導者育成のための啓発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>団体内の青少年支援・指導者のための人材育成</li> <li>団体の独自性を活かし、団体内で体系化された研修</li> <li>団体の特性を活かした青少年支援・指導者育成のための啓発</li> <li>大人・若者対象の青少年支援・指導者育成のための啓発</li> </ul>
活動支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>県域を対象とした青少年関係情報の収集・提供</li> <li>県域の青少年支援・指導者(団体・個人)に対する青少年活動に必要な情報収集・提供</li> <li>市町村・青少年関係団体等に対する青少年支援・指導者育成に関する情報収集・提供</li> <li>青少年支援・指導者育成及び青少年活動のための講師に関する支援</li> <li>青少年支援・指導者育成及び青少年活動に関する講師リストの作成</li> <li>市町村・青少年関係団体等の実施する青少年支援・指導者育成事業への講師紹介</li> <li>県域の青少年支援・指導者(団体・個人)の行う青少年活動への講師紹介</li> <li>県域における青少年活動の場の紹介</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)への青少年活動の場の紹介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市町村域内の青少年関係情報の収集・提供</li> <li>市町村域の青少年支援・指導者(団体・個人)への青少年活動に必要な情報収集・提供</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)への県で実施している研修・講座の情報収集・提供</li> <li>県・青少年関係団体等への青少年支援・指導者育成に関する情報収集・提供</li> <li>市町村域内の青少年活動の場の提供</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)への青少年活動の場の提供</li> <li>市町村域内の青少年活動への支援</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)が行う青少年活動への人的支援</li> <li>青少年支援・指導者(団体)が行う青少年活動への資金的援助</li> <li>市町村域内の青少年活動への公的資源(物品、施設等)の貸し出し</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)が行う青少年活動への物品、施設等の貸し出し</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>団体独自の情報網を使った青少年活動に必要な情報収集・提供</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)への各団体独自の情報収集及びその提供</li> <li>講師派遣</li> <li>県・市町村・青少年関係団体等の実施する青少年支援・指導者育成への講師派遣</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)の行う青少年活動への講師派遣</li> <li>団体が独自に保有する青少年活動の場の提供</li> <li>青少年支援・指導者(団体・個人)への青少年活動の場の提供</li> </ul>
連携・調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>青少年支援・指導者育成機能を有効に発揮できるようにするための市町村・青少年関係団体等との連携・調整</li> <li>青少年指導者養成協議会の運営及び参加とその積極的活用</li> <li>県・市町村・青少年関係団体等と連絡会議や検討会議の開催</li> <li>県・市町村・青少年関係団体等の青少年支援・指導者育成に関する実施事業のとりまとめ</li> <li>県・市町村・青少年関係団体等で活動している青少年支援・指導者の実態把握に関するとりまとめ</li> <li>県域における青少年支援・指導者の人材の掘り起こし</li> <li>高等学校・大学・専門学校のボランティア関連のセクションや行政の生涯学習の機関・施設、NPO、企業との連携による人材の掘り起こし</li> <li>学校教育機関への情報提供</li> <li>青少年指導者養成協議会の事業(人材育成)内容についての周知</li> <li>県が把握している支援・指導者や研修修了者を学校支援ボランティアとして紹介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青少年支援・指導者育成機能を有効に発揮できるようにするための県・青少年関係団体等との連携・調整</li> <li>青少年指導者養成協議会への参加とその積極的活用</li> <li>市町村域内の青少年関係団体や他市町村等との情報交換、事業の協働開催による人材育成機能の充実</li> <li>市町村域内の青少年支援・指導者の裾野の拡大</li> <li>大人・若者向けに市町村で実施している公民館の講座等を利用した青少年活動に関心を持ってもらうための入門的講座</li> <li>中学校・高等学校・大学・専門学校のボランティア関連のセクションや行政の生涯学習の機関・施設、NPO、企業との連携による人材の掘り起こし</li> <li>学校教育機関への情報提供</li> <li>市町村が把握している支援・指導者や研修修了者を学校支援ボランティアとして紹介</li> <li>児童・生徒の受け入れ先として地域で活動している青少年関係団体等の活動の紹介</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青少年支援・指導者育成機能を有効に発揮できるようにするための県・市町村等との連携・調整</li> <li>青少年指導者養成協議会への参加とその積極的活用</li> <li>自らの団体の主催事業について県・市町村・他の青少年関係団体等と協働・連携・調整することによる人材育成機能の充実</li> <li>青少年支援・指導者の裾野の拡大</li> <li>大人・若者向けに団体が実施している講座等を利用した青少年活動に関心を持ってもらうための入門的講座</li> <li>中学校・高等学校・大学・専門学校のボランティア関連のセクションや行政の生涯学習の機関・施設、NPO、企業との連携による人材の掘り起こし</li> <li>学校教育機関への情報提供</li> <li>団体が把握している支援・指導者や研修修了者を学校支援ボランティアとして紹介</li> </ul>



## 「児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)」について

### < 子どもの権利保障に関するおもな成果 >

- 1924年 「ジュネーブ宣言」が国際連盟で採択される。
- 1959年 11月20日、「児童の権利に関する宣言」が国連総会で採択される。
- 1978年 ポーランドから国連人権委員会に「児童の権利に関する条約」の草案が提出される。
- 1979年 国際児童年。国連人権委員会は、ポーランド案を検討し、最終草案を作成するための作業部会を設置する。
- 1980年 「国際的な児童の奪取の民事的側面に関する協定」(ハーグ条約)が国際司法ハーグ会議で採択される。
- 1985年 「少年司法の運用のための国際連合最低基準規則」(北京規則)が国連総会で採択される。
- 1986年 「国内のまたは国際的な里親委託及び養子縁組を特に考慮した児童の保護及び福祉についての社会的及び法的な原則に関する宣言」が国連総会で採択される。ユニセフ執行理事会は「児童の権利に関する条約」の草案作りに全面的に協力することを決議する。
- 1989年 「児童の権利に関する宣言」採択30周年記念日の11月20日に、「児童の権利に関する条約」が国連総会で採択される。
- 1990年 1月26日、「児童の権利に関する条約」は、その支持を表明する署名のために開放され、61カ国が署名をする。  
9月2日、「児童の権利に関する条約」が発効する。  
9月21日、日本が109番目の署名国となる。
- 1991年 1月26日、「条約」が署名のために開放されてから1周年の記念日までに、130カ国が署名、70カ国が批准を終える。  
2月27日、「条約」締約国の第1回会合がニューヨークで開かれ、児童の権利委員会の10人の委員が選出される。
- 1994年 4月22日、日本が「条約」を批准し、158番目の締約国となる。

外務省の人権に関するホームページより転載

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/seka.html>

< 名称について >

条約の原題は「**Convention on the Rights of the Child**」である。日本政府は、「**Child**」を「児童」と訳し、「**児童の権利に関する条約**」としているが、民間団体は「子ども」と訳し、「**子どもの権利条約**」としている。日本の学校制度からいうと、「子ども」が適訳と考えられるという考え方による。この「**Child**」は「**18歳未満のすべての者**」という意味である。

「**子どもの権利条約**」という名称を使用している自治体もある。例えば以下である。

相模原市 [http://www.sagamihara-kng.ed.jp/study/kodomo\\_no\\_kenri/kenri\\_contents.html](http://www.sagamihara-kng.ed.jp/study/kodomo_no_kenri/kenri_contents.html)

大阪府 <http://www.pref.osaka.jp/jinken/work/child-treaty/index.html>

滋賀県 <http://www.pref.shiga.jp/bbs4/index.html>

三重県 <http://www.pref.mie.jp/GAKOKYO/gyousei/kenri/>

高知県 <http://www.pref.kochi.jp/~kodomo/kenrih.htm>

北海道 [http://www.ikuseikyo.jp/grow\\_kenri.htm](http://www.ikuseikyo.jp/grow_kenri.htm)

福岡県 <http://www.i-kyushu.or.jp/~fcc/kenri/kyushu.html>

これらの自治体は子ども向けのパンフレット等を作成し、子どもへの啓発を図っている。ちなみに神奈川県では「**児童の権利に関する条約**」という名称を使用している。

かながわ人権施策推進指針(本文)

<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/jinkendanjo/jinkensisin/sisin.htm>

<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/jidofukusi/sougouryouiku/jinken/sakuhinshu12/index.htm>

< 条約の位置づけ >

「**児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)**」は、1989年に成立して、1994年に日本は批准した。それによって、憲法と同等の上位法となっているので、これに基づいた施策が要請されている。しかし、現在のところ、この条約は軽視されているのではないかという論議もある。

1998年に、日本政府の報告に対して、国連・子ども権利委員会より、異例の44項目に及ぶ懸念、提案及び勧告が出され、それを受けて2001年に第2回目の報告を提出した。

1998年に、日本政府の第1回報告について、国連・子ども権利委員会で審議し、同年6月5日の会合で採択された最終見解が出された。この審議に際して、NGOの団体が、不登校や児童虐待など子どもの置かれている状況の報告書を別に提出し、審議会での審議の資料にとりあげられた。それが優れた内容の懸念、提案及び勧告になった。そして、いわゆる先進国における子どもの問題について、どう考えるべきか、問題提起にもなっている。

「**児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)**」の実施の中できまっている政府の報告義務によってなされた、1998年の国連・子ども権利委員会の最終所見に対する政府の第2回目報告は139ページに及ぶ長いものである。

## < 条約の基本 >

「**児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)**」は以下の 4 つの権利を基本的な考え方に据えている。

### 1 生きる権利

第 6 条 (生命への権利、生存・発達の確保)

- ・防げる病気などで命を奪われないこと。
- ・病気やけがをしたら治療を受けられることなど。

### 2 育つ権利

第 2 条 (あらゆる差別の禁止)

第 3 条 (子どもの最善の利益)

- ・教育を受け、休んだり遊んだりできること。
- ・考えや信じることの自由が守られ、自分らしく育つことができることなど。

### 3 守られる権利

第 2 条 (あらゆる差別の禁止)

第 19 条 (親による虐待・放任・搾取からの保護)

第 20 条 (家族環境をうばわれた子の保護)

第 34 条 (性的搾取、虐待からの保護)

第 39 条 (搾取、虐待、武力紛争等による被害を受けた児童の回復のための措置)

- ・あらゆる種類の虐待や搾取などから守られること。
- ・障害のある子どもや少数民族の子どもなどは特別に守られることなど。

### 4 参加する権利

第 12 条 (意見表明権)

- ・自由に意見を表したり、集まってグループを作ったり自由な活動を行ったりできることなど。

(財)日本ユニセフ協会抄訳 (<http://www.unicef.or.jp/kenri/syouyaku.htm>) を参考にした。

## < 意見表明権について >

基本的な 4 つの権利のうち「参加する権利」=「意見表明権」は子どもが社会の中で、大人と同様に認められた存在として扱われることを意味し、大人に向かって自分の考えや意見を自由に述べるができるということを意味している。

そのもっとも大切な意味は、次の 3 点にある。

### (1) 人間の尊厳の保障

無視されず、顔を自分に向けてもらう人間関係の形成によって、子どもは一人の人間としての尊厳を確保できるのである。

### (2) 居場所の保障

どんなことでも言える、安心と自信と自由を保障してくれる人間関係をとおしてはじめて、子どもは自律的で責任のある大人へと成長発達できるのである。

(3) 主体的な成長発達 = 自己実現の機会の保障

人間関係をとおして成長発達過程に自ら参加するから、今の人生を主体的に生きられるのである。

<「子どもの参画」という考え方へ>

この「意見表明権」は、「子どもの参画」という考え方の基本になっていて、この権利を保障することによって、子ども自身が自分で目標を選び取って、それに向かっていけるように、知識とか技能を子ども自身が身につけられるようにしていくことができる。

例えば地域活動などに「子どもの参画」を促進することで、地域社会で大切にされているという意識が子ども・若者に芽生え、また地域社会を居場所と感ずるようになる。そして最も大切なことは地域社会で民主主義のプロセスを実践し学ぶことができるということである。

資料 「児童の権利に関する条約」(政府訳)(前文、第12条)

前文

この条約の締約国は、国際連合憲章において宣明された原則によれば、人類社会のすべての構成員の固有の尊厳及び平等のかつ奪い得ない権利を認めることが世界における自由、正義及び平和の基礎を成すものであることを考慮し、

国際連合加盟国の国民が、国際連合憲章において、基本的人権並びに人間の尊厳及び価値に関する信念を改めて確認し、かつ、一層大きな自由の中で社会的進歩及び生活水準の向上を促進することを決意したことに留意し、

国際連合が、世界人権宣言及び人権に関する国際規約において、すべての人は人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、出生又は他の地位等によるいかなる差別もなしに同宣言及び同規約に掲げるすべての権利及び自由を享有することができることを宣明し及び合意したことを認め、

国際連合が、世界人権宣言において、児童は特別な保護及び援助についての権利を享有することができることを宣明したことを想起し、

家族が、社会の基礎的な集団として、並びに家族のすべての構成員、特に、児童の成長及び福祉のための自然な環境として、社会においてその責任を十分に引き受けることができるよう必要な保護及び援助を与えられるべきであることを確信し、

児童が、その人格の完全なかつ調和のとれた発達のため、家庭環境の下で幸福、愛情及び理解のある雰囲気の中で成長すべきであることを認め、

児童が、社会において個人として生活するため十分な準備が整えられるべきであり、かつ、国際連合憲章において宣明された理想の精神並びに特に平和、尊厳、寛容、自由、平等及び連帯の精神に従って育てられるべきであることを考慮し、

児童に対して特別な保護を与えることの必要性が、1924年の児童の権利に関するジュネー

ブ宣言及び 1959 年 11 月 20 日に国際連合総会で採択された児童の権利に関する宣言において述べられており、また、世界人権宣言、市民的及び政治的権利に関する国際規約（特に第 23 条及び第 24 条）、経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約（特に第 10 条）並びに児童の福祉に係る専門機関及び国際機関の規程及び関係文書において認められていることに留意し、

児童の権利に関する宣言において示されているとおり「児童は、身体的及び精神的に未熟であるため、その出生の前後において、適当な法的保護を含む特別な保護及び世話を必要とする。」ことに留意し、

国内の又は国際的な里親委託及び養子縁組を特に考慮した児童の保護及び福祉についての社会的及び法的な原則に関する宣言、少年司法の運用のための国際連合最低基準規則（北京規則）及び緊急事態及び武力紛争における女子及び児童の保護に関する宣言の規定を想起し、

極めて困難な条件の下で生活している児童が世界のすべての国に存在すること、また、このような児童が特別の配慮を必要としていることを認め、

児童の保護及び調和のとれた発達のために各人民の伝統及び文化的価値が有する重要性を十分に考慮し、

あらゆる国特に開発途上国における児童の生活条件を改善するために国際協力が重要であることを認めて、

次のとおり協定した。

## 第 12 条

1 締約国は、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する。この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。

2 このため、児童は、特に、自己に影響を及ぼすあらゆる司法上及び行政上の手続において、国内法の手続規則に合致する方法により直接に又は代理人若しくは適当な団体を通じて聴取される機会を与えられる。

活動事例分類一覧表

この分類表は、 の活動事例の表に対応しています。

スペースの関係で、「活動主体」のところは省略された単語を使っています。以下に記します。

JL:ジュニアリーダー、SL:シニアリーダー、子ども会:市の子ども会連絡協議会・単位子ども会等

青指協:青少年指導員連絡協議会、育成会:地区青少年育成協力会

NPO:公益性のある非営利団体、市民活動団体等、NPO法人:NPOのうち法人格を取得している団体

グレーの色が付いている事例は、第2章の取材事例です。

ページ	分類			事業名	団体名	関連組織	主催	参画の段階
	1 内容	2 活動主体	3 企画立案					
24	キャンプ	JL	青少年	アウトドア活動教室	港北区ジュニアリーダーズクラブ	港北区	港北区ジュニアリーダーズクラブ	8
57	キャンプ	SL	青少年	平塚市シニアリーダーズクラブ大イベント「キャンプ」	平塚市シニアリーダーズクラブ	平塚市	平塚市シニアリーダーズクラブ	8
57	キャンプ	行政	青少年と大人	チャレンジキャンプinびわ2003	平塚市青少年課	平塚市	平塚市市民部青少年課	6
58	キャンプ	行政	青少年と大人	中学生広場	秦野市青少年課	秦野市青少年指導員連絡協議会・秦野市子ども会育成連絡協議会・秦野リーダー研修	秦野市教育委員会	6
58	キャンプ	行政	青少年と大人	小学生広場	秦野市青少年課	秦野市	秦野市教育委員会	6
59	キャンプ	子ども会	青少年と大人	秦野市子連リーダー交流キャンプ	秦野市子ども会育成連絡協議会	リーダー研修クラブ	秦野市子ども会育成連絡協議会	6
59	キャンプ	JL	青少年	ジュニアリーダーキャンプ IN 七沢	JLC・OF・あやせ	綾瀬市子ども会育成連絡協議会	JLC・OF・あやせ	7
60	キャンプ	実行委員会	青少年	第10回あおばサマーキャンプ	あおばサマーキャンプ実行委員会	青葉区	青葉区	7
60	キャンプ	JL	青少年と大人	鶴見区子どもサマーキャンプ(JL当事者記入)	鶴見区ジュニアリーダーズクラブ	鶴見区地域振興課、鶴見区子ども育成連絡協議会、(社)横浜市レクリエーション協会、赤城キャンプ場	鶴見区ジュニアリーダーズクラブ	7
61	キャンプ	実行委員会	青少年と大人	アドベンチャーキャンプ in 赤城	アドベンチャーキャンプ実行委員会	瀬谷区役所	瀬谷区	6
61	キャンプ	JL	青少年	青少年キャンプ	大磯町ジュニアリーダーズクラブ	大磯町教育委員会	大磯町ジュニアリーダーズクラブ	6
62	キャンプ	青指協	青少年と大人	大井町子どもキャンプ	大井町青少年指導員協議会	足柄ふれあいの村	大井町青少年指導員協議会	6
62	キャンプ	青少年グループ	青少年と大人	かもしかキャンプ	かもしかクラブ	神奈川県、清川青少年の家	かもしかクラブ	7
63	研修	青少年グループ	青少年	第15回サークルありんこ自主研修会	ありんこ(大和市子ども会連絡協議会)	大和市子ども会連絡協議会	ありんこ	8
63	研修	育成団体	青少年と大人	川崎市青少年育成連盟中高校生リーダー研修	川崎市青少年育成連盟	川崎市	川崎市青少年育成連盟	6
64	研修	SL	青少年	JL研修「夏キャンプの楽しみ方」	シニアリーダーズクラブむげん	特になし	シニアリーダーズクラブむげん	7
64	研修	青指協	青少年と大人	平成15年度ジュニアリーダー・インリーダー研修会	愛川町青少年指導員連絡協議会	愛川ふれあいの村	愛川町青少年指導員連絡協議会	5
65	研修	子ども会	大人	平成15年度イン・ジュニアリーダー合同研修会	伊勢原市子ども会育成連絡協議会	伊勢原ジュニアリーダーズクラブ、成瀬ジュニアリーダーズクラブ	伊勢原市子ども会育成連絡協議会	6
65	研修	子ども会	大人	平成16年度イン・ジュニアリーダー合同研修会	伊勢原市子ども会育成連絡協議会	伊勢原ジュニアリーダーズクラブ、成瀬ジュニアリーダーズクラブ	伊勢原市子ども会育成連絡協議会	6
66	研修	青少年グループ	青少年と大人	中学生リーダー研修事業	中学生リーダー	特になし	(財)藤沢市青少年協会	6
66	研修	青少年グループ	青少年	高校生リーダー研修事業	高校生リーダー	特になし	(財)藤沢市青少年協会	7
67	研修	子ども会	青少年と大人	子ども会リーダー野外研修会	座間市子ども会育成連絡協議会	宮ヶ瀬共栄貯蓄会(森林組合)	座間市子ども会育成連絡協議会	4
67	研修	JL	青少年と大人	ジュニアリーダー初中級養成研修会	厚木市ジュニアリーダーズクラブ連絡協議会	厚木市青少年指導員連絡協議会	厚木市ジュニアリーダーズクラブ連絡協議会	6

活動事例分類一覧表

ページ	分類			事業名	団体名	関連組織	主催	参画の段階
	1 内容	2 活動主体	3 企画立案					
68	研修	JL,SL	青少年と大人	第32回関東甲信越静地区子ども会ジュニアリーダー大会	神奈川子ども会連絡協議会	全国子ども会連合会	神奈川子ども会連絡協議会	6
68	研修	子ども会	大人	インリーダー研修会	小田原子ども会連絡協議会	ジュニアリーダーズクラブ	小田原子ども会連絡協議会	7
69	研修	青指協	青少年と大人	地域少年リーダー養成講座	小田原教育委員会	小田原青少年指導員協議会	小田原青少年指導員協議会	6
16	交流	青少年グループ	青少年	かながわユースボランティアミーティング in 神奈川	かながわユースボランティアりんくファクトリー	神奈川県青少年協会、県立逗子高等学校ボランティアセンター等	かながわユースボランティアりんくファクトリー	8
70	交流	ボーイスカウト	青少年と大人	第3回スカウトキャンボリー	日本ボーイスカウト神奈川連盟 横浜南央地区	ガールスカウト日本連盟横浜友好団、国立那須甲子少年自然の家	日本ボーイスカウト神奈川連盟 横浜南央地区	6
70	交流	ガールスカウト	青少年と大人	日韓ガールスカウト交流事業	ガールスカウト日本連盟神奈川支部	ガールスカウト日本連盟	ガールスカウト神奈川支部	8
71	交流	実行委員会	青少年と大人	青少年国際化推進事業	青少年国際化推進事業実行委員会	特になし	青少年国際化推進事業実行委員会	7
71	交流	実行委員会	青少年と大人	平成16年度奈川村青少年ふれあい交流	湯河原町親善都市子ども交流推進事業実行委員会	湯河原町子ども会	湯河原町親善都市子ども交流推進事業実行委員会	6, 7
72	交流	行政	青少年と大人	横須賀市ジュニアリーダー他都市交歓会(2月)	横須賀市	平塚市・横須賀市ジュニアリーダー養成講習会OB会、平塚市ジュニアリーダーズクラブ	横須賀市	7
72	交流	行政	青少年と大人	横須賀市ジュニアリーダー他都市交歓会(6月)	横須賀市	平塚市・葉山町・横須賀市ジュニアリーダー養成講習会OB会、平塚市・葉山町ジュニアリーダーズクラブ	横須賀市	7
73	交流	JL	青少年	ジュニアリーダー他都市交歓会(6月)	葉山町ジュニアリーダーズクラブ	横須賀市、平塚市青少年課、横須賀市田浦青少年自然の家	横須賀市	7
73	交流	実行委員会	大人	平塚市海洋少年団交流事業	平塚市海洋少年団交流事業実行委員会	東海大学	平塚市海洋少年団交流事業実行委員会	5
74	交流	子ども会	大人	今市市・小田原子ども会交歓会	小田原子ども会連絡協議会	今市市、今市市子ども会連絡協議会等	小田原子ども会連絡協議会	4
74	交流	行政	青少年と大人	小田原市・岸和田市青少年活動交流	小田原教育委員会	小田原シニアリーダーズクラブへ委託	小田原教育委員会	4
75	成人式	実行委員会	青少年と大人	平成15年度 やまと成人式	平成15年度やまと成人式実行委員会	(社)大和青年会議所・大和商工会議所、大和市母親クラブ連絡協議会・大和市青少年指導員連絡協議会・桜林会・林間着付サークル・大和ユースクラブ・サークルありんこ	平成15年度やまと成人式実行委員会	6
75	成人式	実行委員会	青少年と大人	新成人のつどい	新成人のつどい実行委員会	秦野市青少年指導員連絡協議会、秦野市相談員連絡協議会	秦野市、秦野市教育委員会	6
76	成人式	実行委員会	青少年	平成17年平塚市成人式	平成17年平塚市成人式実行委員会	ボランティア	平塚市市民部 青少年課	6
76	成人式	実行委員会	青少年と大人	山北町成人式(第2部)	山北町成人式実行委員会	山北町青少年指導員	山北町成人式実行委員会	6
77	成人式	実行委員会	青少年と大人	平成16年成人式	平成16年成人式実行委員会	青少年指導員連絡協議会	南足柄市	6
77	成人式	実行委員会	青少年と大人	成人のつどい開催事業	綾瀬市成人のつどい実行委員会	青少年指導員、青少年補導員、市子連、JLCから1名ずつ委員を選出	綾瀬市青少年課	6
78	成人式	実行委員会	青少年	平成16年「成人の日」を祝うつどい	平成16年「成人の日」記念事業実行委員会	横浜市、横浜市教育委員会、横浜市選挙管理委員会(共催)	「成人の日」記念事業実行委員会	8
78	成人式	実行委員会	青少年と大人	成人式	小田原市・小田原市教育委員会	成人式運営委員会を組織、小田原市青少年育成推進協議会や小田原市シニアリーダーズクラブの協力	小田原市・小田原市教育委員会	6
79	成人式	青少年グループ	青少年	平成16年相模原市はたちのつどい	はたちのしゃべり場!!	特になし	成人式自体は市の主催だが、活動自体は団体が自主的に実施	6
79	成人式	実行委員会	青少年	平成16年成人式「津久井町はたちのつどい」	はたちのつどい実行委員会	町青少年指導員、町交通指導隊、町明るい選挙推進協議会	津久井町・津久井町教育委員会	3
80	まつり	実行委員会	青少年と大人	浅間祭	浅間祭実行委員会	特になし	浅間祭実行委員会	8

活動事例分類一覧表

ページ	分類			事業名	団体名	関連組織	主催	参画の段階
	1 内容	2 活動主体	3 企画立案					
80	まつり	実行委員会	青少年と大人	青少年フェスティバル	川崎市青少年育成推進委員会	川崎市	川崎市青少年育成推進委員会	6
81	まつり	実行委員会	青少年	海老名市青年の祭典	海老名市青年の祭典実行委員会	海老名市	海老名市青年の祭典実行委員会	7
81	まつり	子ども会	大人	ふれあい子どもフェスティバル	小田原市子ども会連絡協議会	ジュニアリーダーズクラブ	小田原市子ども会連絡協議会	4
82	まつり	子ども会	大人	北條五代祭	小田原市子ども会連絡協議会	小田原市観光協会	小田原市観光協会	4
82	まつり	実行委員会	青少年	市民まつり模擬店出店	逗子市子ども会連絡協議会	特になし	逗子市子ども会連絡協議会	6
83	子ども会議	青少年グループ	青少年	川崎市子ども会議宿泊交流会	川崎市子ども会議	川崎市青少年の家、宮前区子ども会議委員	川崎市子ども会議	6
83	子ども会議	NPO法人	大人	21世紀淡海子ども未来会議設置運営事業	NPO生涯学習研究所(滋賀県委託)	県の各地域振興局	NPO生涯学習研究所	6
84	子ども会議	NPO	大人	第7回 2003神奈川ふれあい子どもサミット	神奈川の教育を推進する県民会議	県内各地の「地域に子ども会議」(9団体)	神奈川の教育を推進する県民会議	6
84	子ども会議	運営委員会(青少年)	青少年と大人	川崎市子ども夢パーク子ども運営委員会	川崎市子ども夢パーク	子ども夢パーク運営委員会、子ども夢パーク支援委員会	川崎市子ども夢パーク	5
38	子ども会議	運営委員会(青少年)	青少年と大人	町田市子どもセンターばあん 子ども委員会	町田市子どもセンターばあん	特になし	町田市子どもセンターばあん	8
45	子ども会議	運営委員会(青少年)	大人	横浜市青少年交流センター青少年委員会	横浜市青少年交流センター青少年委員会	特になし	横浜市青少年交流センター	6
85	スポーツ	JL	大人	大運動会	JLC・OF・あやせ	綾瀬市子ども会育成連絡協議会	JLC・OF・あやせ	7
85	スポーツ	子ども会	青少年と大人	リーダー企画「秋の行事」	逗子市子ども会連絡協議会	共催：県立逗子高等学校協賛：逗子体操クラブ等	逗子市子ども会連絡協議会	6
86	スポーツ	子ども会	大人	球技大会	小田原市子ども会連絡協議会	小田原市内小学校(4校)	小田原市子ども会連絡協議会	4
86	スポーツ	JL	青少年	スポーツ大会兼親睦会	茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ	茅ヶ崎市子ども会連絡協議会 香川公民館、鶴ヶ台小学校	茅ヶ崎市ジュニアリーダーズクラブ	8
87	地域活動	JL	青少年	平塚市ジュニア・リーダーズクラブ	平塚市ジュニア・リーダーズクラブ	各地区子ども会・平塚市青少年課	平塚市市民部青少年課	7
87	地域活動	NPO	青少年と大人	わくわく冒険隊	わくわく冒険隊	冒険遊び場つくい、津久井町一周山歩き隊	わくわく冒険隊	6
88	地域活動	育成団体	大人	港南区こどもフォーラム	青少年健全育成を推進する会	港南区役所共催、区内小学校	青少年健全育成を推進する会	4
88	地域活動	青少年グループ	青少年	わくわく冒険隊、ジュニア・シニアクラブ、ユースボランティア	大和ユースクラブ	大和市青少年指導員連絡協議会、大和市子ども会連絡協議会、大和市母親クラブ連絡協議会	大和ユースクラブ	7
89	ボランティア体験活動	高校生	青少年と大人	高齢者とのふれあい活動アニマルセラピー	日本大学藤沢高等学校生物部	特になし	日本大学藤沢高等学校生物部	7
89	ボランティア体験活動	社団法人	青少年と大人	青少年のボランティア体験活動	(社)神奈川県青少年協会	厚木市、相模原市、茅ヶ崎市、大和市、各市社会福祉協議会、ボランティアセンター、NPOセンター他	(社)神奈川県青少年協会	6
90	イベント	JL	青少年と大人	わくわくホリデープラン この指止まれ!	愛川町教育委員会・ジュニアリーダーズクラブ	愛川町	愛川町教育委員会	6
90	イベント	青少年グループ	青少年	あそびっこ隊	さがみちびっこクラブ	特になし	さがみちびっこクラブ	7
91	宿泊体験	青指協	青少年と大人	中学生とのつどい	箱根町青少年指導員連絡協議会	特になし	箱根町青少年指導員連絡協議会	6
91	宿泊体験	実行委員会	青少年と大人	自然ふれあい教室	自然ふれあい教室実行委員会	藤沢市教育委員会(後援)	(財)藤沢市青少年協会	8
92	体験活動	社団法人	大人	よこはまこどもマリンスクール	(社)横浜市レクリエーション協会	横浜市水泳協会、帆船日本丸記念財団、野島青少年研修センター、南伊豆臨海学園、子ども自然公園野外活動センター、三ツ沢公園青少年野外活動センター	横浜市教育委員会	4



活動事例分類一覧表

ページ	分類			事業名	団体名	関連組織	主催	参画の段階
	1 内容	2 活動主体	3 企画立案					
92	体験活動	子ども会	青少年	子ども会活性化事業「うどん作りを体験しよう」	小金原単位子ども会育成会	厚木市立七沢自然教室	小金原単位子ども会育成会	6
10	冒険遊び場	NPO	青少年と大人	片倉うさぎ山プレイパーク	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会	特になし	片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会	6
93	冒険遊び場	NPO	大人	冒険遊び場つづきの遊びの日	冒険遊び場つづい	わくわく冒険隊、中野小PTAサークル	冒険遊び場つづい	6
27	情報誌発行	青少年グループ	青少年	子どもによる市民のための情報誌「WAVE桜」	WAVE桜編集局	NPO佐倉こどもステーション	WAVE桜編集局	7.5
93	広場あそび	青少年グループ	青少年	あそぼう会	特定非営利法人松戸子ども劇場	特になし	松戸子ども劇場	8
50	店舗経営	高校生	青少年と大人	チャレンジショップ Gestoreおだわら	小田原城東高等学校	県、小田原市等	小田原城東高等学校	6
94	ナイトウォーク	SL	青少年	ナイト・ウォーク2003	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	特になし	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	7
29	電話相談	青少年グループ	青少年と大人	チャイルドライン千葉子ども電話 若者ライン	特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター	チャイルドライン全国支援センター 千葉県内の子育て関連機関	特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター	5
94	レクゲーム	子ども会	青少年と大人	ふれあいレクリエーション	愛川町子ども会連絡協議会、愛川町教育委員会、愛川町老人クラブ連合会	特になし	愛川町子ども会連絡協議会、愛川町教育委員会、愛川町老人クラブ連合会	6
95	きもだめし	育成団体	大人	きもだめし大会	善行地区青少年育成協会の会	大越小、善行小、善行中PTA、三者ふれあいネットワーク	善行地区青少年育成協会の会	6
95	演劇	NPO	青少年と大人	教育を守る会50周年記念事業	神奈川県教育を守る会	教職員を中心とした合唱団、障害者のグループ、外国籍の子等	神奈川県教育を守る会	6と7との間
96	人形劇	実行委員会	大人	子ども人形劇団	子ども人形劇団実行委員会	小田原市内アマチュア人形劇団	子ども人形劇団実行委員会	6
96	ライブ	実行委員会	青少年と大人	ライブ in 山北	ライブ in 山北 実行委員会	山北町青少年指導員協議会	山北町青少年指導員協議会	6
20	ダンス	実行委員会	青少年と大人	藤沢ダンスMIX Ver.6	藤沢ダンスMIX Ver.6 実行委員会	藤沢市・藤沢市教育委員会、レディオ湘南	(財)藤沢市青少年協会	6
97	講座	青少年団体	青少年と大人	ヒラツカ・ユース・カルチャー・サークル	ヒラツカ・ユース・カルチャー・サークル	平塚市	ヒラツカ・ユース・カルチャー・サークル	6
97	国際理解	SL	青少年	国際シンポジウム	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	小田原市	小田原市シニア・リーダーズ・クラブ	6
98	活動発表会	行政	大人	青少年と育成者のつどい	青少年問題協議会・教育委員会	小田原市青少年指導員協議会	小田原市教育委員会	4
98	子どもの遊び	青少年グループ	青少年と大人	あそびの学校	あそびの学校運営委員会	特になし	相模原市青少年学習センター	7
5	フリースペース	NPO法人	青少年と大人	フリースペースえん (居場所における参画「壁に描こう」プロジェクト)	特定非営利活動法人 フリースペースたまりば	川崎市子ども夢パーク、神奈川子ども未来ファンド、県内外のフリースクール・フリースペース、チャイルドライン、神奈川思春期サポート懇談会等	フリースペースえん	5(プロジェクトについては7)

# 参 考 文 献

## 『子どもの参画』に関する文献

- 赤池学・金谷年展・中雄政幸, 2000. 『心に火をつける人、消す人』. TBSブリタニカ
- 岡本包治編, 1989. 『青少年の地域参加』. ぎょうせい
- 喜多明人, 1995. 『新世紀の子どもと学校 - 子どもの権利条約をどう生かすか』. エイデル研究所
- 喜多明人・坪井由実・林量俣・増山均編, 1996. 『子どもの参加の権利』. 三省堂
- 木下勇, 1996. 『遊びと街のエコロジー』. 丸善株式会社
- 子どもの参画情報センター編, 2002. 『子ども・若者の参画』. 朋文社
- 子どもの参画情報センター編, 2004. 『居場所づくりと社会つながり』. 朋文社
- 佐藤一子・増山均編, 1995. 『子どもの文化権と文化的参加』. 第一書林
- 田中治彦, 1988. 『学校外教育論』. 学陽書房
- 日本子どもを守る会編, 2001. 『子ども白書 2001 年版』. 草土文化
- ハート,R., 1997/2000, (木下勇・田中治彦・南博文監修). 『子どもの参画 - コミュニティづくりと身近な環境  
ケアへの参画のための理論と実際 - 』. 萌文社
- 林義樹, 1994. 『学生参画授業論』. 学文社
- 松原治郎, 1978 『日本の青少年 ~ 青少年教育の提唱 ~ 』. 東京書籍
- Youth Empowerment 実行委員会, 2001. 『POWER of the Youth ~ 若者の参画がNPO活動に必要な理由』
- レイブ,J.・ウェンガー,E., 1991/1993. (佐伯胖訳). 『状況に埋め込まれた学習 - 正統的周辺参加 - 』. 産業図書

## 『体験学習』に関する文献

- 相川充・津村俊充(共編), 1996. 『社会的スキルと対人関係 - 自己表現を援助する - 』. 誠信書房
- 伊藤義美(編), 2002. 『ヒューマニスティック・グループ・アプローチ』. ナカニシヤ出版
- 岡島成行, 2001. 『自然学校をつくろう あなたも自然体験活動のリーダーになれる』. 山と溪谷社
- 神奈川県立青年の家合同研修会編, 1998. 『体験学習の手引』. 神奈川県立青年の家
- 川嶋直・佐藤初雄・平野吉直・星野敏男(編), 2001. 『野外教育入門』. 小学館
- 九里徳泰 / Be - pal編集部, 『親と子の週末 48 時間「小学校週休2日・総合学習」時代の自然遊びマニュアル』. 小学館
- 津村俊充・石田裕久(共編), 2003. 『ファシリテーター・トレーニング 自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ』. ナカニシヤ出版
- 津村俊充・星野欣生, 2003. 『教師のための体験学習実習集 Creative School クリエイティブ・スクール - 生き生きとしたクラスをつくるために - 』. プレスタタイム
- 津村俊充(編著)・岡本真一郎・大坊郁夫・和田実・林文俊・安藤清志・他 48 名, 2002. 『子どもの対人関係能力を育てる』. 教育開発研究所
- 津村俊充・星野欣生, 1996. 『クリエイティブ・ヒューマン・リレーションズ全8巻』. プレスタタイム
- 津村俊充・山口真人(共編), 1992. 『人間関係トレーニング 私を育てる教育への人間学的アプローチ』. ナカニシヤ出版
- クレイドラー,W.J.・ファーロン,L.・コウレス,L.・ブラウティー,I.(著)・プロジェクトアドベンチャー・ジャパン(翻訳), 2001. 『対立がちからに』. C.S.L 学習評価研究所
- 諸澄敏之, 2001. 『よく効くふれあいゲーム 119』. 杏林書院

## 編集後記

神奈川県青少年指導者養成協議会では平成 16 年 3 月に「かながわ青少年支援・指導者育成指針」(以下、指針)を策定しました。その指針を絵に描いた餅にしてはならないという考えのもとに、平成 16 年 7 月に専門部会を立ち上げ、多くの人実際に手に取り、活用していただけるような生きた事例集づくりを目指しました。

事例集のテーマには、指針の中で青少年の育成の視点とした「多様な体験学習の促進」「主体的な参画の促進」「社会的自立の支援」の3本柱のうちの「主体的な参画の促進」を中心に据えました。それは、子ども・若者が主体的に参画する活動を通して、体験学習することが、社会的に自立するきっかけになるという考え方によるものです。このような活動事例を調査・取材により、収集しました。お忙しい中、調査・取材に御協力いただいた関係機関、団体、個人の皆様、本当にありがとうございました。

夏の暑い時期から秋にかけて取材に出かけ、たくさんの方のお話を聞かせていただきました。その中で「子どもの参画」には「大人」が必要であるということ、改めて考えさせられました。しかし、それは従来の青少年活動にありがちな、大人が設定した枠の中で、子ども・若者をともしればお客さんにしてしまうような役割としての「大人」ではありません。子ども・若者が、どんなに小さな(大人が見て、それが稚拙に見えても)ことでも自分で選択し、自分の考えで進めているような活動(遊びでもいい)に対して、暖かいまなざしで見守り、支えていく役割としての「大人」なのです。それが失敗に終わったときにも、マイナス評価をするのではなく次のステップにつながるようにフォローする役割も必要です。このような役割が、指針の中でいう青少年支援・指導者の役割なのです。

したがって今回の事例集では、活動の中で大人が何を引き受け、どう子ども・若者を支援するのかに焦点を当てた子ども・若者との関わり方の事例集になっています。また活動を通して、子ども・若者が自らの成長に気づき、社会的な自立へのきっかけにしている姿も出てきます。

最後に、ぜひこの事例集を活動に役立てていただきたいのですが、「子どもの参画」という形にこだわりすぎないでほしいということも付け加えておきます。すぐに彼らが活動を始めるということはありません。無理やり、子ども・若者が参画しているように見える(見せる)活動を大人が整えてほしくないということです。子ども・若者がやる気を出すような工夫が必要ですが、やはり自発的に動き出すのを待つ姿勢も大切です。また子どもも大人もお互いに遠慮せず意見を出し合える関係づくりも必要です。そういう意味で時間がかかります。大人が自信を持って、前を向いて自分らしく生きている姿を子どもに見せてあげることが、子ども・若者が自分自身が考えるヒントになると思います。そして、子ども・若者・大人が皆愉快になれるような魅力のある活動が、各地域で立ち上がることを期待しています。

平成 17 年 3 月

神奈川県青少年指導者養成協議会 事務局

平成 16 年度神奈川県 青少年指導者養成協議会 専門部会委員

< 委 員 >

相模原市生涯学習部青少年課	主任	高野 靖彦
津久井町生涯学習センター	主任主事	中島 理志
(特非)藤沢市市民活動推進連絡会	理事	手塚 明美
(社)横浜ボランティア協会		
横浜市青少年交流センター	主事	富岡 克之
(財)横浜中央YMCA 健康教育部	主任	宮崎 亮
県立足柄ふれあいの村	副主幹	諸澄 敏之
県立清川青少年の家	主査	平野 幸徳

< 事務局 >

県立青少年センター

青少年支援部長兼指導者育成課長	横田 直
副主幹	川手 隆生
副主幹	日吉 教之

(この冊子は上記委員に検討していただき作成しました。)

編 集 神奈川県青少年指導者養成協議会

発 行 平成 17 年 3 月

神奈川県立青少年センター

〒 220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘 9-1

電話 045-263-4466

F A X 045-242-8190

